

たまだいせき

玉田遺跡

ふなこしたかはらAいせき

船越高原A遺跡Ⅳ

にしくまのうえなかごうらいせき

西隈上中川原遺跡

—福岡県久留米市田主丸町・うきは市浮羽町所在遺跡の調査—

序

福岡県教育委員会では、国土交通省九州地方整備局の委託を受け、昭和54年度から一般国道210号線浮羽バイパスの建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。現在、うきは市内の大部分で調査が終了し、一部の区間で一般供用が開始されています。

本報告書は、平成16年度に実施した久留米市田主丸町常盤に所在する玉田遺跡、同市田主丸町船越に所在する船越高原A遺跡第6次、平成17年度に実施した、うきは市浮羽町西隈上に所在する西隈上中川原遺跡の調査の記録です。玉田遺跡は台地の裾部の調査で、明確な遺構はほとんどみられませんでした。台地上から流れ込んだ弥生時代～古代の様々な遺物が多く出土しました。船越高原A遺跡では弥生時代～古代の集落跡を確認し、同時期の遺物も多く出土しました。西隈上中川原遺跡では、弥生時代末～古墳時代初頭の流路や溝を調査し、同時期の遺物が多く出土しました。それぞれ、この地域における歴史の一端をかいま見ることができる貴重な成果を得ることができたものと考えています。

本書が、地域文化の研究や教育資料として、また文化財愛護思想の浸透に寄与できれば幸いです。

発掘調査、整理作業及び報告書の作成に御協力・御助言をいただいた多くの方々に対し、心から感謝申し上げます。

平成20年3月31日

福岡県教育委員会委員長
教育長 森山 良一

例言

- 1.この報告書は平成16（2005）～17（2006）年度に福岡県教育委員会が国土交通省九州地方整備局の委託を受け実施した一般国道210号浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財の発掘調査記録であり、昭和58（1983）年より刊行を開始した一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第25集となる。
- 2.本書に記録した玉田遺跡は一般国道210号浮羽バイパスの埋蔵文化財調査第14地点に、船越高原A遺跡は同じく10地点に、また西隈上中川原遺跡は同じく第19地点に当たる。玉田遺跡は福岡県久留米市田主丸町大字常盤に、船越高原A遺跡は久留米市田主丸町大字船越に、西隈上中川原遺跡は福岡県うきは市浮羽町大字西隈上に所在する。
- 3.玉田遺跡の発掘調査は今回が第1次調査にあたる。船越高原遺跡の発掘調査は平成8～12年度にA地区（船越高原A遺跡第Ⅰ～Ⅲ区）を5次にわたって福岡県教育委員会が調査を実施しており、本報告書はこれらに引き続き平成16年度に行われた第6次調査の報告に当たる。なお隣接するB～D地区は田主丸町教育委員会が調査を実施している。西隈上中川原遺跡は今回が第1次調査にあたる。
- 4.今回報告する玉田遺跡第1次調査地点は久留米市田主丸町大字常盤992-2・993-2・995-3を、船越高原A遺跡第6次調査は久留米市田主丸町大字船越43-1を、西隈上中川原遺跡はうきは市浮羽町西隈上478-2・478-3・479・480-1・480-3・480-4を対象とした。
- 5.今回掲載した遺構図は、玉田遺跡については小澤が中心となってこれを作成し、一瀬智・高松智・大塚ヒロ子・小西富美子・小西裕子・中村弘子の協力を得た。船越高原A遺跡については宮地が作成した。西隈上中川原遺跡については一瀬が中心となってこれを作成し、飯田澄江・石橋丸子・江藤智幸・坂本サダ子・檜崎俊平・山口由美子の協力を得た。
- 6.本書に掲載した遺構写真は、玉田遺跡については小澤が、船越高原A遺跡については宮地が、また西隈上中川原遺跡については一瀬が撮影し、遺物写真は北岡伸一が撮影した。空中写真は九州航空株式会社、東亜航空技研株式会社に委託した。
- 7.本書で使用した方位は、国土調査法第二座標系に基づく座標北である。
- 8.出土遺物の整理・復元作業は九州歴史資料館において大庭孝夫・坂元雄紀・濱田信也の指導のもとに実施した。
- 9.出土遺物・写真・図面はすべて九州歴史資料館及び文化財保護課太宰府事務所に保管している。
- 10.本書の執筆は、担当した調査に従い、玉田遺跡を小澤が、船越高原A遺跡を宮地が、西隈上中川原遺跡を一瀬が行った。編集は各執筆者の協力を得て小澤が行った。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	調査の経過	2
第1項	玉田遺跡	2
第2項	船越高原A遺跡6次	3
第3項	西隈上中川原遺跡	3
第3節	調査の組織	3
第2章	位置と環境	5
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	7
第3章	玉田遺跡の調査の記録	13
第1節	遺跡の概要と基本層序	13
第2節	検出遺構と出土遺物	14
第1項	はじめに	14
第2項	溝状遺構	17
第3項	包含層出土土器	18
第4項	その他の遺物	34
第3節	小結	38
第4章	船越高原A遺跡第6次調査の記録	39
第1節	遺跡の概要と基本層序	39
第2節	第1遺構面の検出遺構と出土遺物	41
第1項	竪穴住居跡	41
第2項	土坑・溝	51
第3項	第1遺構面出土の土器	56
第3節	第2遺構面の検出遺構と出土遺物	56
第1項	竪穴住居跡	56
第2項	土坑	71
第3項	溝	76
第4項	ピット出土土器	78
第5項	第2遺構面出土の土器	79
第4節	包含層出土土器、その他土製品、石器	80
第1項	包含層出土土器	80
第2項	土製品・石器	82
第5節	小結	82
第5章	西隈上中川原遺跡の調査の記録	84
第1節	遺跡の概要と基本層序	84
第2節	検出遺構と出土遺物	85
第1項	溝	85
第2項	その他の遺構	91
第3項	その他の遺物	95
第3節	小結	96
第6章	おわりに	97

図版目次

玉田遺跡

- 図版1 1 調査区周辺地形（西から） 2 調査区周辺地形（東から）
図版2 1 遺構面全景（上が北） 2 I区遺構面、1号溝（上が北）
図版3 1 I区南端部東壁基本土層（西から） 2 I区西壁基本土層（東から）
3 II区東端部北壁基本土層、1号溝土層（南から）
図版4 1 II区西壁基本土層（北東から） 2 II区西壁土層北半部（東から）
3 II区西壁土層南半部（東から）
図版5 1 II区東端部南壁基本土層、1号溝土層（北から）
2 III区西端部南壁基本土層（北から） 3 III区中央部基盤土層（北から）
図版6 1号溝、I区1層、I区2層、II区15層、I区10層出土土器
図版7 I区10層、II・III区10層出土土器
図版8 出土土製品、石器、石製品

船越高原A遺跡6次調査

- 図版9 1 調査区遠景（北から） 2 第1遺構面全景（北から）
図版10 1 第1遺構面全景（西から） 2 第2遺構面全景（北から）
図版11 1 調査区西壁土層（東から） 2 1号竪穴住居跡（南東から）
3 1号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版12 1 2号竪穴住居跡（南東から） 2 2・3号竪穴住居跡（南から）
3 3号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版13 1 4号竪穴住居跡（南東から） 2 4号竪穴住居跡カマド（南東から）
3 5号竪穴住居跡（南東から）
図版14 1 1号土坑（東から） 2 1号溝（北から） 3 2・3号溝（北東から）
図版15 1 4号溝（北西から） 2 6号竪穴住居跡（東から） 3 7号竪穴住居跡（東から）
図版16 1 8号竪穴住居跡（南から） 2 9号竪穴住居跡（南東から） 3 2号土坑（東から）
図版17 1 3号土坑（北東から） 2 4号土坑（西から） 3 5号土坑（南西から）
図版18 1 6号土坑（南東から） 2 7号土坑（北から） 3 8号土坑（北から）
図版19 1 9号土坑（南東から） 2 10号土坑（南から） 3 11号土坑（西から）
図版20 1 12号土坑（北から） 2 5・6号溝（北西から） 3 7号溝（南西から）
図版21 1～4号竪穴住居跡出土土器
図版22 4～7号竪穴住居跡、1号土坑出土土器
図版23 7号竪穴住居跡、5・10号土坑出土土器
図版24 遺跡出土土製品・石器

西隈上中川原遺跡

- 図版25 1 調査区遠景（東から） 2 調査区遠景（南から）
図版26 1 西区空中写真（上が西） 2 東区空中写真（上が西）
図版27 1 東区全景（西から） 2 1-1・1-2号溝（南東から）
3 東区2-1・2-2号溝（西から）
図版28 1 3号溝（南西から） 2 4号溝（北西から） 3 西区2-1・5号溝（西から）
図版29 1 5号溝北岸遺物（15）出土状況①（東から）
2 5号溝北岸遺物（16）出土状況②（東から） 3 6・7・8号溝（西から）
図版30 1 南東部落ち南半部（東から） 2 南東部落ち北半部（北東から）
3 南東部落ち土層断面（北から）
図版31 出土土器・石器・石製品
図版32 1 両筑平野南部（東から） 2 両筑平野南部（西から）

挿図目次

第1図	周辺遺跡分布図 (1/5000)	9
第2図	玉田遺跡周辺地形図 (1/3000)	13
第3図	玉田遺跡調査区配置図 (1/300)	15
第4図	I区北・II区南・III区南・III区中央壁土層図 (1/60)	16
第5図	II区西壁土層図 (1/60)	17
第6図	1号溝出土土器実測図 (1～7は1/4、他は1/3)	19
第7図	I区1層出土土器実測図その① (1～3は1/4、他は1/3)	20
第8図	I区1層出土土器実測図その② (1/3)	21
第9図	II区1層出土土器実測図 (1～4は1/4、他は1/3)	22
第10図	I区2層出土土器実測図 (1～4は1/4、他は1/3)	24
第11図	II区9層出土土器実測図 (1～3は1/4、他は1/3)	25
第12図	I区15層出土土器実測図 (1/4)	27
第13図	II区15層出土土器実測図 (1～21は1/4、他は1/3)	28
第14図	I区10層出土土器実測図その① (1/4)	31
第15図	I区10層出土土器実測図その② (1/4)	32
第16図	I区10層出土土器実測図その③ (1/3)	33
第17図	II区・III区10～12層出土土器実測図 (1/4)	35
第18図	トレンチ・検出面等出土土器実測図(1～8は1/4、他は1/3)	36
第19図	遺跡出土土製品・石製品実測図(1～12は1/2、他は1/4)	37
第20図	船越高原遺跡周辺地形図 (1/3000)	39
第21図	船越高原遺跡第6次調査区遺構配置図 (1/300)	40
第22図	調査区西壁基本土層図 (1/30)	41
第23図	1号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)	42
第24図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	43
第25図	2号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)	44
第26図	2号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	45
第27図	3号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)	46
第28図	2・3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	47
第29図	4・5号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)	48
第30図	4号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	49
第31図	5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	51
第32図	1号土坑、1～4号溝実測図 (1/30)	52
第33図	1号土坑出土土器実測図その① (1/3)	53
第34図	1号土坑出土土器実測図その② (1/3)	54
第35図	1～4号溝出土土器実測図 (1/3)	54
第36図	第1遺構面出土土器実測図 (1/3)	55
第37図	6・7号竪穴住居跡実測図 (1/60)	57
第38図	6号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4)	58
第39図	6号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4)	59
第40図	6号竪穴住居跡出土土器実測図その③ (1/4)	60
第41図	7号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4)	61
第42図	7号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4)	63
第43図	7号竪穴住居跡出土土器実測図その③ (1/4)	64
第44図	7号竪穴住居跡出土土器実測図その④ (1/4)	65
第45図	7号竪穴住居跡出土土器実測図その⑤ (1/4)	66

第46図	8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60) ……………	66
第47図	8号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4) ……………	67
第48図	8号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4) ……………	68
第49図	2～6号土坑実測図 (1/30) ……………	69
第50図	3～8号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	70
第51図	7～9号土坑実測図 (1/30) ……………	73
第52図	10・11号土坑実測図 (1/30) ……………	74
第53図	9・10号土坑出土土器実測図 (1/4) ……………	75
第54図	12号土坑、5～7号溝実測図 (1/30) ……………	76
第55図	11・12号土坑、6号溝出土土器実測図 (1/4) ……………	77
第56図	ピット出土土器実測図 (16は1/3、他は1/4) ……………	78
第57図	第2遺構面出土土器実測図 (1/4) ……………	79
第58図	包含層出土土器実測図 (15は1/3、他は1/4) ……………	80
第59図	出土土製品、石器実測図 (1/2) ……………	81
第60図	西隈上中川原遺跡遺構配置図 (1/300) ……………	83
第61図	調査区位置図 (1/3000) ……………	84
第62図	調査区土層実測図 (1/60) ……………	85
第63図	1-1・1-2号溝実測図 (1/60、土層断面図は1/30) ……………	85
第64図	2-1・2-2・5号溝実測図 (1/180、土層断面図は1/60) ……………	86
第65図	5号溝土層断面図 (1/60) ……………	88
第66図	5号溝出土土器実測図その① (3・4は1/4、他は1/2) ……………	90
第67図	5号溝出土土器実測図その② (17は1/2、他は1/4) ……………	91
第68図	3・4・6～9号溝実測図 (1/60) ……………	92
第69図	南東部落ち実測図 (1/120、土層断面図は1/60) ……………	93
第70図	南東部落ち出土土器実測図その① (32は1/3、他は1/2) ……………	94
第71図	南東部落ち出土土器実測図その② (1/2) ……………	95
第72図	石器・石製品実測図 (57は1/2、他は1/1) ……………	96

表目次

表1	船越高原A遺跡6次調査出土土製品・石器一覧表 ……………	80
表2	西隈上中川原遺跡出土石器・石製品一覧表 ……………	96

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯

一般国道210号線は、大分県大分市と福岡県久留米市を結ぶ主要幹線道路である。九州一の大河筑後川の流域には、福岡県から佐賀県にかけて広大な筑後平野が形成されているが、この平野は、北の背振山地と南の耳納山地からそれぞれ伸びる派生丘陵群によって形成された久留米－鳥栖地峡帯により、福岡－佐賀県境付近で東西に区画され、西を佐賀平野、東を両筑平野と呼ぶ。

国道210号線は、両筑平野（福岡県旧朝倉郡・三井郡・浮羽郡域）の筑後川南岸域を東西に走る基幹道路であり、久留米市（旧田主丸町）・うきは市（旧吉井町・浮羽町）の各市街地の中心部を東西に貫く対面2車線の道路となっている。このため、近年の交通量の増加によって交通渋滞の悪化・交通事故の発生・住環境の悪化などの問題が発生していた。そこで、渋滞の緩和、交通事故の減少、沿道環境の改善などを目的として国道210号線の改築（バイパス建設）が事業化され、昭和48年度より着手された。工事は東側より進行し、平成18（2006）年3月現在、うきは市吉井町の全区間と、同浮羽町内の大部分、及び久留米市田主丸町内の一部が供用開始されている。

浮羽バイパスの建設に先立つ埋蔵文化財保護の対応については、昭和47年度に、建設省地方建設局福岡国道工事事務所（現国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所）から福岡県教育庁管理部文化課（現福岡県教育庁総務部文化財保護課）に対して工事箇所に対する埋蔵文化財の有無についての調査依頼があったのを端緒とする。その後、昭和61（1986）年度、平成10年度の2回にわたって浮羽バイパス計画地内における埋蔵文化財の分布調査を行い、計19地点の発掘調査必要箇所の存在が確認され、これに基づいて福岡県教育庁総務部文化財保護課を調査主体として試掘・本調査を行ってきた。調査は昭和54年度から平成17年度まで断続的に続き、報告書も24冊を刊行した。これらの過去の調査の詳細については、既刊の各報告書を参考とされたい。

なお、平成16年度末に旧浮羽郡田主丸町が久留米市と合併し、旧田主丸町内の発掘調査必要箇所については久留米市により調査が行われることとなった。旧吉井町・浮羽町内の発掘調査必要箇所は残っておらず、今回報告の西隈上中川原遺跡が福岡県教育委員会による浮羽バイパス関連発掘調査の最後の地点となった。

本書で報告する3遺跡の調査経緯について簡単にまとめておく。玉田遺跡は昭和61年度回答時の14地点に該当する。西に15地点が隣接し、平成12（2000）～13（2001）年度に大的遺跡として調査している。この調査知見より本地点まで埋蔵文化財の広がりも推測され、試掘調査を省略して発掘調査に臨んだ。調査は平成15年4月より行い、調査対象面積はおよそ1600㎡であった。

船越高原A遺跡は昭和61年度回答時の10地点に当たる。当地点は平成7（1995）年度に用地買収が済んだ部分について試掘調査を実施し、路線の全面に埋蔵文化財が存在することを確認した。これを受けて平成8（1996）年より県文化課が発掘調査に着手した。調査は対象地をⅢ区に分割し、買収・耕作の状況や圃場整備事業の進行状況と適宜調整を行いつつ、平成12（2000）年度末までに5次にわたって未買地をのぞく調査対象地のほぼ全域の発掘調査を終了し、平成13（2001）

年度末までに報告書を作成した。その後、未買地であり調査が残っていたⅠ区西側の一部分について平成16年度になって発掘調査の条件が整ったため、試掘調査を省略して本調査に臨んだ。調査は平成16年6月より行い、調査対象面積は第1遺構面310㎡、第2遺構面310㎡の計620㎡であった。

西隈上中川原遺跡は昭和61年回答時19地点に当たる。当地点は平成16（2004）年度に用地買収が済んだ部分について試掘調査を実施し、埋蔵文化財の存在を確認したため、同年度に発掘調査を実施した。調査は平成17年11月より行い、調査対象面積は約3800㎡であった。

第2節 調査の経過

第1項 玉田遺跡

玉田遺跡は上記のような経緯により平成15年4月15日に発掘調査に着手した。調査対象地区は、調査当時も機能していた用水路2条により大きく3つに区画されており、この区画に従って北東部をⅠ区、南東部をⅡ区、西部をⅢ区とした（第3図）。町道を挟んで西に隣接する大的遺跡の状況から、調査予定地にも濃密な遺構の存在が予想されたため、試掘調査を省略して発掘調査に着手したが、予想に反して大的遺跡の遺構面レベルより掘り下げても明確な遺構が認められず、遺構面の確定に苦慮することとなった。試掘調査を省略したことで基本層序の把握ができなかったことが後々にまで影響を及ぼすこととなったのは非常に残念であった。

調査区の東側には表土の標高で5mほど調査区より高い舌状台地が広がっており、Ⅰ・Ⅱ区は台地斜面裾部に当たる。このため、基本層序は東から西に向かって流れ込むような形で堆積しており、また湧水が著しいため表土剥ぎには苦慮した。溝を検出した層を第1遺構面としたが、このほかに明確な遺構は確認されなかった。また、Ⅲ区は谷部にあたり地盤が非常に悪く、表土剥ぎの際に重機が沈み込む有様で、さらに遺構面がⅠ・Ⅱ区と比較してもかなり深く、Ⅰ・Ⅱ区の調査の結果遺構がほとんど存在しないと推測されたので、最終的にはⅢ区の調査は基本層序の確認のためのトレンチにとどまることとなった。

6月半ばより本格的な梅雨に入り、しばしば調査を中断することとなった。調査区は周辺の地形から見て最も低いところにあり、周囲から雨水が流入してしばしばプール状になって調査がそのたびに中断した。また、雨水がたまるたびに調査区の壁が各所で崩落し、その対応に苦慮した。さらに、深く掘り進めるほどに壁や遺構面から湧水が多くなり、Ⅱ区・Ⅲ区については大きな釜場を設けて常時排水ポンプを稼働させておく必要があったため、実質的な調査面積が狭くなった。また、湧水等により足場が非常に悪く、下層に行くほどに泥の中を掘り進める状況となったため、調査は難航した。

遺跡からは明確な遺構こそほとんど確認されなかったものの、包含層や堆積層中から多くの遺物が出土した。出土遺物には弥生時代前期・後期、古墳時代、古代、中世の各時期の土器・石器があり、おそらくはそのほとんどが東側の台地状からの流れ込みと考えられる。詳細については報文を参照されたい。

梅雨時期にしばしば中断があったものの、調査は7月9日には終了し、その後重機による埋め戻し作業を行った。7月後半に局所的な豪雨があり、まだ埋め戻しの終わっていなかったⅢ区の南半分が水没したほか、周囲の水田を含め広い範囲が洪水により沈没し、現場機材が流出する被害があったが、埋め戻しを7月18日に終了し、現場機材の撤収を含め発掘調査を7月24日に完全に終了することができた。

第2項 船越高原A遺跡6次

船越高原A遺跡は平成16年6月29日に第6次調査として発掘調査に着手。調査区北側は現道から遺構面までの高低差があるため、安全確保のため法面をつけての掘削となり、実際の調査面積は狭くならざるをえなかった。I区既調査時の所見から、第1遺構面までを重機によって掘削し、その後7月2日より人力掘削を開始した。

8月19日は台風の影響のため作業を中止したが、8月24日に第1遺構面の空中写真撮影を行い、8月25日に第2遺構面にむけ、再び重機による掘削に着手した。

8月30日、9月7日は再び台風の接近、また9月上旬は夕立が多く、調査を度々中止せざるをえなかったが、9月27日に第2遺構面の空中写真撮影を行った。その後確認のため一部深くトレンチを掘削するが、下に遺構が存在しないことを確認し調査は終了。9月27日のうちに機材を撤収した。

その後埋め戻し作業を行い、10月15日に現地の引き渡しを行い完全に終了することができた。

第3項 西隈上中川原遺跡

西隈上中川原遺跡は平成16年11月18日に発掘調査に着手した。調査区外での排土置き場の確保が難しく、調査区を東西2区に分割して東側を排土置き場とし、西側の調査終了後に排土を反転して東側の調査を行うこととなった。11月22日に重機による西側調査区（西区）の表土剥ぎを開始し、11月29日には人力による掘削を開始した。

12月の中旬以降は雨天・降雪が多く、厳しい寒さの中で作業を度々中断するなどしながらの調査が続いた。年が明けて1月12日に西区の空中写真撮影を行った。

1月16日には工事の工程上早期の引き渡しの必要があった南側の仮設道路予定地で、重機による表土剥ぎと並行して人力による掘削も開始した。1月23日に西区での発掘作業が終了し、重機による排土の反転と東側調査区（東区）の表土剥ぎを開始した。1月25日には仮設道路予定地の調査が終了し、用地の引き渡しを行った。1月31日から人力による東区の掘削を開始し、2月15日に東区の空中写真撮影を行った。その後埋め戻しを行い2月17日には現場機材の撤収を含め発掘調査を完全に終了することができた。

第3節 調査の組織

発掘調査及び整理・報告書作成の関係者は下記のとおりである。

国土交通省九州地方整備局福岡国道事務所

	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成19年度
所長	増田 博行	増田 博行	増田 博行 小口 浩	小口 浩
副所長	小串 正志 徳留 忠	後田 徹 徳留 忠	後田 徹 佐々木英明	春田 義信 栲原 正純
建設監督官	内田 智視	内田 智視	崎野 信二	崎野 信二
建設第2課長	上村 一明	小椎尾 優	鈴木 昭人	鈴木 昭人
調査係長 (H18より調査課)	長友 浩信	長友 浩信	松木 厚廣	川原 一哲
専門調査員	島川 浩一			
専門員		相島 伸行	相島 伸行	伊藤 良二
国土交通技官	立石 洋和	立石 洋和		
国土交通事務官			入江 大乘	伊奈 洋平
工務課長	田中秀之進	田中秀之進	堀 康雄	清時 義雄
工務第一係長	竹永 浩	竹永 浩	島川 浩一	島川 浩一
工務第三係長	山下 正昭	山下 正昭	山下 正昭	重草 通

福岡県教育委員会

	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成19年度
総括				
教育長	森山 良一	森山 良一	森山 良一	森山 良一
教育次長	三瓶 寧夫	清水 圭輔	清水 圭輔	大島 和寛
総務部長	清水 圭輔	中原 一憲	中原 一憲	
文化財保護課長	井上 裕弘	井上 裕弘	久芳 昭文	磯村 幸男 (本副理事)
副課長			川述 昭人	佐々木隆彦
参事		新原 正典	佐々木隆彦 新原 正典	新原 正典
課長補佐	久芳 昭文 (本参事)	安川 正郷	安川 正郷 (本参事)	中藪 宏
課長技術補佐	川述 昭人 (本参事) 木下 修 (本参事)	川述 昭人 (本参事) 木下 修 (本参事)	木下 修 (本参事) 池邊 元明 (本参事)	池邊 元明 (本参事) 小池 史哲 (本参事)
庶務				
管理係長	古賀 敏生 (本参事補佐)	稲尾 茂	稲尾 茂 (本参事補佐)	井手 優二
管理係	宮崎 志行 末竹 元 秦 俊二	宮崎 志行 石橋 伸二 末竹 元	石橋 伸二 末竹 元 測上 大輔	測上 大輔 柏村 正央 小宮 辰之 野田 雅

調査・報告書作成

参事補佐				濱田 信也 (整理担当)
調査第二係長	中間 研志 (本参事補佐)	中間 研志 (本参事補佐)	飛野 博文 (本参事補佐)	飛野 博文 (本参事補佐)
調査第二係	小澤 佳憲 (発掘調査)	宮地聡一郎 (発掘調査)	一瀬 智 (発掘調査)	一瀬 智 (報告書作成)
大規模遺跡対策・災害復旧班				小澤 佳憲 (報告書作成)
アジア文化交流センター				宮地聡一郎 (報告書作成)

調査に参加された作業員の皆さんには、さまざまな悪条件の中熱心に作業いただいた。また、調査中は文化財保護指導委員の先生方をはじめ、近隣各市町教育委員会の文化財担当の方々、福岡国道事務所の担当の方など多くの方々に御協力・御支援をいただいた。この場を借りて御礼申し上げます。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

各遺跡の位置 玉田遺跡は久留米市田主丸町大字常盤に所在する。小字名を玉田といい、これを遺跡名としている。船越高原A遺跡は久留米市田主丸町船越・うきは市吉井町長栖に所在する。久留米市側を中心として分布し、I区周辺の小字である高原を遺跡名としている。西隈上中川原遺跡はうきは市浮羽町西隈上に所在する。小字名を中川原といい、これを遺跡名としている。

これら3遺跡は、旧浮羽郡内に位置する。旧浮羽郡は旧田主丸町、吉井町、浮羽町の3町からなり、筑後川中流域に形成された広大な平野である両筑平野のなかで筑後川の南岸域を構成する。なお、平成17年に旧田主丸町は久留米市と合併し、また吉井町と浮羽町は二町で合併してうきは市となっている。

地形的環境 両筑平野は筑後川とその資料の解析・堆積作用により形成された平野であり、かつ久留米－鳥栖地峡帯を経て西側の筑後川下流域～有明海沿岸域に形成された筑後平野・佐賀平野とあわせ、筑紫平野として一括して呼称される場合には、九州でも最大の規模を持つ平野の一部を構成する地形的単位でもある。

両筑平野の中央部には大分県日田市から流れ出る筑後川が久留米－鳥栖地峡帯に向かって西へと流れ、平野の南側は耳納山地が、また北側には三郡－英彦山系から連なる峰々が平野の境界を画している。西に向かって広く開けた平野の最西端部には、背振山系から派生した鳥栖丘陵が平野開口部を画すかのように南に向かって張りだしており、両筑平野はあたかも横に倒れた二等辺三角形のような形状を呈する。

横に倒れた二等辺三角形の東側の頂点から流れ出した筑後川は平野の南側を西流するため、筑後川の北岸には、三郡－英彦山系より流れ出て南流し、筑後川へと流入する宝満川・小石原川・佐田川などの河川の解析・堆積作用により形成された低平野が広がり、幅の広い河岸段丘を形成している。一方、幅の狭い筑後川南側の支流である美津留川（古川）・巨瀬川・隈上川は、耳納山麓の扇状地帯を抜け出た後は筑後川の旧河川により形成された複雑な旧流路に従って筑後川と平行しながら南側へと流れており、平野部は広くない。このような地形環境に従って、筑後川北岸と南岸では大きく異なった土地利用のあり方が見られる。

両筑平野の土地利用 筑後川北岸では、上述のように三郡－英彦山系から流れ出した筑後川の支流が堆積と解析を繰り返すことにより形成された幅の広い低台地（河岸段丘）が形成されており、現在はここに水を引くことによって広大な水田地帯が広がり、温暖な気候を利用して稲のほかに大豆や麦などの二毛作が盛んに行われている。

一方筑後川の南にそびえる耳納山地は、その形状から断層により形成された傾動地塊と考えられており、南側斜面が緩傾斜、北側斜面が急傾斜となっている。そして、これが南岸の地形環境を大きく規定している。すなわち、筑後川南岸では耳納山麓に幅の狭い扇状地帯が形成されたあと狭い移行地帯を経て筑後川旧河川の氾濫原が広がる地形環境が形成されている。

筑後川南岸の土地利用形態はこの地形環境に規定されて北岸のそれとはまた異なる特徴的なものとなっている。すなわち、山麓部に広がる扇状地帯の端部付近は、古くより条里制水田が開墾されて現在でも良好な水田地帯となっている。一方、扇状地－氾濫原の移行地帯より北側の低地は筑後川の旧河川が大きくうねりながら東西に伸びており、こうした旧河川内部の低地は弥生時代以降の小規模かつ不安定な水田開発の舞台となったが、このような小規模な水田開発はさまざまな条件により大きく進展しなかった。すなわち、東西に延びる旧河川と自然堤防を越えて山麓部からの導水をこの地に導くことの難しさと、筑後川が頻繁に氾濫するという不安定な地形環境が、近世の大規模用水路の開発や築堤によって克服されるまで、筑後川の氾濫原の大部分は荒地として放置されていたようである。また、扇状地の中・上部は近代以降果樹・苗木栽培が導入されて急速に開墾が進み、この地域を県内でも有数の果樹・苗木等の生産地帯へと成長させた。

遺跡の立地環境Ⅰ－玉田遺跡－ 玉田遺跡は筑後川氾濫原と扇状地端部の境界に位置し、美津留川（古川）の南側に面してさらに南側の扇状地端部から残丘状に突き出た舌状台地の西側裾部に立地する。遺跡は西側の微高地と東側の舌状台地に挟まれた微低地状の地形にあり、現在でも北側に広がる水田の幹線排水路が最も低い中央部を北東から南西方向に向かって貫流している。大雨などによる増水の際にはもっとも最初に水没する場所であり、「玉田」の小字名はおそらく「溜まり田」から来たものと思われる。

南・東側に広がる台地は、低地との比高差がおよそ3～5mほどあり、東～南側が水分遺跡、南～南西側が旧田主丸中学校遺跡として周知化されている。いずれも弥生時代から古墳時代以降にかけての集落遺跡として知られ、旧田主丸中学校遺跡は校舎の建て替えに伴って昭和57年に発掘調査が行われている。ただし、校舎の基礎部分のみの小規模な発掘であり、遺跡の具体的な性格は明らかにされてはいない。また、遺跡の西側には浮羽バイパス15地点として調査が行われた大地的遺跡がある。この遺跡は、旧田主丸中学校遺跡の乗る台地から一段下がりながら併行して北に伸びる2本の舌状微高地上にそれぞれ弥生時代前期～古墳時代後期、弥生時代中期～古墳時代後期の集落跡が発見されており、その間の低地からは古墳時代の集落に併行すると考えられる水田跡が発見されて話題を呼んだ。なお、大地的遺跡のうち東側の舌状微高地は今回調査した玉田遺跡Ⅲ区との間に展開しており、玉田遺跡Ⅲ区の西側隣接地には弥生時代中期～古墳時代後期の集落跡が広がっている可能性が高い。

従って、今回の調査区は西側の大地的遺跡、南西側の旧田主丸中学校遺跡、南側の水分遺跡に囲まれた谷地にあたることになり、包含層より出土した多くの土器群はこれらの遺跡から流れ込んだ可能性が極めて高い。特に、調査区の東半分にあたるⅠ区・Ⅱ区からは、東側に隣接する台地上からの流れ込みと考えられる資料が多量に出土しており、東側の台地上にはこれらの資料の産出元である集落遺跡が広がっている可能性がきわめて高い。おそらく、これまで南側に広がると考えられていた水分遺跡が、この台地上にまで広がっているのではないかと考えられる。

遺跡の立地環境Ⅱ－船越高原A遺跡－ 船越高原A遺跡は耳納連山北側の扇状地と筑後川氾濫原との間の、美津留川の堆積・浸食作用によって形成された微高地に立地し、標高は約22mである。一帯の微高地では多くの遺跡が存在し、西側の船越二ノ上遺跡では主に古墳時代の集落跡や古代

～中世の土坑や溝が確認され、美津留川を挟んだ東側の鷹取五反田遺跡では弥生時代の集落跡や甕棺墓群、古墳～奈良時代の集落跡が確認されている。いずれの遺跡でも微高地上に集落域や墓域が、やや低い箇所では溝群が検出されている。

今回の調査地の北東に隣接する船越高原 A 遺跡 I 区では弥生時代～古墳時代にかけて東側の美津留川自然堤防上に集落が開発するのに対し、西側では若干低くなり住居跡が減るとともに溝が多く確認されている。今回の調査地は西側に低くなる箇所に位置し、当初より集落の西端付近にあたることが予想された。

遺跡の立地環境Ⅲ－西隈上中川原遺跡－ 西隈上中川原遺跡は筑後川とその支流である隈上川によって形成された扇状地の端部、隈上川右岸の標高約41～42mに位置する。周辺は圃場整備のために原地形が分からなくなっているが、堆積状況を確認すると「中川原」の字名にも示されるように隈上川による解析・堆積作用が繰り返された場所であることが分かる。

周辺の扇状地上には、南東1.5kmに浮羽バイパス1地点として調査が行われた日永遺跡がある。日永遺跡は弥生時代後期中葉の集落跡で、広型銅矛を埋納した土坑が発見された。また東1.5kmには、昭和61年に国営耳納山麓農業水利事業に伴い調査された沖出Ⅰ遺跡、県営圃場整備事業に伴い調査された沖出Ⅱ遺跡がある。沖出Ⅰ遺跡では弥生時代後期後葉、5世紀中葉頃の集落跡が発見された。特に古墳時代の住居跡からは初期須恵器と共に多数の滑石製白玉が出土している。沖出Ⅱ遺跡では弥生時代後期後葉、古墳時代初頭、5世紀前半～6世紀初頭の集落跡が確認された。このように弥生時代後期以降の集落跡が筑後川と隈上川に挟まれた扇状地上に展開する一方、隈上川を挟んだ対岸には耳納山麓から延びる低台地上に法正寺古墳・屋次郎丸古墳・重定古墳の前方後円墳と西隈上古墳・塚花塚古墳・楠名古墳の円墳からなる朝田古墳群がある。

今回調査した西隈上中川原遺跡は、扇状地西端部の隈上川に隣接する箇所にあたる。本遺跡の北側あるいは東側にも、前述のような扇状地上の集落遺跡が開発した可能性が考えられ、溝や落ちから出土した多くの遺物も、それらの集落から招来したものであろう。

第2節 歴史的環境

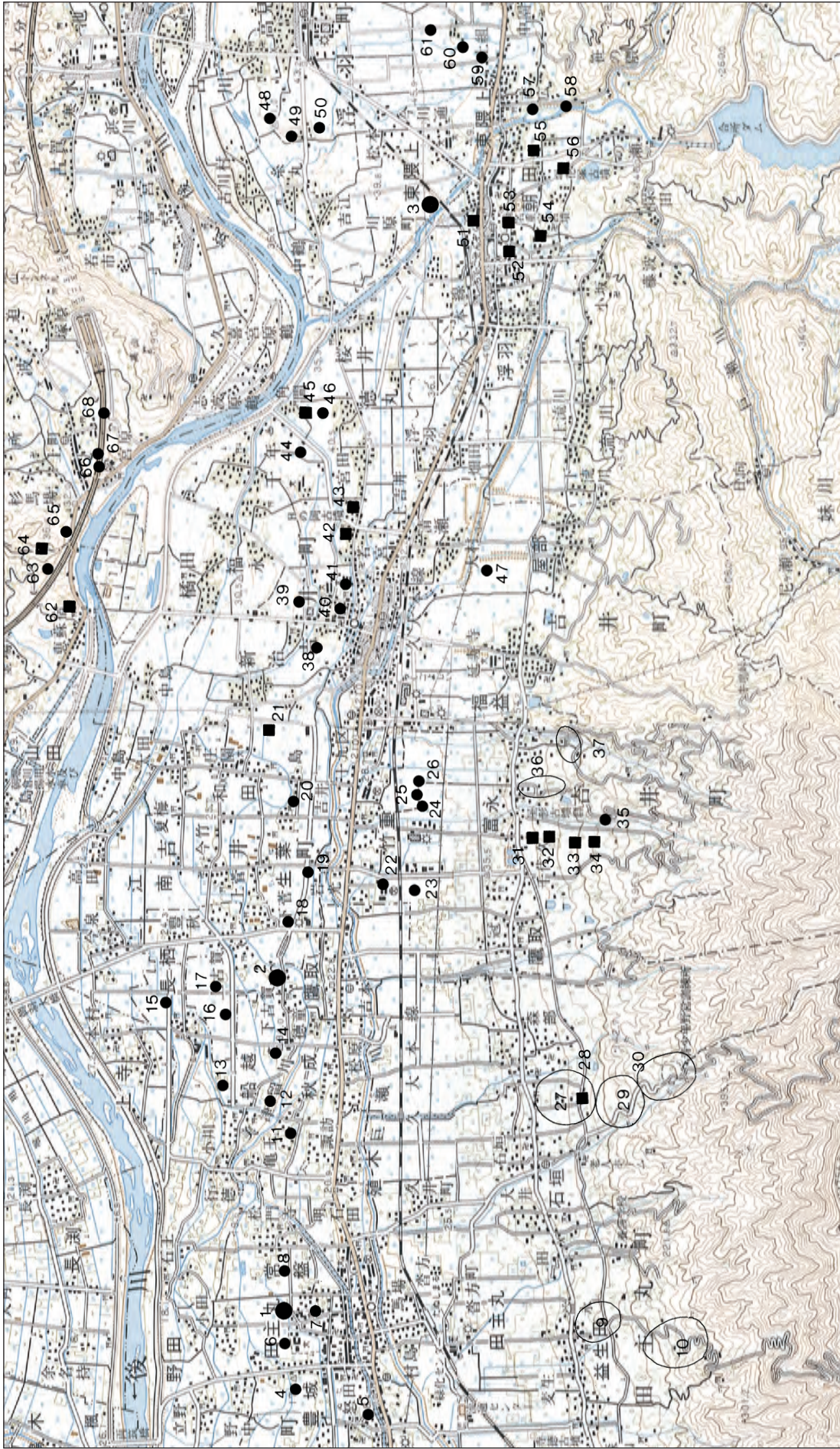
旧浮羽郡域の歴史的環境 第1図に調査地点周辺の遺跡分布を示した。これを見ると、遺跡の分布は大きく筑後川よりの一帯と耳納山麓の一帯に帯状に広がっていることが分かる。これは、前者は浮羽バイパス改築工事や圃場整備工事を中心とする水田地帯の開発に伴う調査、後者は宅地などの工事に伴う調査が集中しているという人為的要因が存在することは明らかではあるが、地形的要因も無視できない。すなわち、既述のように筑後川南岸に当たる旧浮羽郡域の南半部は、南側にそびえる耳納山地から供給された土砂により急傾斜の扇状地が形成される一方、北半部は筑後川やその支流により形成された自然堤防帯が開発するという特徴的な地形が広がる。このそれぞれの地形に対応し、古来より様々な土地開発が行われてきた結果の一つが、上記のような遺跡分布に現れていると考えられる。以下、時代ごとに詳しく見ていきたい。

弥生時代の遺跡 弥生時代早～前期には、早期の資料とされる法華原遺跡⁽¹⁾が耳納山麓の扇状地上部に見られる以外は、船越高原A遺跡⁽²⁾、鷹取五反田遺跡⁽³⁾、大的遺跡（1次調査地点）⁽⁴⁾（前期中葉～後半）が自然堤防帯やそれに隣接する河岸段丘上に展開しており、初期農耕集落は自然堤防帯付近の低地を中心に進出したことが分かる。前期後半以降の遺跡として、水分遺跡⁽⁵⁾、大碓遺跡⁽⁶⁾、西郷天神免遺跡⁽⁷⁾、豊城中ツブロ遺跡⁽⁸⁾、日詰遺跡⁽⁹⁾、竹重遺跡⁽¹⁰⁾などが挙げられる。これらは竹重遺跡をのぞきいずれも自然堤防帯に隣接する低位段丘上に立地し、大碓遺跡では環濠が確認されるなど、前段階よりさらに定住度を高めた集落として評価できよう。これらはその殆どが中期初頭までで消滅している点は注目される。また、竹重遺跡は扇状地端部に立地し、扇状地への集落の展開がこの時期に開始されたことを示す貴重な資料である。

中期初頭までに、これらの集落が消滅するのと入れ替わるように出現する集落として、大的遺跡（2次調査地点）⁽¹¹⁾、仁右衛門畑遺跡⁽¹²⁾、船越一ノ上遺跡⁽¹³⁾などが挙げられる。全て前期末～中期初頭に出現して前期中葉まで継続する集落である。仁右衛門畑遺跡からは環濠の可能性のある溝が検出されており、拠点集落の候補であろう。そのほか、同時期の甕棺墓群が秋成甕王遺跡⁽¹⁴⁾、広園地区遺跡⁽¹⁵⁾などで検出されている。前期中葉には、大規模な集落が成立する。堂畑遺跡⁽¹⁶⁾では二重の環濠に区画された集落が検出されており、船越高原A遺跡でも環濠の可能性のある溝が検出されている。鷹取五反田遺跡では甕棺墓群がセットになっており、貴重な事例である。この他、断片的な資料として生葉地区遺跡⁽¹⁷⁾などがあるが、ほとんどが後期初頭までで断絶する。

後期前半の資料として鷹取五反田遺跡が挙げられる。この遺跡は中期後半より継続する数少ない遺跡であるが、遺構数は前段階に比べ激減しており、その後への継続性も低い。一方、後期中葉までには吉井中学校遺跡⁽¹⁸⁾で大規模な集落が成立するほか、塚堂遺跡⁽¹⁹⁾、水分遺跡などで集落が成立している。これらはいずれも後期末～古墳時代初頭まで継続する継続性の高い集落である。一方、後期中葉（～後半）のごく短い期間のみ遺構の見られる小規模な集落も見られる。日永遺跡⁽²⁰⁾、堂畑遺跡、仁右衛門畑遺跡、吉井穀蘇遺跡⁽²¹⁾などが挙げられる。日永遺跡は銅矛埋納遺構が検出されている。また、後期末（～古墳時代初頭）の集落として船越二ノ上遺跡⁽²²⁾、船越高原遺跡、千年小森遺跡⁽²³⁾などが挙げられる。以上の弥生時代遺跡は、一部に扇状地への進出が見られるものの殆どが自然堤防域またはこれに隣接する低位段丘上に立地している。この時期の水田開発が基本的には自然堤防地帯を対象として行われたことをよく示すものである。

古墳時代の遺跡 古墳時代前期の資料として、大的遺跡、千代久遺跡⁽²⁴⁾、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡が挙げられる。これらの遺跡はいずれも前段階の資料がなく、庄内式土器が見られない点の特徴的である。また、いずれも小規模な集落であって前期中葉までに消滅する。前期後半の集落として殖木地区遺跡群A地点⁽²⁵⁾、船越二ノ上遺跡、船越高原遺跡、鷹取五反田遺跡、吉井穀蘇遺跡などが出現するが、これらもやはり小規模で継続性がない。この地域においては前期段階に（法正寺古墳を除き）大規模な古墳がほとんどない点との関連性は興味深い。ただし、殖木地区遺跡群、吉井穀蘇遺跡など扇状地端部への集落進出が目立ち始める点は注意を要する。この前後より扇状地の開発が徐々に進行することを示すものであろう。こうした中で特徴的なのが塚堂遺跡の動態である。この遺跡では弥生時代後期中葉から古墳時代中期まで連綿と集落経営が継続す



第1図 周辺遺跡分布図 (1/5000)

1.日詰遺跡 2.船越高原遺跡 3.西隈上中川原遺跡 4.日詰遺跡 5.豊城中ツブ口遺跡 6.大の遺跡 7.水分遺跡 8.松門寺A遺跡 9.益永古墳群 10.益生田古墳群 11.秋成甕王遺跡 12.船越二ノ上遺跡 13.船越一ノ上遺跡 14.船越宮ノ前遺跡 15.千代久遺跡 16.長栖高嶋遺跡 17.殖木遺跡群A地点 18.鷹取五反田遺跡 19.大塚遺跡 20.生葉遺跡群 21.女塚古墳 22.竹重遺跡 23.富永正池遺跡 24.富永横枕遺跡 25.吉井毅蘇遺跡 26.吉井大手木遺跡 27.大塚古墳群 28.田主丸大塚古墳 29.大塚清長橋古墳群 30.平原古墳群 31.珍敷塚古墳 32.原古墳 33.鳥船塚古墳 34.古畑古墳 35.法華原遺跡 36.屋形原古墳群 37.東屋形原古墳群 38.仁右衛門畑遺跡 39.堂畑遺跡 40.瓜園地区遺跡 41.吉井中學校遺跡 42.月岡古墳 43.日岡古墳 44.千年小森遺跡 45.塚堂古墳 46.塚堂遺跡 47.屋部西文蔵遺跡 48.北淀遺跡 49.田島北遺跡 50.田島南遺跡 51.西隈上古墳 52.楠名古墳 53.重定古墳 54.法正寺古墳 55.弥次郎丸古墳 56.塚花塚古墳 57.賀茂神社境内遺跡 58.畑田遺跡 59.日永遺跡 60.沖出遺跡II地点 61.沖出遺跡I地点 62.江蘇八幡宮古墳 63.大迫遺跡 64.本陣古墳 65.外ノ隈遺跡 66.志波宝満宮遺跡 67.杷木宮原遺跡 68.志波桑ノ本遺跡

る可能性が高く、注目される。

古墳時代中期の資料として、鷹取五反田遺跡、船越高原遺跡、船越二ノ上遺跡、仁右衛門畑遺跡、生葉地区遺跡、堂畑遺跡、大的遺跡などがある。これらの多くは中期前半～中葉に進出し、比較的大規模な集落も見られる。若宮古墳群の成立との関連から考えるべきであろう。中でも、前段階より継続する塚堂遺跡は、5世紀前半にカマドが出現しており、普及初期のカマドの例として重要であると共に、塚堂遺跡の拠点性を表す遺構として注目される。おそらく、塚堂遺跡の居住集団が中心となって若宮古墳群（月岡古墳⁽²⁶⁾・塚堂古墳⁽²⁷⁾・日岡古墳⁽²⁸⁾、5世紀中葉～6世紀前半）の造営を行っていた可能性が高いと考えられる。

古墳時代後期には、旧浮羽町内に沖出遺跡⁽²⁹⁾、日永遺跡が前半期の資料として展開する。この時期には同じ旧浮羽町内において朝田古墳群が大型の首長墳を連続して構築しはじめる時期に当たる。弥次郎丸古墳、塚花塚古墳、重定古墳⁽³⁰⁾、楠名古墳⁽³¹⁾が6世紀前葉～7世紀前半に連続して築かれており、塚花塚古墳は装飾古墳としても著名である。また、旧吉井町内には鷹取遺跡、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡など、旧田主丸町内には船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡⁽³²⁾、船越高原遺跡があり、集落数が急増する。これらの集落は6世紀中葉以降扇状地帯に展開する群集墳（善院古墳群⁽³³⁾、益永古墳群⁽³⁴⁾、大塚古墳群⁽³⁵⁾、大塚清長橋古墳群⁽³⁶⁾、平原古墳群⁽³⁷⁾、屋形古墳群⁽³⁸⁾など）の出現とおそらく関係が深いと考えられ、この時期にいたってようやく扇状地帯の開発の本格的な開発の端緒がつけられたものと理解できよう。

古代～中世の遺跡 さて、以上のような古墳時代後期の集落は7世紀代のうちにほぼ全て廃絶し、新たに7世紀前半以降、古代集落が形成される。この時期の集落として船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡、仁右衛門畑遺跡、生葉地区遺跡、竹野小学校遺跡⁽³⁹⁾、船越高原遺跡、大碓遺跡、鷹取五反田遺跡、日詰遺跡などが挙げられる。竹野小学校遺跡は耳納山麓の扇状地帯中位に位置し、この時期以降の扇状地の開発と密接な関係を持ったものと考えられる。この時期以降、扇状地帯は条里制の施行により広大な水田域へと姿を変えることになる。

条里制の施行は8世紀初頭までにはほぼ完成したと考えられ、その後は条里水田の広域化と共に筑後川の自然堤防域の広域な耕地開発が進行する。9～10世紀代の資料として、日詰遺跡、船越高原A遺跡、松門寺A遺跡⁽⁴⁰⁾、仁右衛門畑遺跡などがあるが、日詰遺跡を除く資料はいずれも溝やピット、包含層から土器が出土していて明確に集落に伴うものは見あたらない。また、中世期の資料として日詰遺跡、船越高原A遺跡、船越二ノ上遺跡、松門寺A遺跡、堺町遺跡⁽⁴¹⁾、仁右衛門畑遺跡、堂畑遺跡、塚堂遺跡などが挙げられるが、これらの大半が溝のみの検出である。このことはおそらく、これらの資料が水田開発に伴うものであることを示している。これらの遺跡は全て巨瀬川と筑後川の間であり、この地域に広がる自然堤防地域の開発が積極的に推し進められたことを示すものであろう。この段階になってようやく現在まで至る土地利用形態の基本的な在り方が完成したと理解できる。その後、近世には自然堤防域のより積極的な開発が、また近・現代には山林であった扇状地中～上位の果樹園化が急速に進行し、今に見る土地利用形態が完成するのである。

註

- (1) 片岡宏二, 1996: 農耕の始まりとその文化. 田主丸町史編集委員会編: 田主丸町史, 第二巻 (村と村人、上). 田主丸町.
- (2) 江島伸彦編, 2000: 船越高原遺跡. 田主丸町文化財報告書, 13. 田主丸町教育委員会.
齋部麻矢編, 2000: 船越高原A遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 13. 福岡県教育委員会.
進村真之編, 2001: 船越高原A遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 15. 福岡県教育委員会.
進村真之編, 2002: 船越高原A遺跡, III. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 16. 福岡県教育委員会.
- (3) 水ノ江和同編, 1998: 鷹取五反田遺跡, I. 稲崎A・B遺跡. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 9. 福岡県教育委員会.
水ノ江和同編, 1999: 鷹取五反田遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 10. 福岡県教育委員会.
- (4) 今井涼子編, 2003: 大的遺跡, I、日詰遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 19. 福岡県教育委員会.
- (5) 栗原和彦編, 1985: 田主丸古墳群. 田主丸町文化財調査報告書, 2. 田主丸町教育委員会.
- (6) 水ノ江和同編, 1994: 境町・大碓遺跡. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 8. 福岡県教育委員会.
- (7) 丸林禎彦編, 2001: 西郷西天神免遺跡. 田主丸町文化財調査報告書, 14. 田主丸町教育委員会.
- (8) 丸林禎彦編, 1998: 豊城中ツプロ遺跡. 田主丸町文化財調査報告書, 10. 田主丸町教育委員会.
- (9) 小澤佳憲編, 2005: 日詰遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 22. 福岡県教育委員会.
小澤佳憲編, 2006: 日詰遺跡, III. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 24. 福岡県教育委員会.
註(4)文献。
- (10) 福岡県教育委員会により平成18年度に調査。平成19年度報告予定。
- (11) 今井涼子編, 2004: 大的遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 21. 福岡県教育委員会.
- (12) 吉田東明編, 2000: 仁右衛門畑遺跡, I (古墳時代以降編). 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 12. 福岡県教育委員会.
吉田東明編, 2001: 仁右衛門畑遺跡, II (弥生時代編). 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 14. 福岡県教育委員会.
- (13) 丸林禎彦編, 1996: 船越一ノ上遺跡. 田主丸町文化財調査報告書, 8. 田主丸町教育委員会.
- (14) 註(4)文献。
- (15) 江島尚子編, 2002: 広園地区遺跡. 吉井町文化財調査報告書, 16. 吉井町教育委員会.
- (16) 重藤輝行編, 2002: 堂畑遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 17. 福岡県教育委員会.
大庭孝夫編, 2004: 堂畑遺跡, II. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 20. 福岡県教育委員会.
大庭孝夫編, 2005: 堂畑遺跡, III. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 23. 福岡県教育委員会.
- (17) 平川祐介編, 1999: 生葉地区遺跡群, II. 吉井町文化財調査報告書, 11. 吉井町教育委員会.
平川祐介編, 2000: 生葉地区遺跡群, III. 吉井町文化財調査報告書, 12. 吉井町教育委員会.
- (18) 平川祐介編, 2002: 吉井中学校遺跡 (遺構編). 吉井町文化財調査報告書, 15. 吉井町教育委員会.
- (19) 馬田弘稔編, 1983: 塚堂遺跡, I. 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 1. 福岡県教育委員会.
副島邦弘編, 1984: 塚堂遺跡, II (A地区). 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 2. 福岡県教育委員会.
佐々木隆彦編, 1984: 塚堂遺跡, III (E地区). 浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告, 3. 福岡県教育委員会.

- 馬田弘稔編，1985：塚堂遺跡，Ⅳ（D地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，4。福岡県教育委員会。
- 馬田弘稔編，1986：塚堂遺跡，Ⅴ（E地区）。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，5。福岡県教育委員会。
- (20) 緒方泉編，1993：日永遺跡，Ⅰ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，6。福岡県教育委員会。
緒方泉編，1994：日永遺跡，Ⅱ。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，7。福岡県教育委員会。
- (21) 平川祐介編，1998：吉井大手木遺跡・吉井穀蘇遺跡・富永横枕遺跡。吉井町文化財調査報告書，10。吉井町教育委員会。
- (22) 吉田東明編，1999：船越二ノ上遺跡。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，11。福岡県教育委員会。
- (23) 平川祐介編，2001：千年地区遺跡群（千年小森遺跡・千年西田遺跡）。吉井町文化財調査報告書，13。吉井町教育委員会。
- (24) 秀島龍男編，1993。千代久遺跡，Ⅱ。田主丸町文化財調査報告書，3。田主丸町教育委員会。
秀島龍男編，1994：千代久遺跡，Ⅱ。田主丸町文化財調査報告書，4。田主丸町教育委員会。
- (25) 丸林禎彦編，1996：殖木地区遺跡群A地点・B地点、鷹取一条遺跡。田主丸町文化財調査報告書，5。田主丸町教育委員会。
- (26) 平川祐介編，1986：月岡古墳。吉井町文化財調査報告書，3。吉井町教育委員会。
児玉真一編，2005：若宮古墳群，Ⅲ。吉井町文化財調査報告書，19。吉井町教育委員会。
- (27) 石山勲（小川誠嗣編），1982：塚堂古墳。吉井町文化財調査報告書，1。吉井町教育委員会。
註（19）文献。
- (28) 児玉真一編，1989：若宮古墳群，Ⅰ。吉井町文化財調査報告書，4。吉井町教育委員会。
児玉真一編，1990：若宮古墳群，Ⅱ。吉井町文化財調査報告書，6。吉井町教育委員会。
- (29) 佐土原逸男編，1987：沖出遺跡，1。浮羽町文化財調査報告書，3。浮羽町教育委員会。
- (30) 児玉真一編，1986：西隈上古墳・楠名古墳。浮羽町文化財調査報告書，1。浮羽町教育委員会。
児玉真一編，1987：楠名古墳。浮羽町文化財調査報告書，2。浮羽町教育委員会。
- (31) 註（30）文献。
- (32) 江島伸彦編，1997：船越宮ノ前遺跡，Ⅰ。田主丸町文化財調査報告書，9。田主丸町教育委員会。
江島伸彦編，1999：船越宮ノ前遺跡，Ⅱ。田主丸町文化財調査報告書，11。田主丸町教育委員会。
- (33) 江島伸彦編，2002：善院古墳群。田主丸町文化財調査報告書，19。田主丸町教育委員会。
江島伸彦編，2003：善院古墳群，Ⅱ。田主丸町文化財調査報告書，21。田主丸町教育委員会。
- (34) 栗原和彦編，1984：田主丸古墳群。田主丸町文化財調査報告書，1。田主丸町教育委員会。
- (35) 江島伸彦編，2004：大塚古墳群，Ⅰ。田主丸町文化財調査報告書，24。田主丸町教育委員会。
丸林禎彦編，2001：田主丸大塚古墳。田主丸町文化財調査報告書，15。田主丸町教育委員会。
註（5）文献、註（34）文献。
- (36) 丸林禎彦編，2003：清長橋古墳群。田主丸町文化財調査報告書，23。田主丸町教育委員会。
- (37) 註（5）文献。
- (38) 吉井町教育委員会編，1983：原古墳。吉井町文化財調査報告書，2。吉井町教育委員会。
- (39) 岸本圭編，2004：竹野小学校遺跡。福岡県文化財調査報告書，188。福岡県教育委員会。
- (40) 今井涼子編，2002：松門寺A遺跡。浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告，18。福岡県教育委員会。
- (41) 註（6）文献。

玉田遺跡

第3章 玉田遺跡の調査の記録

第1節 遺跡の概要と基本層序

遺跡周辺の微地形 玉田遺跡1次調査地点は、舌状台地の西側落ち部に位置する。調査区の西側100mほどのところには大的遺跡2次調査地点が位置し、埋没舌状微高地上から弥生時代～古墳時代の集落が確認されていることから、調査地点は東側の台地と西側の舌状微高地に挟まれた谷状地形にあたるのが分かる。この谷状地形は調査地点よりやや南側を基点として北西～西側に向かってのびていたと考えられるが、付近の地形は圃場整備により著しく改変されているほかそれ以前にも埋積が進行していたと考えられ、はっきりとは分からない。調査区の中央には北から南に向かって主幹排水路が流れており、調査区付近は周囲でもっとも標高の低い部分に位置する。おそらく、この谷状地形は付近を複雑に流れる古筑後川の支流の一つと考えられる。調査区はこの埋没河川の中央部から東側の舌状台地に向かって立ち上がる斜面部分にあたる。

遺跡の基本層序 従って、調査区の基本層序は東側の舌状台地からの流入土を主体とすると考えられる。調査区周辺は調査前には水田として利用されており、表土（水田耕作土）は40cm程度の厚さで、それより下層には水田耕作の痕跡は確認できなかった。この水田は比較的新しい時期に開墾されたものであろう。表土より下層は、1・2層が遺物包含層で薄く水平に堆積し、その下層はⅢ区中央部を中心にレンズ状に堆積する3～7・9層と、厚く堆積する10層～14層、10と9



第2図 玉田遺跡周辺地形図(1/3,000)

層の間に堆積する8層・15層から構成される。このうち、1・2層、9・10層、15層が主要な遺物包含層であり、その他の層から遺物は殆ど出土しなかった。

調査の概要 調査に当たっては、試掘調査を省略して表土剥ぎから着手したため、着手当時は上記のような堆積状況を十分には把握できず、遺構面の確定には難を伴った。調査区内には2条の水路が流れていたため、調査区は主幹排水路の東西に二分し、さらに東側を南北に二分して、北東部をⅠ区、南東部をⅡ区、西部をⅢ区とした。表土剥ぎはⅠ区から始め、1層上面で溝と思われる痕跡を確認したため、この面を遺構面として調査を開始した。ただし、調査中盤で溝の掘削面は2層下層であると判断でき、Ⅰ区は手掘りで2層下面まで掘削を行った。

さて、調査は第Ⅰ区での遺構の検出、溝状遺構の掘削と第Ⅱ区の表土剥ぎを同時併行で進行させたが、溝状遺構の調査中に溝状遺構の埋土と基本層序の10・15層が非常に似通っており、また溝状遺構が第Ⅰ区の調査区的最東端部を南北に貫いていたため、溝状遺構自体を基本層序10・15層が遺構面に露出したものと誤認してしまい、第Ⅱ区においてはこの判断をもとに調査を進めてしまった。しかし、調査の最終盤になって第Ⅱ区北・南壁の基本土層を精査したところ、双方に溝状遺構の断面が確認でき、第Ⅱ区の東端部を南北に縦断するように溝状遺構が存在すること、また第Ⅰ区の調査当初に確認した溝状遺構も存在することが再確認できたため、これを1号溝とした。従って、Ⅰ区では1号溝をほぼ全て掘削でき、おおかたの遺物もこれに付属するものとして取り上げることができたが、一部の遺物については10・15層出土として取り上げることなった。また、Ⅱ区では溝の掘削を行うことができなかった。

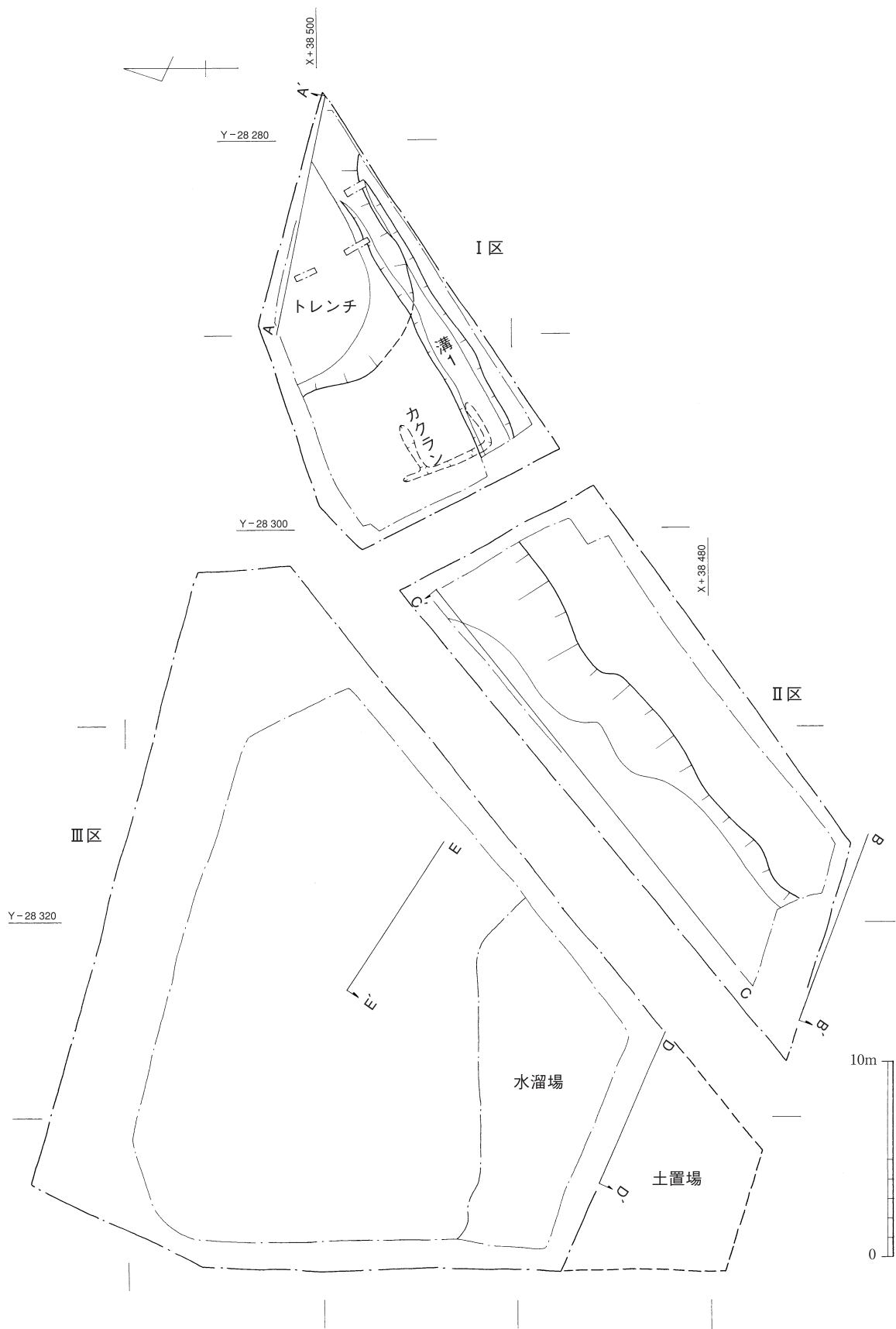
一方、Ⅲ区の表土剥ぎについては当初Ⅰ区の1号溝検出面と同じ層を検出することを目標に作業を進めたが、一定の深さ以上掘削しても同一層を確認できないばかりか、地山がきわめて弱く重機のキャタピラが沈み込むようになったため、一定の深度で掘削を断念せざるを得なかった。また、湧水が著しくⅢ区南半部は大きな水溜場にした。

第Ⅰ面の遺構は上記の1号溝しかなく、その後再びⅠ・Ⅱ区に重機を投入して下層遺構面の検出に努めたが、明確な遺構は確認されなかった。ただし、10層に遺物が多く含まれ、この層の途中まで掘削を進めた。しかし、湧水が著しく壁面の崩壊の危険が生じたため、最終的に掘削は中止し、Ⅲ区中央部にトレンチを設定して下層の確認を行った後、埋め戻して調査を終了した。

第2節 検出遺構と出土遺物

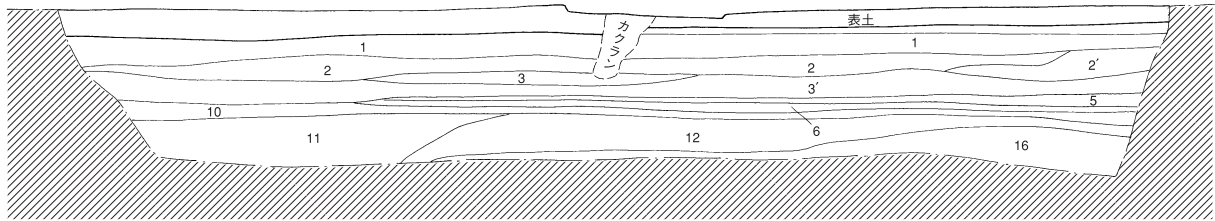
第1項 はじめに

検出した遺構は、上述の通り溝状遺構1条（1号溝）のみである。この1号溝についても、第Ⅰ区ではその全体を検出できたが、第Ⅱ区では包含層と取り違えて調査してしまったために、調査区南端の基本土層中の層位以外の記録を残すことができなかった。なお、出土土器については第Ⅰ区における調査中にこの溝より出土したのものとして取り上げた遺物をこの溝の出土遺物として記載するが、これ以外に第Ⅰ区7層・10層出土遺物として取り上げた遺物の一部とⅡ区7層として取り上げた遺物の一部もこの溝から出土したものである可能性が高い。

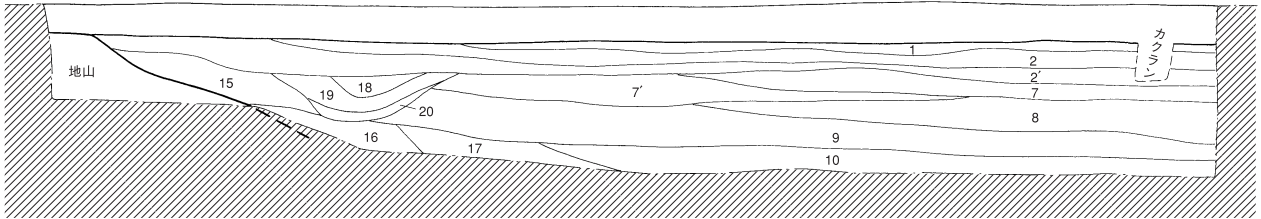


第3図 玉田遺跡調査区配置図(1/300)

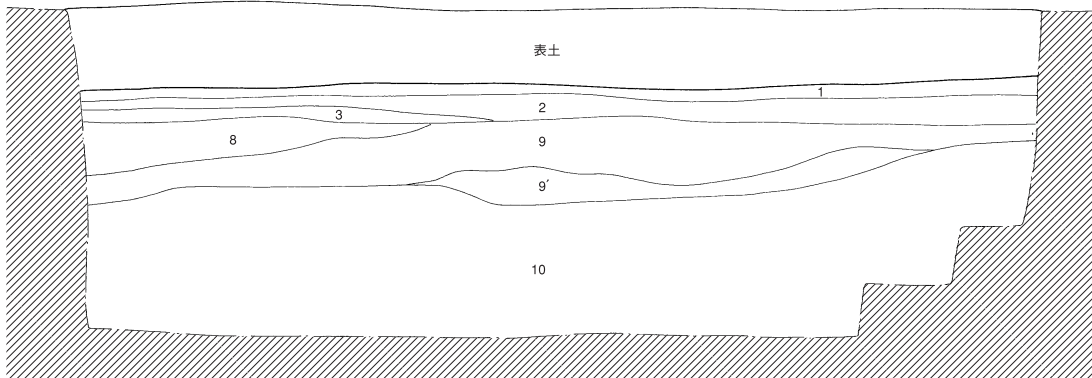
A I 北 16.6m A'



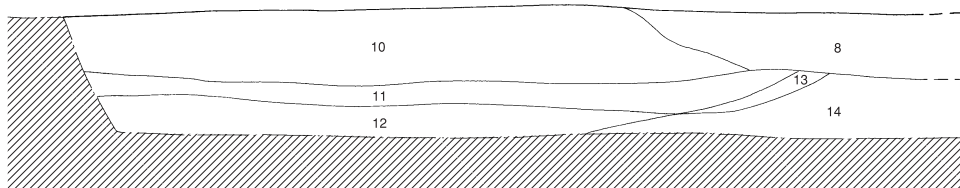
B II 南 16.6m B'



D III 南 16.6m D'



E III 中央 15.4m E'



※土層名は第5図と共通

- | | |
|---|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 褐色粘砂質土 (層中に鉄分沈着) 2. 黄褐色粘砂質土、小礫含む (層中に鉄分沈着) 2'. 黄褐色粘砂質土 (層中に鉄分沈着) 3. 暗灰褐色粘砂質土、層中に小礫をやや多く含む (層中に鉄分沈着) 3'. 暗灰褐色粘砂質土、層中に小礫を含む (層中に鉄分沈着) 4. 茶褐色粘砂質土 5. 黒灰色粘質土、均質で軟らかい 6. 明青灰色粘質土、特に軟らかい 7. 暗褐色粘質土、やや小礫を含み硬い 7'. 暗褐色粘質土、均質 8. 暗灰色粘質土 (シルト状)、均質で軟らかい 9. 灰褐色砂質土に暗灰色粘質土を層状に含む、小礫を多く含む 9'. 暗灰色粘質土に灰褐色砂質土を層状に含む | <ol style="list-style-type: none"> 10. 黒褐色粘質土、均質 11. 黒褐色粘質土と暗灰褐色砂質土が互層状をなす、弥生後期土器含む 12. 暗灰褐色砂質土に黒褐色粘質土が層状に入る 13. 暗灰褐色砂質土 14. 暗灰色粘質土 (ややシルト状をなし、下層に行くほど砂質分が多い) 15. 暗褐色粘質土 16. 黄褐色粘砂質土、小礫わずかに含む 17. 青灰色シルト 18. 黒灰色砂礫土 19. 暗灰褐色砂質土 20. 灰黄褐色粘砂質土 |
|---|---|



第4図 I 区北・II 区南・III 区南・III 区中央壁土層図(1/60)

出土した遺物はほとんどが細片であり、全体の形状が分かる資料はほとんどなく、細片資料のため傾きや直径についてはほとんどが正確には決めかねるものであった。しかし、図化に際しては全体形状を示すことを意識し、可能な限り直径を復元することに留意した。従って、復元直径についてはほとんど全て厳密なものではない。

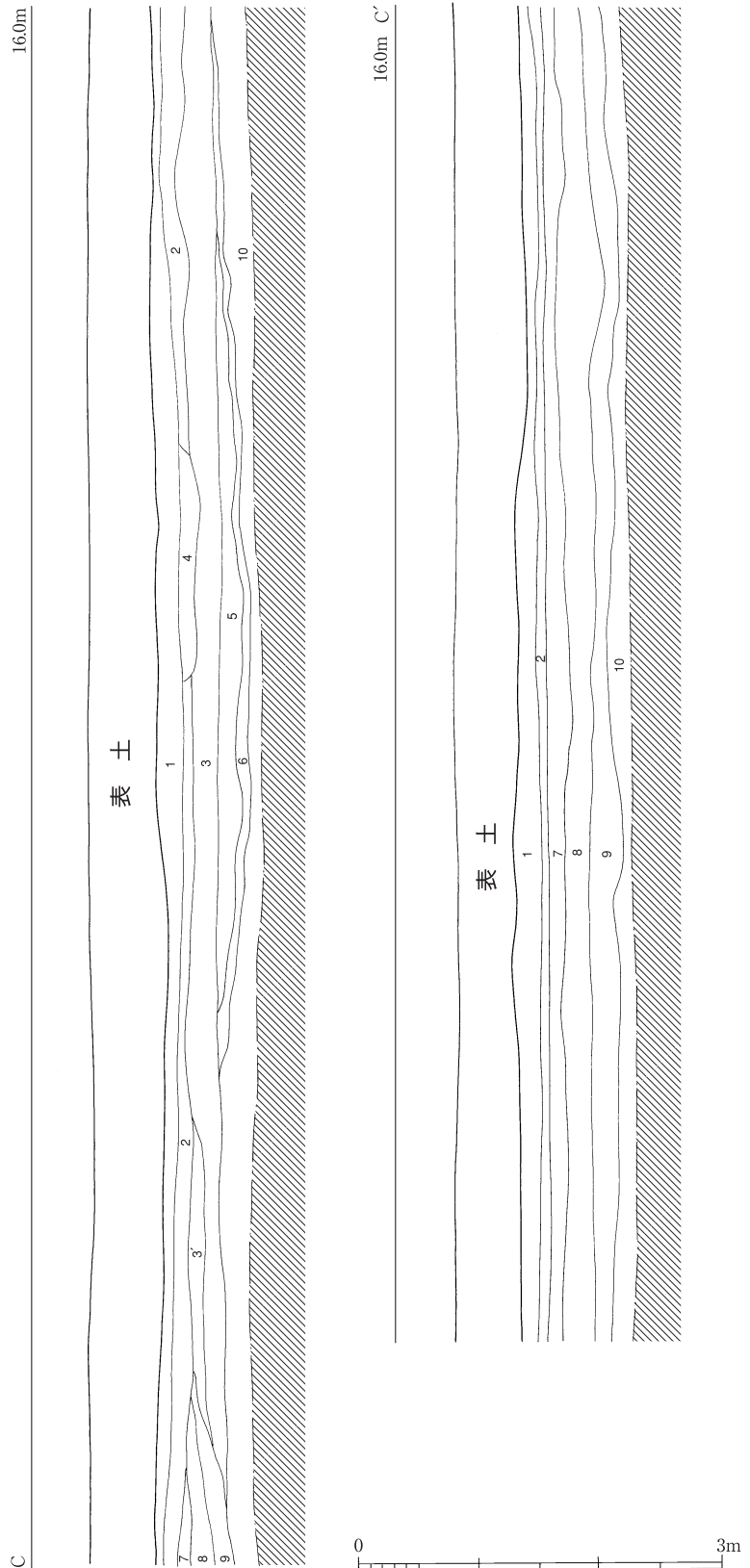
第2項 溝状遺構

1号溝（第3・4図、図版2）

第I区・第II区の東端部を南北に直線的に縦断する溝状遺構である。深さは検出面から約60cmをはかり、断面はV字状を呈する。溝内の堆積はレンズ状堆積で、自然埋没の状況を示す。出土土器から、古代末期以降に埋没したと考えられる。

出土土器（第6図、図版6）

弥生土器（1～7） 1は甕形土器の口縁部である。如意状に外反する口縁部だけが残る。口径は25.0cmをはかる。内・外面とも摩耗が著しく調整は不明。2は壺形土器の底部片である。底径は約9.0cmをはかる。内面は剥離により失われる。外面はナデ仕上げ。いずれも前期土器である。3は長胴壺の口縁部片か。外反しながらのびる口縁部だけが残る。内・外面ともにハケメ後ナデ仕上げ。口径は27.8cmをはかる。4は甕形土器の口縁部片。頸部屈曲部より上位のみが残る。口縁端部はわずかに肥厚させながら四角に仕上げる。



第5図 II区西壁土層図(1/60)

内・外面ともハケメ調整が明瞭に残る。口径は23.8cm。5は脚付甕の脚部。底部は尖底に近く、短く広がる脚がつく。脚部・底部内面には板状工具による強いナデ痕が残る。脚部径は10.6cmをはかる。6は長胴壺の頸～口縁部片か。口縁端部は失われ、直線的にやや広がりながら伸びる口縁部下半のみが残存する。頸－胴部境に断面三角形の突帯がつく。調整は内・外面ともにハケメ調整、突帯部はナデ仕上げ。7は大型の壺形土器の底部片。ややレンズ状の底部から緩く内湾しながら上方に伸びる。内・外面ともにハケメ後ナデ仕上げ。いずれも後期後半～末の資料。

須恵器（8～11） 8・9は坏蓋。8は平坦な天井部から下方に直角に屈曲し、端部を小さく外に突き出す。径は21.0cmをはかる。9はやや湾曲しながら斜め下方に伸びる天井部の端部を短く下方に突き出す形状を持つ。径は15.8cmをはかる。ともに内・外面とも回転ナデ仕上げ、9は天井部外面に回転ヘラ削りの痕跡を残す。10は坏身である。断面逆台形の高台と、平坦な底部から斜め上方に直線的に伸びる胴部を持つ。調整は内・外面ともに回転ナデ仕上げ。高台径は8.8cmをはかる。11は大形甕の胴部片か。内面には平行タタキ、外面には格子目タタキ痕を残す。

土師器（12・13） 12は内面黒色碗である。半球状の坏部に細長く湾曲しながら伸びる高台を持つ。外面ナデ、内面はミガキ調整。高台径は7.2cmをはかる。13は皿形土器。緩やかに屈曲しながら開く器形を持ち、内・外面ともナデ仕上げ。口径は16.8cmをはかる。

陶磁器（14・15） 14は白磁碗である。直線的に開く口縁部のみが残っており、外面に段を形成する。太宰府分類（宮崎編2000、以下、単に分類名のみを記す）の白磁碗Ⅴ類またはⅧ類か。胎土は白黄色で非常に精良であり、釉色は透明に近い。15は越州窯系青磁碗である。全形が分かり、断面台形の高台と緩やかに湾曲しながら開く坏部を持ち、口縁端部は短く如意状に外反する。Ⅰ－2類か。

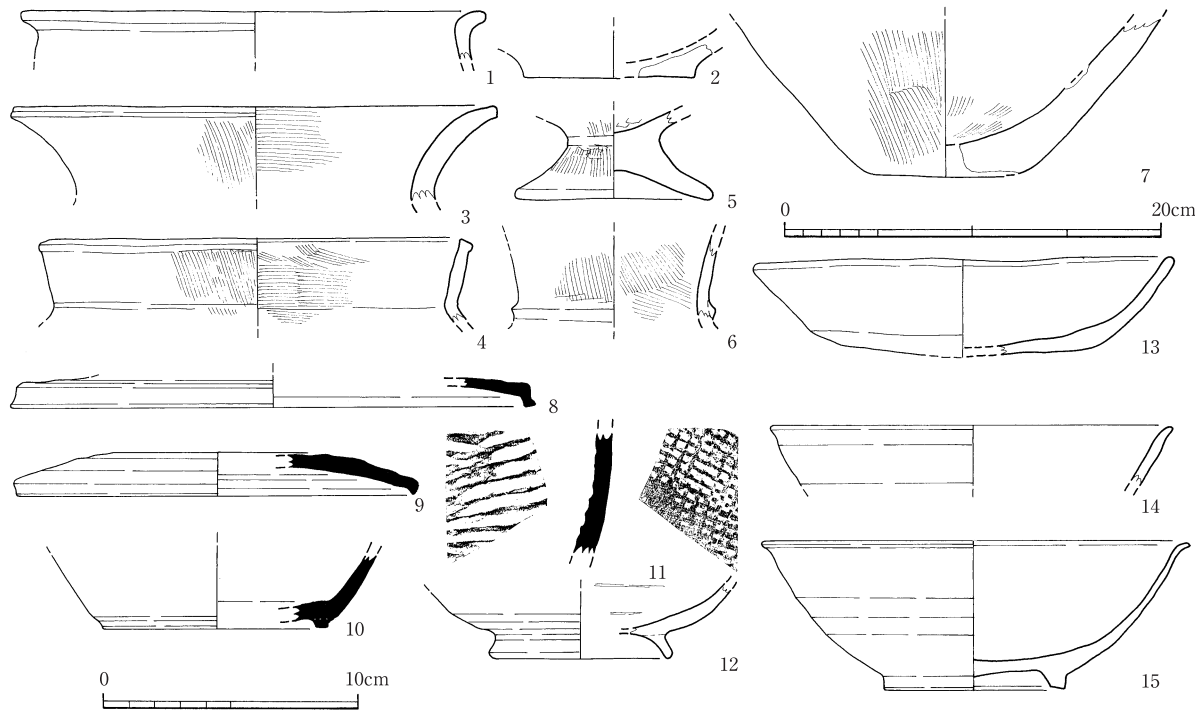
第3項 包含層出土土器

Ⅰ区1層出土土器（第7～8図、図版6）

弥生土器（1～3） 1は複合口縁壺の口縁屈曲部である。小片で全体に磨耗が進んでいる。屈曲部最大径は24.0cmほどをはかる。2は甕形土器の口縁部片であろうか。やや外湾しながら外側に強く開く形状である。口縁端部は外側につまみ出す。調整は内・外面ともにナデ仕上げ。口径は26.0cmをはかる。3は大形複合口縁壺の胴部片であろう。刻目突帯部の資料である。断面台形の突帯部に細く鋭い刻目を入れる。

土師器（4・5・14～45） 4は古墳時代初頭の二重口縁壺である。頸部上端から強く開き、屈曲して再び外に強く開く口縁部までが残る。頸部外面にハケメがみられるほかはナデ仕上げで、口縁部外面には丹が残る。口径は20.0cmをはかる。5は甑の把手である。指ナデ痕が明瞭に残る粗雑な仕上げで、比較的サイズが大きい。古墳時代後期～古代の資料か。

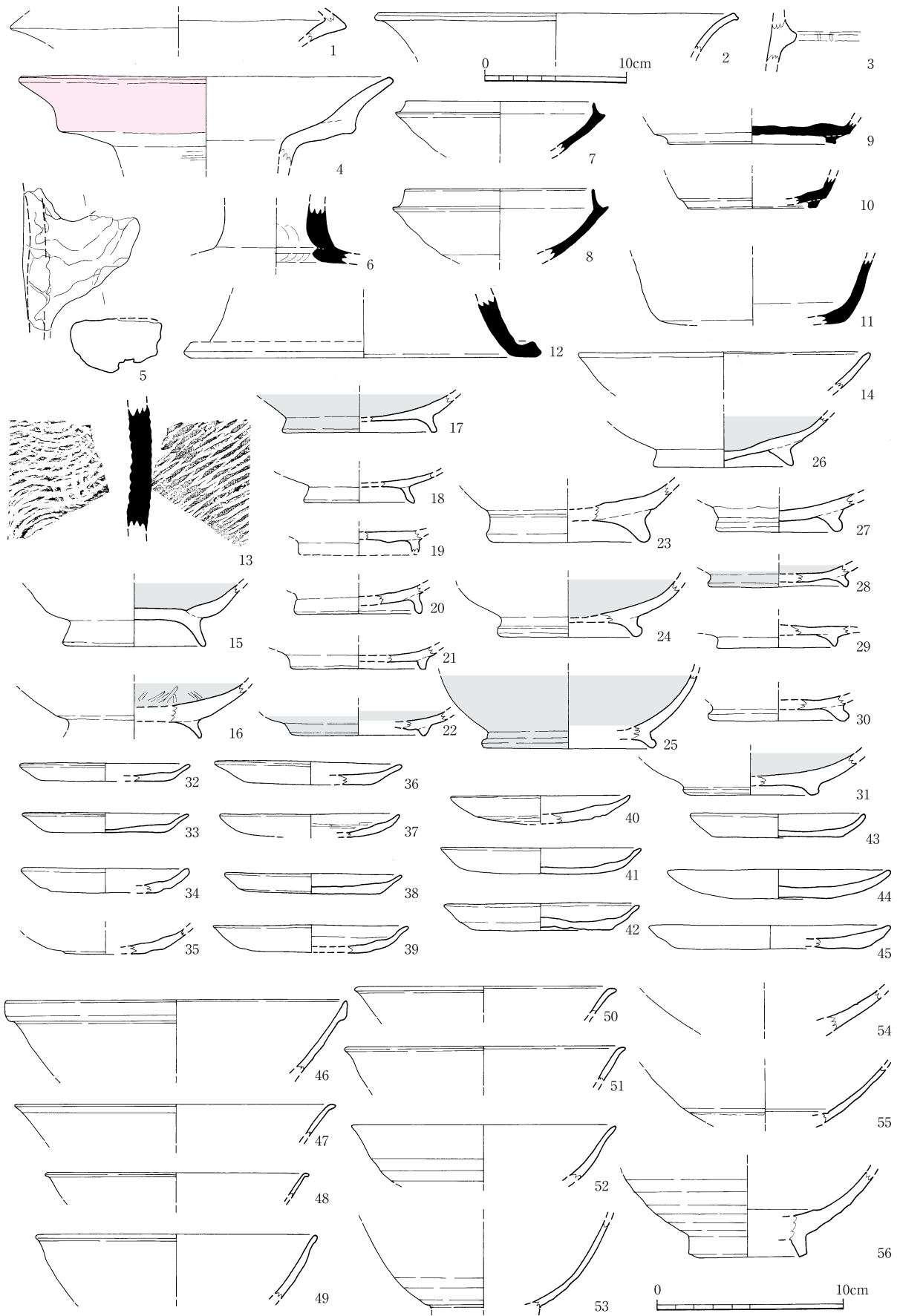
14～31は高台付の碗形土器である。14は口縁部のみが残る。直径は15.6cmをはかる。15～18は「ハ」の字に開きながら長く伸びる高台を持つ資料群である。15は高台が非常に高い。16の内面にミガキ痕が認められるほかは内・外面ともにナデ仕上げか。このうち15・16が内面黒色、17は内・外面ともに黒色。高台径は15が7.6cm、16が7.2cm、17が8.2cm、18が6.0cmをはかる。19・20は



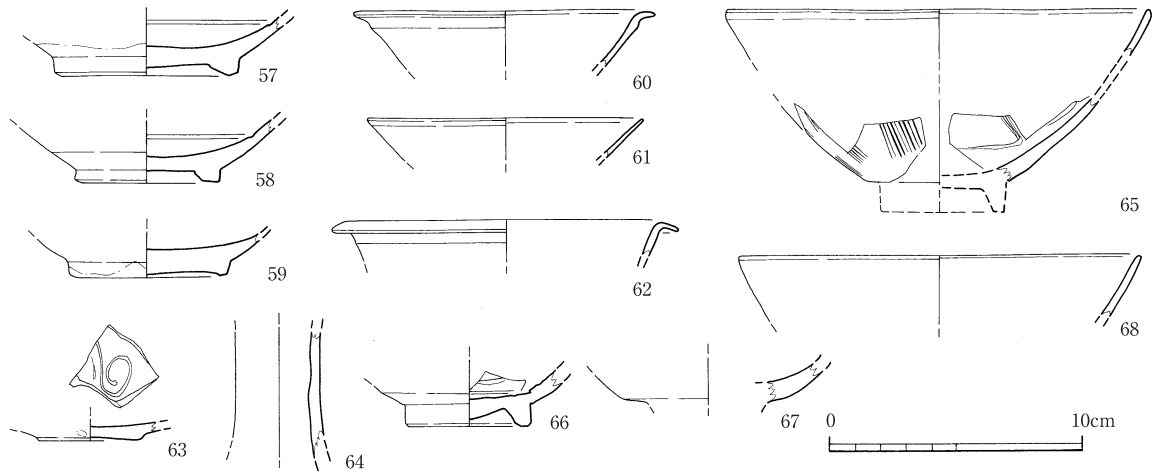
第6図 1号溝出土土器実測図（1～7は1/4、他は1/3）

高台を細く下方にのぼす資料群である。19は真下にのぼし、20はやや開き気味にのぼす。19の内面にミガキ痕が残り、ほかの部位はナデ仕上げ。19・20ともに高台径は6.8cmをはかる。21は真下にやや太めの高台をのぼす資料である。内・外面ともナデ仕上げ、高台径は7.4cmをはかる。22は短い高台をつける資料であり、断面形状はやや三角形に近い。内・外面とも黒色で、ナデ仕上げか。高台径は7.3cmをはかる。23～25・27・28・30は高台の付け根が広く、「ハ」の字に開く太い高台を有する一群である。このうち、23は太く大きい高台を有し、高台径は8.8cmをはかる。内・外面ともに磨滅しており調整は不明。24・25・27は高台端部を丸く肥厚させる一群である。いずれも磨滅がひどく調整は判然としない。24は内面黒色、25は内・外面黒色。高台径は24が7.6cm、25が9.2cm、27が6.8cmをはかる。28・30は高台端部を肥厚させず丸く収める資料である。いずれも磨滅がひどく調整は不明。高台径はともに7.6cmをはかる。26・29は断面三角形の高台をつける資料である。26は底部まで球状であり、内面黒色で高台径は7.6cmをはかる。29は底部が平坦で高台径は6.4cmをはかる。いずれも調整は不明。31は断面が丸い高台をつける資料。内面の調整は不明だが黒色を呈し、外面はナデ仕上げ。高台径は7.3cmをはかる。

32～45は土師皿である。32・33・36・38・42・43は平坦な底部から明瞭に屈曲し、短く立ち上がる器形を持つ一群である。34・35・39・41・45は底部外面は屈曲が比較的明瞭に現れるが内面は緩く湾曲する器形を持つ一群である。37・40・44は底部・口縁部境が明瞭でない一群である。このうち、32・35・40・42の底部外面には粘土紐の巻き上げ痕跡が残る。また38・39・41の底部外面には板状工具による調整痕跡が残る。また39には併せてヘラ切り痕跡も認められる。そのほかのものや底部以外の調整は磨耗により明瞭でないものが多いが、基本的にナデ仕上げとみられる。口径は38が7.3cm、32～34が9.0cm、43が9.3cm、37・40が9.6cm、36が10.0cm、39・42が10.4cm、



第7図 I区1層出土土器実測図その① ((1~3は1/4, 他は1/3))



第8図 I区1層出土土器実測図その② (1/3)

41が10.6cm、45が11.0cm、44が12.0cmをはかる。

陶磁器 (46~68) 46~59は白磁碗である。46~52は口縁部 (~胴部) が残る資料群である。46は口縁端部を肥厚させる資料で、IV類に当たる。口径は18.4cmをはかるやや大形の碗である。47・48・50・51は口縁端部を外側に短く引き出す資料群で、V (またはVIII) 類に当たるか。口径は47が17.0cm、48が14.2cm、50は14.0cm、51は15.0cmに復元した。49は口縁外面に段を有する資料。V類か。口径は15.2cmをはかる。52は口縁端部をわずかに外反しながら収める資料で、IV類に当たるか。口径は14.2cm。53~55は胴部が残る資料群である。53・55は胴部下半が露胎で、53の露胎部分と55の外面ほぼ全域に回転ヘラ削り痕が認められる。失われているがおそらく54の胴部下半も露胎であろう。53の外面には釉ダレの痕跡が認められる。54・55の内面には段が認められる。56は胴部下半と高台部が残る資料である。高台は比較的高く断面は台形状を呈する。高台底部と高台内部は露胎であるが、そのほかの外面全面には釉がかかる。胴部外面には明瞭な回転ヘラ削り痕が認められる。また内面には段が1段ある。高台径は6.4cmをはかる。V-2類か。57~59は底部が残る資料である。57は高台が比較的低く、断面形状は五角形状を呈する。高台部は露胎。高台径は7.4cmをはかる。内面に段を有し、IV-1類か。58は高台内面を斜めに削り落とす資料で、やはり内面に段が認められる。残存部の外面全面が露胎である。IV類か。高台径は5.8cmをはかる。59は高台内部をほとんど削らない資料で、I類か。高台部外面が露胎である。高台径は6.2cmをはかる。60は白磁小碗である。口縁部外面に段を有し、端部を強く外に引き出す。口径は12.0cmをはかる。61・63は白磁皿か。61は直線的に伸びる口縁部のみが残る。口縁端は鋭くとがる。口径は11.0cmをはかる。63は底部が残る。高台は低く、内部をほとんど削り出さない。高台部は露胎。見込みにヘラ両切りの文様がみられる。高台径は4.0cm。IV類か。62は小型壺の口縁部であろうか。口縁部が強く屈曲して下方に垂れ下がる。口径は13.4cmをはかる。64は小型壺の頸部片か。内面には捻りながら伸ばし上げた痕跡が残る。釉には貫入がみられる。

65~68は青磁である。65~67は同安系青磁碗である。65は小片ばかりであるが釉や胎土の特徴から同一個体として復元した。比較的まっすぐ伸びる胴~口縁部が復元でき、口径は17.0cmをはかる。胴部外面に櫛描文が認められる。胎色は灰色、釉色は灰緑色を呈する。釉に貫入が認めら

れる。66・67は底部片で、66のみ高台が残る。66の高台は台形の両下端角部を削り落としており、内面中央部が厚い。内面には櫛描文が認められる。高台径は5.0cmをはかる。67は高台が失われており、胴-底部境の屈曲部が残る資料である。これら二つの釉色はオリーブ色で貫入が認められ、胎色は灰色である。68は龍泉系碗の口縁部である。釉色は暗緑灰色で貫入が認められ、胎色は暗灰色できわめて緻密である。口径は16.0cmをはかる。以上の陶磁器群はおおよそ11世紀後半～12世紀にかけてのものであり、土師碗・土師皿と同時期の資料であろう。

Ⅱ区1層出土土器（第9図）

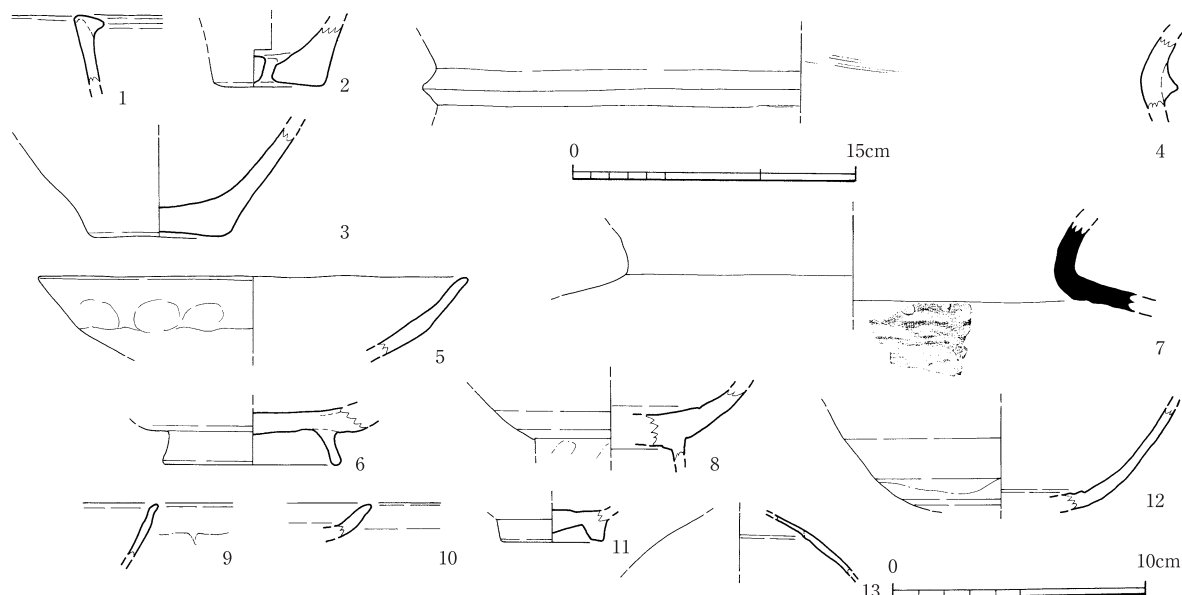
弥生土器（1～4） 1は甕の口縁部で、口縁外面に三角突帯が付く、いわゆる亀の甲系の資料である。小片で径は不明。2は甕の底部片である。中央部に焼成前穿孔が認められる。径は約6.0cmをはかる。3は壺形土器の底部片である。全体に磨滅が著しい。径は約7.8cmをはかる。これらは前期末～中期初頭の資料群であろう。

4は大形甕の頸部屈曲部片である。断面三角形の突帯を有する。調整は内・外面ともにハケメ後ナデ、突帯部のみ丁寧な横ナデを施す。後期後半以降の資料であろう。

土師器（5・6） 5は浅い碗形土器である。外面に指頭圧痕をよく残す。口径は17.0cmをはかる。6は碗の底部片で、「ハ」の字に開きながら細長く伸びる高台を持つ資料である。底部は平坦である。高台径は7.0cmをはかる。

須恵器（7） 7は大形甕の肩部片である。肩より上位は内・外面ともにナデ仕上げ、胴部は内面に青海波文、外面回転ナデ。

陶磁器（8～13） 8は白磁碗の底部片である。高台は比較的高く細い。高台内面のみ露胎である。底部内面に段を有し、V類か。9は白磁碗の口縁部片である。外面にわずかに段が認められる。釉には貫入が認められる。10は白磁皿か。口縁部のみの小片で径は不明。11は同安系青磁碗の底部片である。断面台形の高台を有し、外面残存部は全て露胎、内面にはオリーブ色の釉が厚く掛かり貫入が認められる。口径は4.2cmをはかる。12は白磁碗の胴部片である。胴部下半は露胎



第9図 Ⅱ区1層出土土器実測図（1～4は1/4、他は1/3）

で、回転ヘラ削り痕が胴部外面全体に認められる。底部内面には二条の段が認められる。V類か。13は瀬戸灰釉陶器である。非常に器壁が薄く、小型の器種であり、おそらく壺形土器の肩部と考えられる。注口が付く可能性が高いがうまく図化できなかった。内面に粘土胎接合による段が認められる。釉色は緑黄色で、胎色は灰黄色を呈する。

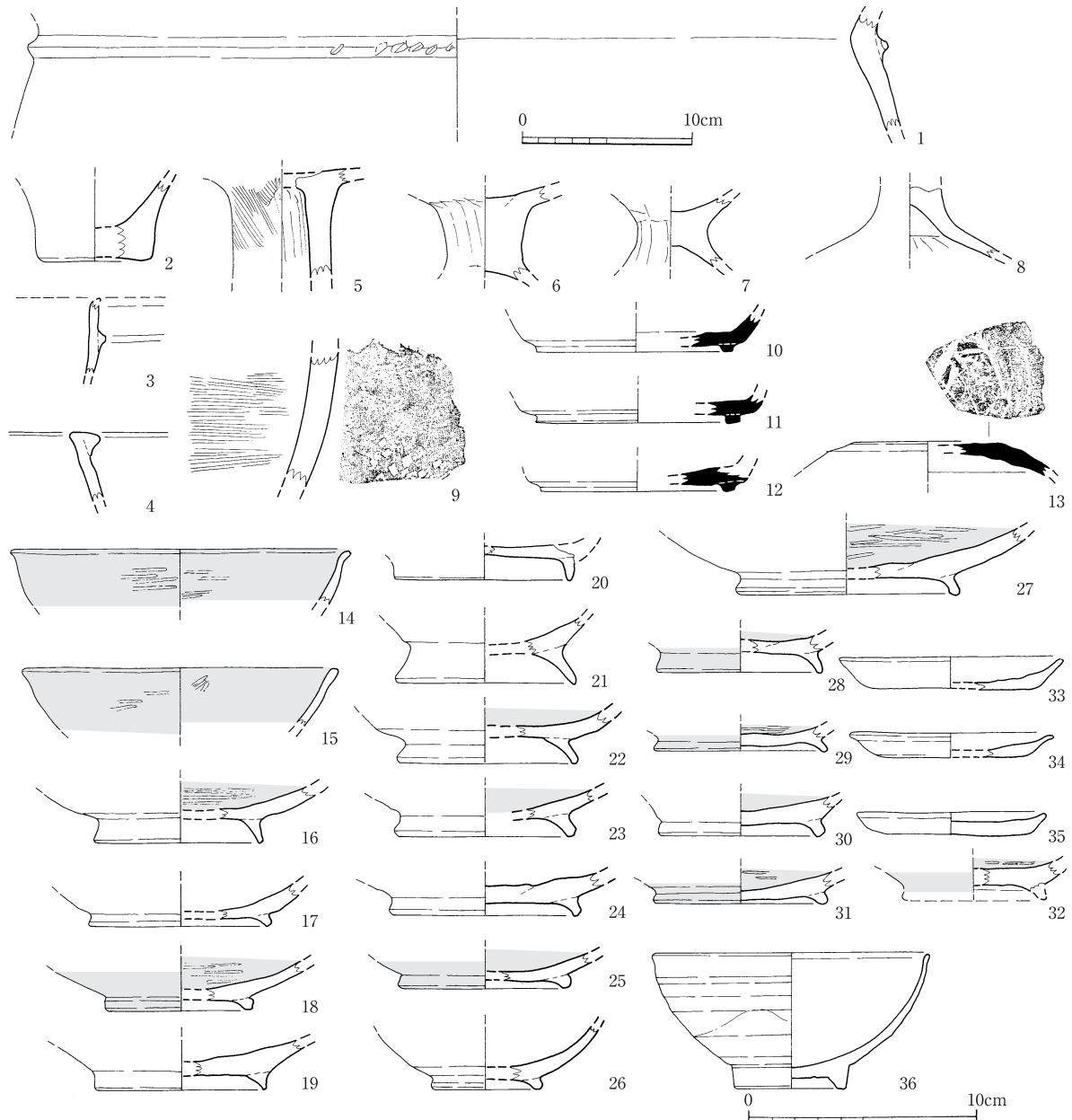
I区2層出土土器（第10図、図版6）

弥生土器（1～4） 1は後期の大形甕形土器である。頸部～胴部上位が残る。頸－胴部境に断面三角形の突帯を付し、刻目をつける。磨滅しており調整は不明。2は前期末の甕底部である。厚みがあり底径は小さい。内・外面ともにナデ調整。3は如意状に外反する甕口縁部片。口縁下部に三角突帯を付加する。4は口縁端部に三角突帯を付加する亀の甲系甕の口縁部片。ともに調整はナデを中心とする。いずれも前期後半～中期初頭前後の資料である。

土師器（5～8・14～34） 5～8はいずれも高坏の脚上半部～坏底部片である。5は円筒状に長く伸びる脚を持つ。外面ハケメ、内面には指頭ナデ痕が残る。6はやや短い脚を持ち、脚部には粘土が充填されている。内・外面ともにナデ仕上げ。7は短く広がる脚を持つ。内・外面ともナデ仕上げ。8は末広がり広がる脚部片である。内部には段が認められ、段より下部は板状工具によるナデ痕がよく残る。いずれも古墳時代初頭の資料であろう。

14～32は高台を有する碗。14・15は口縁部のみが残る。半球状の碗であろう。ともに内・外面にミガキ痕が確認でき、内・外面とも黒色に仕上げる。14は口縁端部をやや強めに外反させる。口径は15.0cmをはかる。15は口縁部をまっすぐ伸ばす。口径は14.0cm。16・21・22は断面形状が細く「ハ」の字に開く高台を持つ。21は中でも一番高台が高い。高台径は8.0cm。16・22は底部内面が平坦で、高台は「ハ」の字に開きながら伸びる。高台径は16が7.5cm、22が8.0cm。これらのうち16の内面にミガキ痕が認められ、黒色を呈する。そのほかは磨滅により調整はやや不明瞭だがいずれもナデ仕上げか。20は細い高台が直下に伸びる。高台径は8.0cm。調整は磨滅により不明瞭。17・27～29はやや短めで細い高台を持つ。17の高台径は8.2cm。27はやや大形の資料で高台もやや太く、径は10.0cmをはかる。28の高台径は7.4cm、29の高台径は7.6cmをはかる。このうち、27・29の内面にミガキ痕跡が認められ、27の内面は黒色に仕上げる。18・25・26・31は断面が円形の高台を持つ資料である。いずれも底部は緩やかに湾曲する。高台径は18が6.6cm、25は7.8cm、26は4.9cm、31は7.6cmをはかる。18の内面、31の内面にミガキ痕が認められ、また18・25・31の内・外面は黒色に仕上げる。19は口縁断面が三角形の資料である。高台径は7.8cmをはかる。調整はほぼ全体が横ナデだが、高台部より内側の外面に板状の工具を回転させながら押しつけた痕跡が残る。23・24・30は断面が太めでやや短く「ハ」の字に伸び、端部を丸く収める高台を有する一群である。23の高台端部は肥厚させる。いずれも調整はナデ仕上げか。23・30の内面は黒色に仕上げる。高台径は23が8.0cm、24が8.5cm、30が7.3cmをはかる。32は高台が失われている。内面にミガキ痕跡が残り、内・外面とも黒色に仕上げる土器である。

33～35は土師皿である。33・34の底部には板状工具による強いナデ痕跡が、また35の底部には紐積み痕跡が残る。口径は33が10.0cm、34が8.9cm、35が8.2cmである。

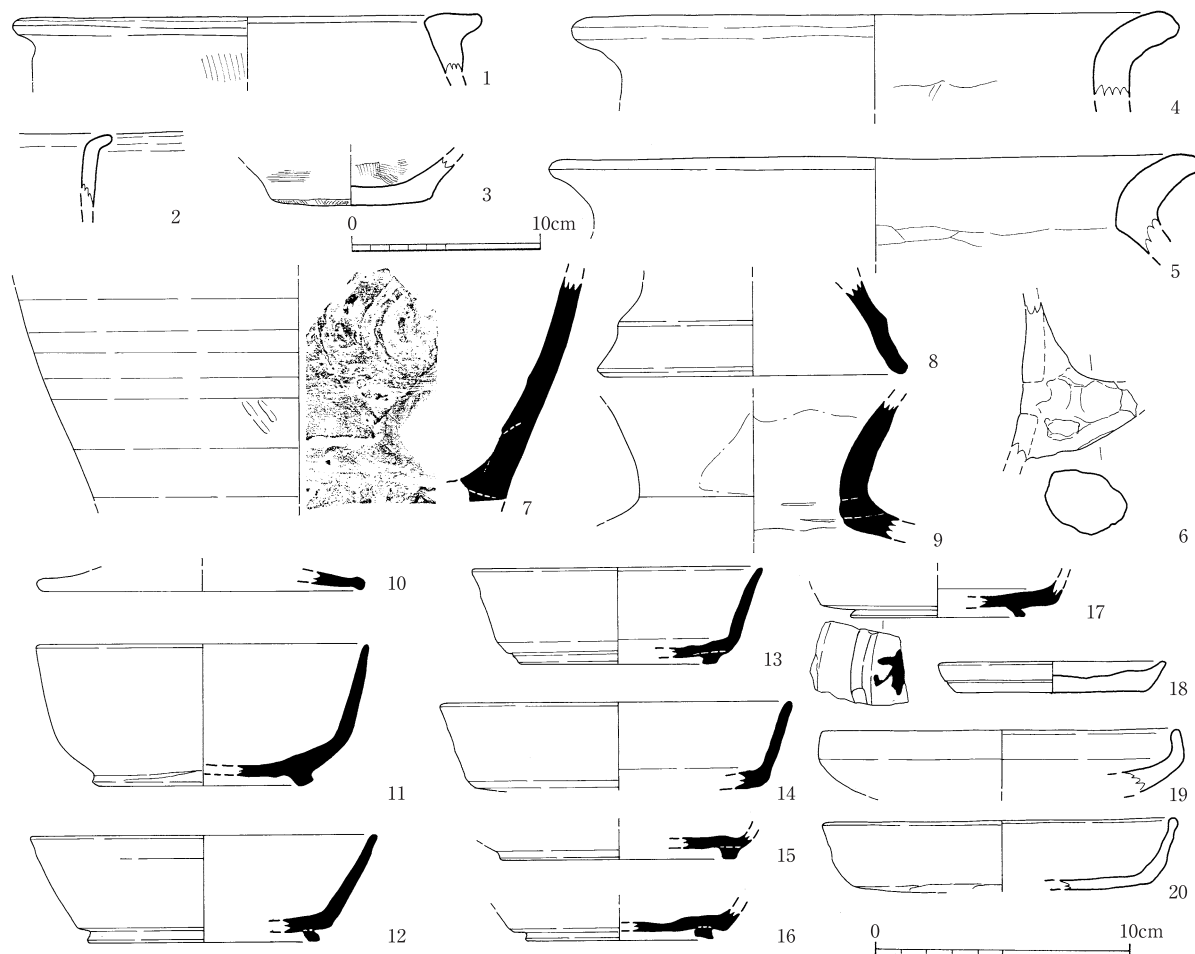


第10図 I区2層出土土器実測図（1～4は1/4、他は1/3）

須恵器（10～13） 10～12は高台を有する坏身である。いずれも平坦な底部から屈曲して斜め上方に伸び、口縁部へと至る形状を持つ。高台部の断面形状はいずれも長方形または台形状である。高台部径は10が8.8cm、11が9.0cm、12が8.8cmをはかる。いずれも古代前半期の資料群であろう。13は坏蓋である。小さな平坦な天井部から、緩やかに湾曲しながら口縁部へと下がる器形を持つ。天井部にヘラ切り痕跡が残る。ヘラ記号が認められる。古墳時代後期の資料である。

瓦器（9） 9は鉢形土器あるいは大形の壺形土器の胴部片であろうか。内面には細かいハケメが残り、外面の一部に格子目タタキ痕跡を残す。

陶磁器（36） 36は白磁小碗である。全形が復元でき、半球状の全体形状を持つ。口縁部はごくわずかに外反させる。高台断面は台形状を呈する。口径12.2cm、高台部径5.0cmをはかる。外面中



第11図 II区9層出土土器実測図（1～3は1/4、他は1/3）

～下部に回転ヘラ削り痕跡をよく残す。釉色は灰色で胎土も灰色、釉には貫入が認められる。

II区9層出土土器（第11図）

弥生土器（1～3） 1は未発達な鋤先口縁を持つ甕の口縁部片。摩滅が著しいが外面の一部にハケメが認められる。口径は25.0cmをはかる。2は如意状口縁を持つ板付系甕の口縁部片。摩滅により調整は不明。3は甕形土器の底部片でややレンズ状の形態を持つ。底部・内・外面にハケメ痕をよく残す。径は8.4cmをはかる。1は中期前半、2は前期、3は後期中葉の資料である。

土師器（4・5・18～20） 4・5はいずれも大形甕の口縁部片。強く外湾しながら開き、端部を丸く収める。調整はともに口縁部内・外面が布ナデ、胴部内面にケズリ痕を残す。口径は4が24.0cm、5が26.0cm。6は甑の把手。指ナデ調整・差し込み接合痕がよく残る。以上は古墳時代後期～古代の資料群であろう。18は土師皿。底部は回転ヘラ切り痕が認められる。口径は7.4cm。19・20は浅い椀形土器である。いずれも底部が水平に伸び、屈曲して短く上方に伸びる器形を持つ。調整は内・外面ともナデ仕上げ。口径は19が14.0cm、20が14.1cmをはかる。

須恵器（7～17） 7は短頸壺の胴下半部片か。底部との接合痕が明瞭に残り、円盤状の底部の外面に粘土板を巻き付けて整形したもの。内面には青海波文がよく残り、外面は平行タタキのちヘラ状工具にてナデを施しタタキ目を消している。8は高坏の脚部片か。末広がりの器形で、一

段の屈曲部がある。端部は丸く収める。調整は内・外面ともにナデ。底径は12.4cmをはかる。9は壺形土器の肩部片である。胴-頸部境に二重の接合痕が認められる。調整は内・外面ともにナデ。10は坏蓋である。水平に伸びて端部を下方に突き出す器形を持つ。残存部は全て横ナデ。口径は13.0cmをはかる。11~17は坏身である。14以外は高台を有する。11は屈曲部がやや丸みを帯びる資料。高台の断面は台形状を呈する。12~17は底部が水平に伸び、屈曲部が明瞭な資料。12・16・17の高台の断面は外に踏ん張り、13・15の高台断面は台形状を呈する。全ての資料が内・外面ともにナデ仕上げ。高台径は11が8.7cm、12が9.1cm、13が8.0cm、15が9.4cm、16が7.4cm、17が6.8cmをはかる。また口径は11が13.2cm、12が13.7cm、13が11.6cm、14が14.0cm。17の底面高台内に墨書が認められる。「木」偏か。いずれも7世紀後半~8世紀代の資料であろう。

以上の出土土器から、9層は古墳時代末~古代前半期に形成された可能性が高いと考えられる。

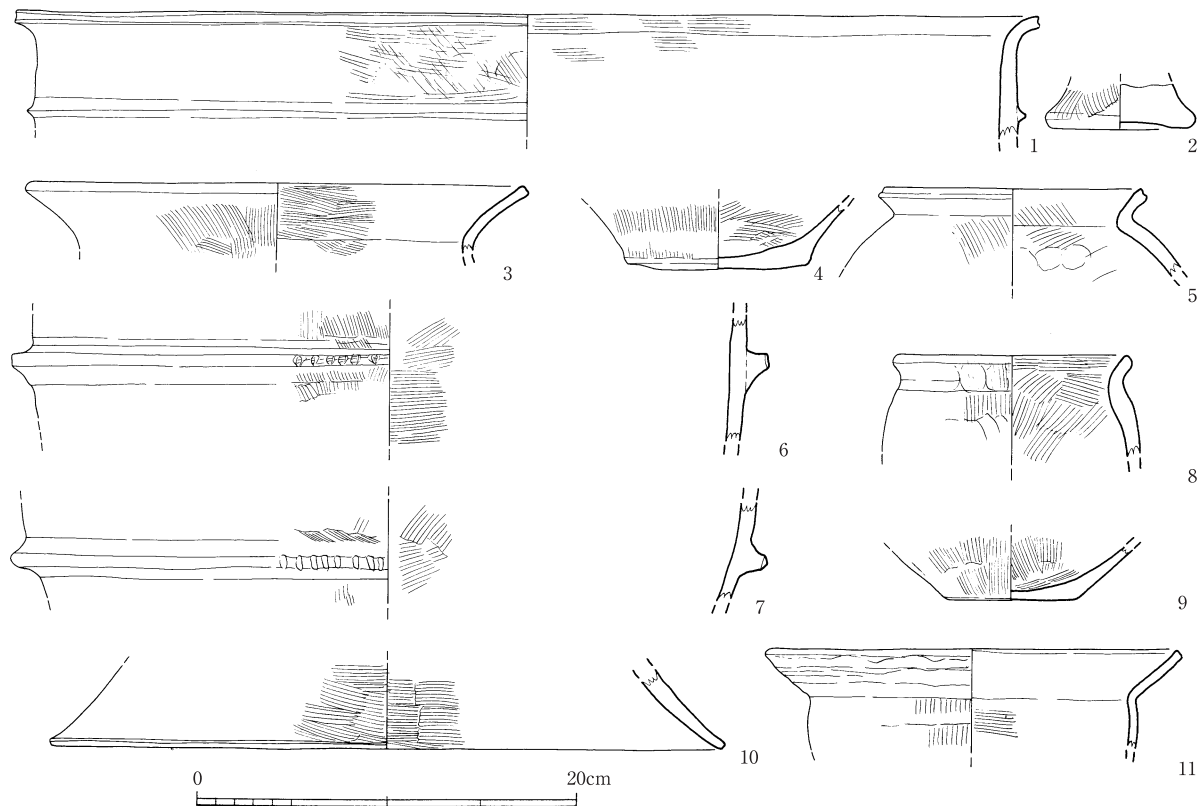
I区第15層出土土器（第12図）

弥生土器（1~11） 1は甕形土器の口縁部片である。口径54cmをはかる大型品で、口縁部を如意状に外反させ、口縁端部は四角く収める。口縁部下方に三角突帯を1条付す。内・外面ともにハケメ調整後ナデ仕上げ。2は甕形土器の底部片である。底部からの立ち上がりを強くくびれさせ、底部は若干の上げ底となる城ノ越期の典型的な甕底部形状を持つ。外面にハケメ痕跡がよく残る。以上の2点は前期後半~中期初頭に比定される。

3は甕形土器の口縁部片。直線的に外反し、端部を四角く収める。内・外面にハケメをよく残す。口径は26.0cm。4は甕底部片である。ややレンズ状を呈し、内・外面にハケメ痕跡を残す。5は短頸壺の口-頸部片。おそらく球状の胴部を持つもので、強くすぼまる胴部上半から屈曲して短く外反する口縁部までが残る。口縁端部は四角く収める。内・外面にハケメを残し、その後ナデ仕上げ。口径は13.4cm。6・7は大型壺の胴部片。いずれも断面台形の突帯部が残存する。突帯には刻目を付す。内・外面ともにハケメが残り、突帯部は横ナデ仕上げ。突帯部径は6・7ともに40.0cmをはかる。8は小型短頸壺か。5よりもくびれが小さく、甕形土器に近い。内・外面に指頭圧痕のちハケメ調整仕上げ。口径は12.0cmをはかる。9は壺形土器の底部片。底部は薄くやや不安定な形状だがレンズ状底ではない。内・外面ともにハケメがよく残る。10は高坏の脚部片か。直径36.0cmをはかる大型品で、内・外面ともにハケメ調整痕をよく残す。11は口縁部を屈曲させて開く鉢形土器である。口縁部はわずかに内湾しながらのび、端部を四角く収める。内・外面とも口縁部はナデ仕上げ、胴部はハケメ痕が残る。口径は21.4cmをはかる。これらは後期中葉~末の資料であろう。

II区第15層出土土器（第13図、図版6）

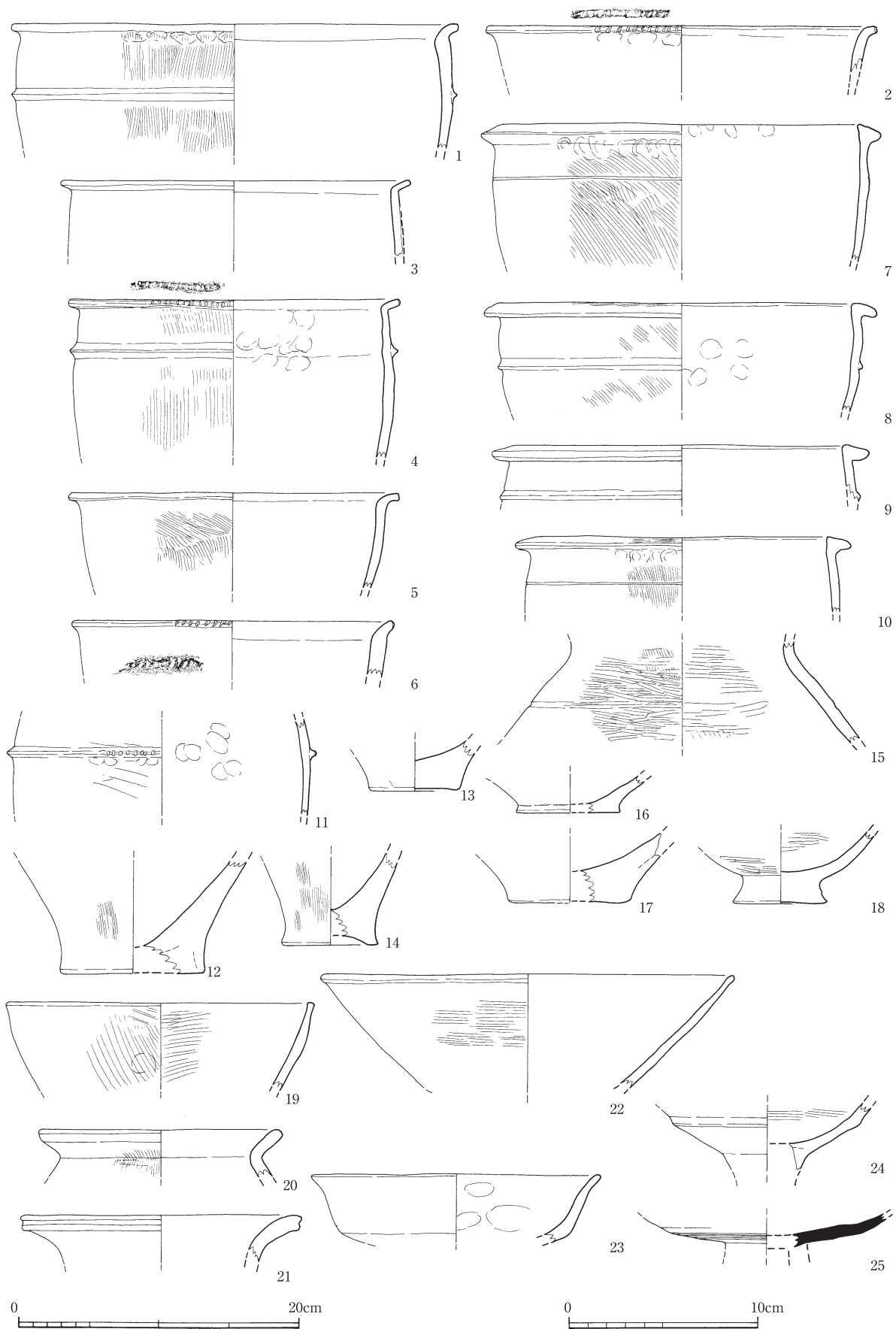
弥生土器（1~21） 1~10は甕形土器の口縁部片である。1~6は口縁部を如意状に外反させる板付系の甕である。このうち、1・4は胴部上位に刻目を伴わない三角突帯を付す。また2・4・6は口縁端部に刻目を付す。調整は磨耗が進んで判然としない資料もあるが、おおよそ外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。口径は、1が32.0cm、2が28.0cm、3が25.0cm、4が23.6cm、



第12図 I区15層出土土器実測図 (1/4)

5が23.8cm、6が23.0cmをはかる。7～10は口縁端部外面に三角突帯を付す亀の甲系の甕口縁部片である。7・10は胴部上位に沈線を1条付すタイプ、8・9は三角突帯を1条付すタイプである。やはり磨耗のため調整は判然としないものがあるが、おおよそ外面はハケメ、内面はナデ仕上げである。口径は7が28.6cm、8が28.0cm、9が27.0cm、10が24.0cmをはかる。11は甕形土器の胴部片である。胴部上位に刻目を有する三角突帯を付す。調整は外面が板ナデ、内面はナデで、内・外面の突帯を付す部分に指頭圧痕をよく残す。突帯部径は20.2cmをはかる。12～14は甕形土器の底部片である。12はやや大きく底径10.3cmをはかり、高く上げ底状を呈さない。調整は外面にハケメが残る。13・14は小型。13は上げ底状を呈さないもので、底径6.6cmをはかる。調整は磨耗により不明。14は上げ底状を呈するもので、やや内湾しながら上方に伸びる資料。外面にハケメが残る。底径は6.8cmをはかる。15は壺形土器の胴部片。径・胴部境は直線的で沈線により表示されるもの。内・外面に丁寧なナデが施される。16～18は壺形土器の底部片。16は円盤状の底部を持つもの。調整は剥離・磨滅により不明。底径は7.4cmをはかる。17は底部からやや内湾しながら立ち上がる比較的大型品。底径は8.8cmをはかる。18は円盤状の底部を貼り付けたような特徴的な形態を持つ。底部はナデ仕上げであるが、胴部は内・外面ともミガキを行っており、壺形土器の底部と判断した。径は6.8cmをはかる。以上はおおよそ弥生時代前期後半～中期初頭の資料群である。

19は椀形土器の口縁部片か。わずかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部を四角く収める。内・外面ともハケメがよく残る。口径は22.0cmをはかる。20は短頸壺あるいは小型甕の口縁部片。屈曲して短く外反する口縁部が残る。口縁端部は丸く収める。調整は外面がハケメのちナデ、ほかはナデ仕上げ。21は長胴壺の口縁部片か。外湾しながら開く短い口縁部のみが残存する。口縁



第13図 II区15層出土土器実測図（1～21は1/4、他は1/3）

端部はややへこませる。調整は全体的にナデ。口径は20.0cmをはかる。

土師器（22～24） 22は大形高坏の口縁部片である。直線的に伸びて端部は丸く収める。残存部以下は屈曲するものであろう。外面にミガキ痕が認められる。口径は22.0cmである。23は小型の高坏の坏部片か。坏の可能性もある。屈曲してわずかに外反しながら伸びる口縁部～坏上部が残存する。磨滅して調整は不明瞭だが、底部外面はケズリを施すか。口径は15.4cmをはかる。24も高坏の坏部片である。坏底部は斜めに立ち上がり、屈曲してさらに上方に伸びる。屈曲部外面には段が認められる。内面にハケメ痕がみられる。

須恵器（25） 25は高坏の坏部片である。わずかに残る脚部に透かしの痕跡が認められる。坏底部外面はカキメが認められ、屈曲部より上位は横ナデ仕上げ。内面はナデ仕上げ。

これらの資料のうち、一点だけ時期の異なる25を除けば、7・7a・7b層出土のほぼ全てが古墳時代前期までに収まり、この層の形成期は古墳時代前期以降古代以前と考えることができよう。

I区10層出土土器（第14～16図、図版7）

弥生土器（1～43） 1～5は前期後半～中期初頭の資料群である。1は板付系甕の口縁部片で、如意状に外反する口縁部が残る。口縁端部に刻目を施す。径は26.0cmをはかる。2は亀の甲系甕の口縁部片である。口縁端部外面に三角突帯を付す。内・外面ともナデ仕上げ。口径は23.5cmをはかる。4は城ノ越式甕の底部片であらう。内・外面にハケメ痕がよく残る。5は同じく壺形土器の底部片であらう。内面にハケメ痕がよく残る。6は後期の脚付甕の可能性もあるが、色調から城ノ越式の甕形土器の底部の可能性が高い。著しい上げ底である。調整は磨滅により不明。

7～43は後期の資料である。7～13は中～大型の甕形土器の口縁部～胴部片である。いずれも、頸部屈曲部から「く」の字に外反してわずかに外湾しながら伸び、端部は四角く収める資料である。調整は外面にタタキ目を残す資料もあるが基本的にハケメでタタキ痕を消している。内面は一部に指頭圧痕を残しつつやはりハケメで消している。口径は7が30.0cm、8が29.4cm、9が29.0cm、10が23.7cm、11が26.0cm、12が29.0cm、13が26.3cmをはかる。14は中型の甕形土器あるいは短頸壺の口縁部片である。屈曲部から短く外反し端部は四角く収める。調整は外面にハケメが残り、内面はナデ仕上げ。口径は20.0cmをはかる。15～18は小形の甕形土器である。器形・調整は中～大形のものと同様変わらない。16のみ口縁端部を丸く収める。口径は15が17.2cm、16が14.8cm、17が19.0cm、18が18.0cmをはかる。19～21は超大型の甕形土器の口縁部片である。屈曲部から直線的に伸びて端部を四角く収める形状を持つ。20は口縁部が失われているが頸部に三角突帯を付す。21は頸部に断面が低い台形状の突帯を付す。また、19・21は口縁端部に細い刻目を入れる。いずれも内・外面ともにハケメ調整を施す。口径は19が40.0cm、21が56.0cmをはかる。22～25は甕形土器の底部片である。22は尖底に近いレンズ状底を有し、内・外面にハケメ調整がみられる。23は不安定な平底である。24はレンズ状の底部であるが底－胴部境のくびれは明確に残る。22は後期末、23は後期前半～中葉、24は後期中葉前後の資料であらう。26は高坏の口縁部片であらうか。坏部屈曲部より上部の外湾しながら長く伸びる口縁部のみが残る。調整は摩耗により不明瞭だが内・外面ともナデ仕上げか。27・28は短頸壺の口縁部～胴部上半の資料である。27は屈曲部がやや緩

やかで、28は鋭く「く」の字に屈曲する。口縁端部は27が四角く収めるのに対し28はやや丸みを帯びる。調整はともに口縁部はナデ、胴部は内・外面ともハケメである。口径は27が13.6cm、28が15.0cmをはかる。29は長胴壺の肩部～口縁部片であろう。やや緩やかに屈曲した頸部～わずかに外湾しつつ立ち上がる口縁部が残る。胴部外面はハケメ、内面はケズリ痕がよく残る。口縁部外面はナデ、内面はハケメ仕上げ。口径は15.4cmをはかる。30は複合口縁壺の頸部片である。口縁部は内・外面ともナデ仕上げ、頸部は内・外面ともにハケメ。31は壺形土器の底部片である。レンズ状の底部を持ち、球状の胴部形状を呈するものであろう。内・外面ともにハケメ痕が明瞭に残る。32は球状の胴部を持つ壺形土器（複合口縁壺か）の胴部片である。断面三角形の突帯を3条付す。内面の突帯背面に指頭圧痕をよく残す。33・34は大形の壺形土器（複合口縁壺か）の胴部突帯部片である。ともに断面台形の突帯を一条付し、刻目をつける。調整は突帯部がナデ、それ以外の外面がハケメ。35は小型の甕形土器の口縁部片か。屈曲部が不明瞭で口縁端部を四角く収める。内・外面ともにハケメ調整。36・37は鉢形土器である。ともに半球状の胴部から「く」の字に外反して直線的に短く伸びる口縁部を持つ。内・外面ともハケメ仕上げである。38は椀形土器である。半球状の器形で、内・外面ともに丁寧にナデ仕上げを施す。39・40は半球状の器形を持つ鉢または大形の椀形土器である。ともに外面にタタキを施し、40はその後ハケメによりタタキ目を消している。40の内面は板状工具により強いナデを施す。口径は39が21.0cm、40が23.6cmをはかる。41・42は支脚である。いずれも天井部が平坦な釣鐘状の器形で、42は天井部中央に穿孔を施し、嘴状の突出部を持つ。ともに外面には明瞭なタタキ痕が残り、内面は指ナデ。43は小型の手捏ね土器で、甕あるいは鉢形の底部であらうか。

土師器（44～49・51） 44は大型の広口壺である。朝顔状の口縁部と球状の胴部を持ち、底部はやや平底気味である。全体にハケメが残り、口縁部は内・外面ともにハケメを施す。器高は34.4cmをはかる大型品で、口径は24.8cm、胴部最大形は30.7cmをはかる。45は長頸壺の頸部片であろうか。明瞭に屈曲して直線的に斜め上方に伸びる頸部が残る。肩部には断面台形状の高い突帯を付し、深い刻目を施す。46・47は小型丸底壺である。扁平な胴部から屈曲して上方に立ち上がる直線的な口縁部を持つ。調整は胴部外面がハケメ、内面は指ナデ。口縁部外面はハケメまたはナデ、内面はナデ。48は高坏の脚部である。直線的に「ハ」の字に開く器形を持ち、上部におそらく2つ並んで1対となる穿孔を対面に2セット、計4つの穿孔を有すると思われる。外面は布を当てた板状工具によるナデ、内面はナデ。49は布留式甕の胴～口縁部片である。球状の胴部は外面がハケメ、内面は指頭圧痕のちケズリ。口縁部はナデ仕上げ。以上は古墳時代前期の資料群である。

51は古代の高台付椀形土器。「ハ」の字に長く伸びる高台を有する。調整は磨滅によりよく分からないが、内・外面にナデか。

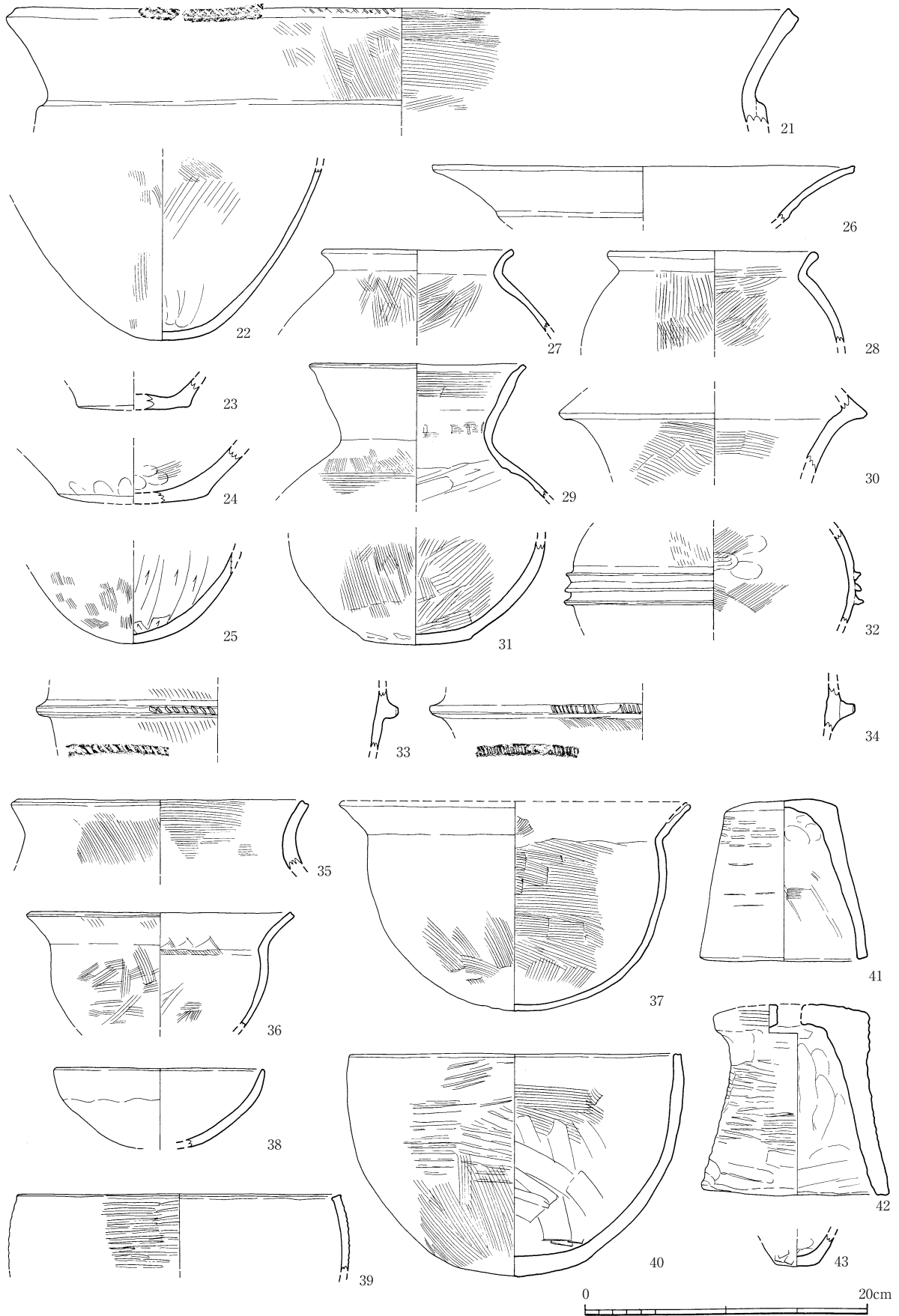
須恵器（50） 50は坏蓋である。緩やかに湾曲しながら下方に伸び、下方にやや大きく突き出す。調整は残存部は全てナデ仕上げ。口径は12.4cmをはかる。

陶磁器（52） 52は白磁碗である。直線的に伸びる胴部とやや外反する口縁部を持つ。釉の劣化がみられる。口径は16.0cmをはかる。V類か。

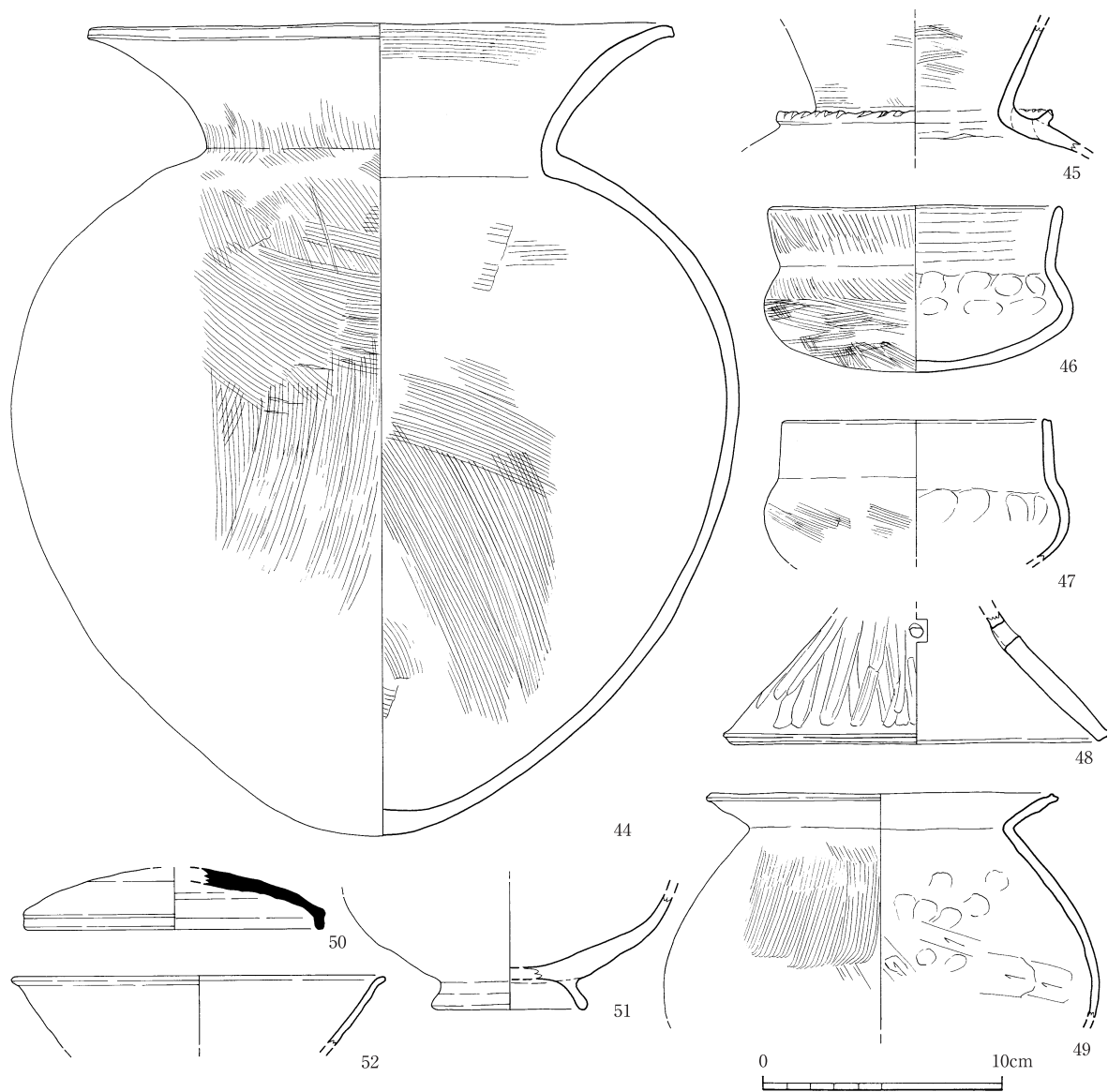
以上の古代～中世の資料群はおそらく1号溝の埋土に含まれていたものであろう。



第14図 I区10層出土土器実測図その① (1/4)



第15図 I区10層出土土器実測図その② (1/4)



第16図 I区10層出土土器実測図その③ (1/3)

Ⅱ区・Ⅲ区10層出土土器 (第17図、図版7)

弥生土器 (1~25) 1~5は板付系の甕形土器の口縁部~胴部片である。いずれも如意状に外反する口縁部を持ち、このうち2は折り曲げ度合いが著しく新しい様相を示す。また2・4は胴部上位に三角突帯を付し、4は口縁部と突帯に刻目を付す。5は胴部上位に沈線を巡らせる。口径は1が33.0cm、2が32.0cm、3が22.0cm、4が17.0cm。6~9は口縁部に三角突帯を付す亀の甲系甕形土器の口縁部~胴部片である。8は胴部上位に沈線を巡らせ、また9は胴部上位に三角突帯を付して口縁部の三角突帯とともに刻目をつける。なお8は三角突帯が剥離して失われる。調整はいずれも胴部外面がハケメ、内面は指頭圧痕を残しつつナデ仕上げ。口径は7が小型で19.0cm、9は大きく31.2cmをはかる。10は甕形土器の底部。11~14は壺形土器の口縁部 (~胴部) 片である。11・13・14は小型の壺形土器で、いずれも緩やかに外湾しながら斜めに伸びる頸部から急激に外湾して短く収める口縁部を持つ。12は大型品で、緩やかに外湾しながら広がる口縁部が

残る。口縁部外面は粘土帯貼り付けにより肥厚させる。口径は27cmほどをはかるか。なお、12・13は口縁部内面に三角突帯を付しており、豊後下城式の影響が認められる。15～17は壺形土器の胴部片である。15は頸－胴部境に弱い段を形成するもの、16・17は低い三角突帯を付すものである。いずれも外面は丁寧なミガキを施し、内面は基本的にナデ仕上げであるが15の胴部内面にはミガキ痕跡が認められる。胴部最大径は15が28.8cmをはかり中型、17は39.0cmをはかり大型である。なお17の傾きはもっと寝る可能性もある。18～20は壺形土器の底部片である。18は立ち上がりややきつく器高があるものであろう。内・外面に丁寧なナデを施す。底径は7.0cmをはかる。19・20は底部からの開きが強いものである。ともに外面はミガキ、内面はナデ仕上げである。19の底径は7.0cm、20の底径は8.8cmをはかる。21は甕形土器の胴部片であらうか。傾きは不明である。二条の突帯を平行させて文様状にしている。外面の突帯部分と内面はナデ、外面の一部にハケメが認められる。以上の資料はおおよそ前期後半～中期初頭に位置づけることができよう。

22は小型の壺形土器の底部片であらうか。底－胴部境がなくなりつつあり、丸底に近い。外面がハケメ調整、内面はナデ。23は壺形土器（複合口縁壺か）の胴～底部片である。胴部はほぼ球状で、20.2cmをはかる胴部最大径のわずかに下部分に断面台形の突帯を巡らせ、比較的細い刻目を付す。底部はレンズ状を呈する。24は長胴壺の口縁部か。頸部屈曲部以上が残存し、屈曲部のやや下位に三角突帯を巡らせ、そこからわずかに外湾しながら徐々に肥厚させつつ斜め上方に伸びて口縁部に至り、端部は四角く収める。25は大形の甕形土器の口縁部片か。頸部屈曲部以上が残存し、外湾しながら広がり端部は四角く収める。外面にハケメが残りその上からナデ、内面もナデ仕上げ。口径は30.0cmをはかる。以上の資料は後期後半～末の資料群である。

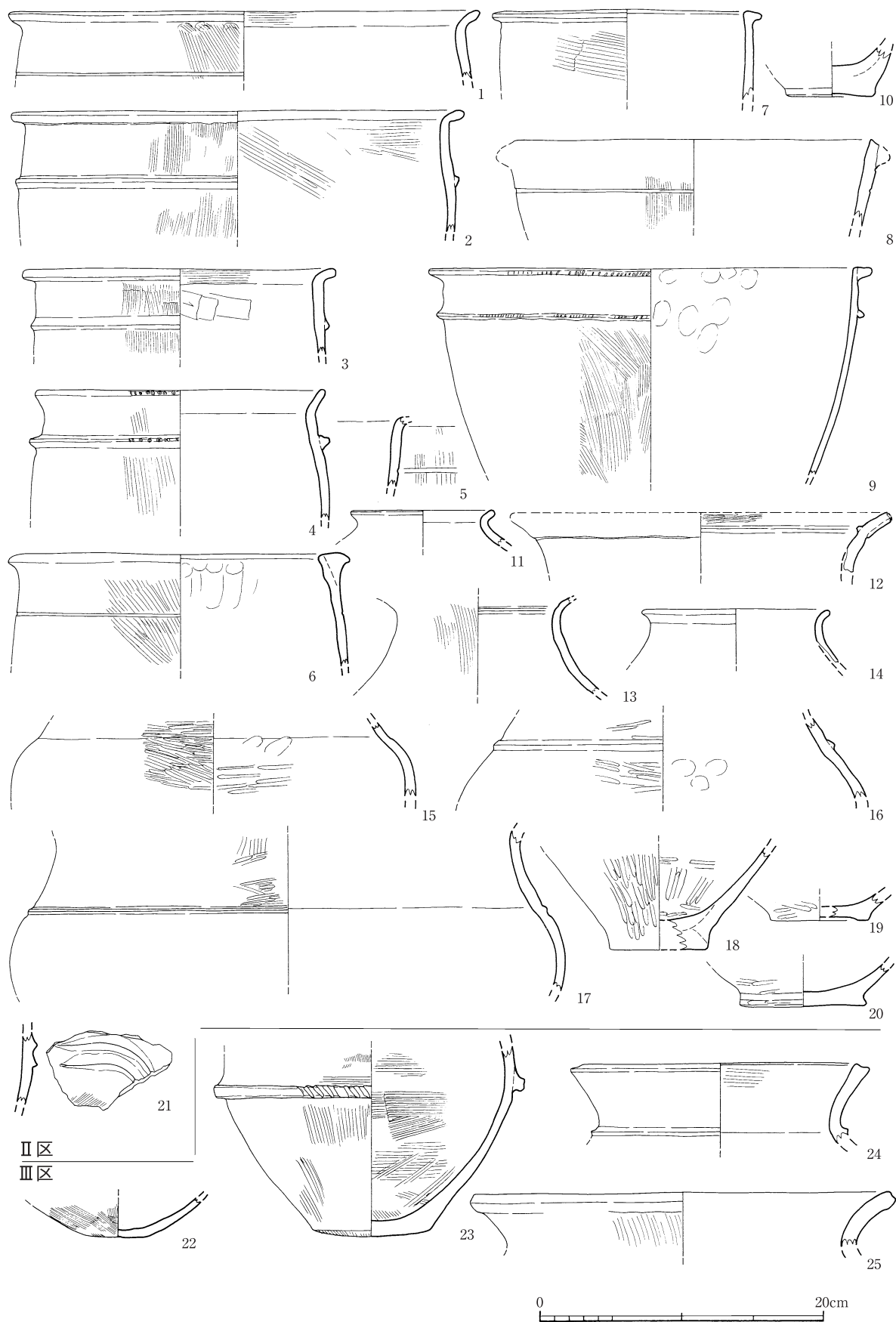
以上より、10層出土土器群はおおよそ弥生時代前期後半～中期初頭、弥生時代後期中葉～古墳時代前期に位置づけられ、堆積時期は古墳時代前期以降古代以前に位置づけられよう。

第4項 その他の遺物

検出面・トレンチ等出土遺物（第18図、図版8）

弥生土器（1～8） 1は亀の甲系甕形土器の口縁部三角突帯が剥離した資料である。胴部上位にも三角突帯を巡らせる。突帯剥離面にハケメが、また突帯貼り付け部の内面に指押さえ痕がよく残る。2は甕形土器の底部片である。摩耗が著しい。底径は5.6cm。3は壺形土器の胴上位～口縁部片。肩－頸部境に低い三角突帯を貼り付け、上下端を強く指で横ナデして沈線状に若干くぼませる。調整は外面がハケメのちミガキ、内面は口縁部のみミガキ、ほかはナデ。4も壺形土器の胴部片である。胴－頸部境に浅い沈線が1条巡る。内・外面にミガキを施す。前期後半～中期初頭の資料群。

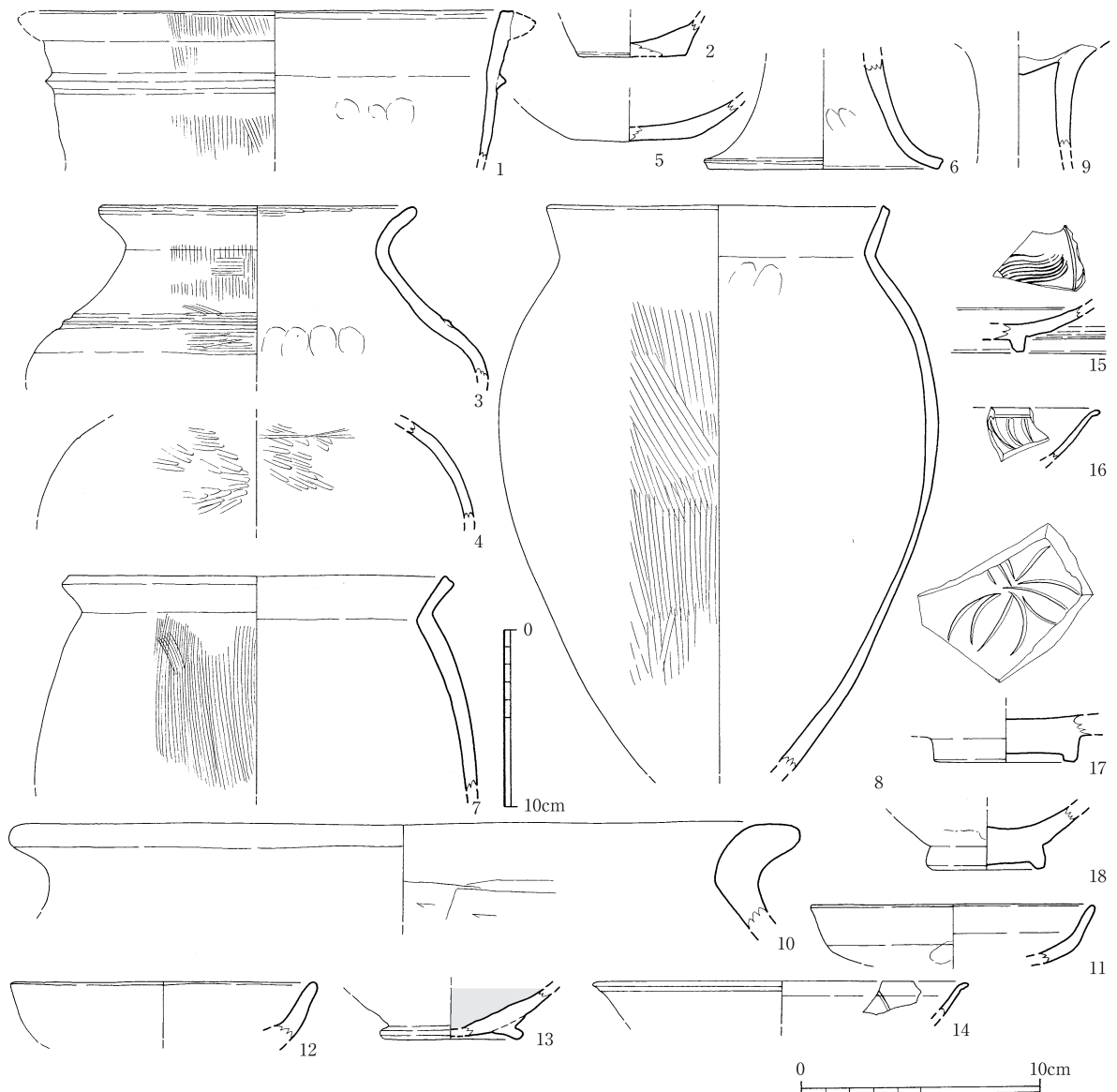
5は壺形土器の底部片である。わずかに底－胴部境が残るレンズ状底部分のみが残存する。摩滅により調整は不明。6は高坏の脚部である。やや強く湾曲させながらハの字に広がる脚下位のみ残存する。脚部径は12.9cmをはかる。7は甕形土器の胴上位～口縁部片である。胴部外面にハケメがみられる。口径は22.3cmをはかる。8は甕形土器の胴～口縁部片。おそらく尖底を持つものであろうが底部は失われている。器形・調整等は7とよく似る。口径は19.5cmをはかる。



第17图 II区·III区10~12層出土土器実測図 (1/4)

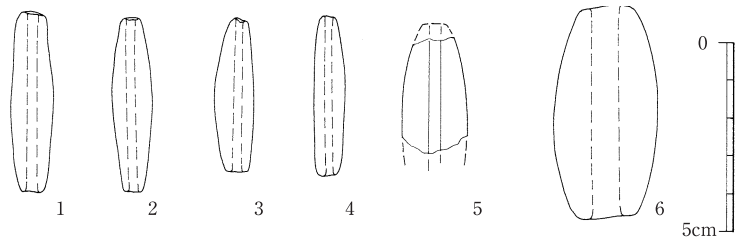
土師器（9～13） 9は高坏の脚部である。脚上位が残存する。筒状の脚の上方から粘土を充填して坏部を接合している状況がよく分かる資料である。10は大形の甕形土器の口縁部片である。はっきりと屈曲してから強く湾曲しながら開く口縁部が残る。口縁部は内・外面ともにナデ、胴部は内面にケズリ痕がよく残る。口径は33.2cmをはかる。11・12は古代の坏である。ともに平坦な底部から屈曲して開きながら短く立ち上がる口縁部を持つ。口径は11が11.6cm、12が12.5cmをはかる。13は高台を持つ碗である。球状の坏部を持ち、高台はやや太く外に強く開く。内・外面ともナデ仕上げ。内面を黒色に仕上げる。

陶磁器（14～18） 14・16は白磁碗である。14は口縁端部外面に段を有し、端部は外に短く開く。釉色は灰緑色、胎色は灰黄白色。V類か。16は口縁端部が嘴状に開く。内面に片彫りの文様がみられる。釉色は灰緑色、胎色は灰白色。15・17は龍泉窯系青磁で見込みに草花文を描く碗である。15は内面底-胴部境に段を持ち、釉色は灰黄緑色、胎色は灰色で高台部は露胎。I-2b類か。17は底部のみが残り、釉色は灰黄緑色、胎色は灰黄色で高台部は露胎。高台径6.1cmをはかる。18は産地不明の碗である。底部のみが残り全形は不明。高台は低く底部が厚い。釉色はエメラルドグ



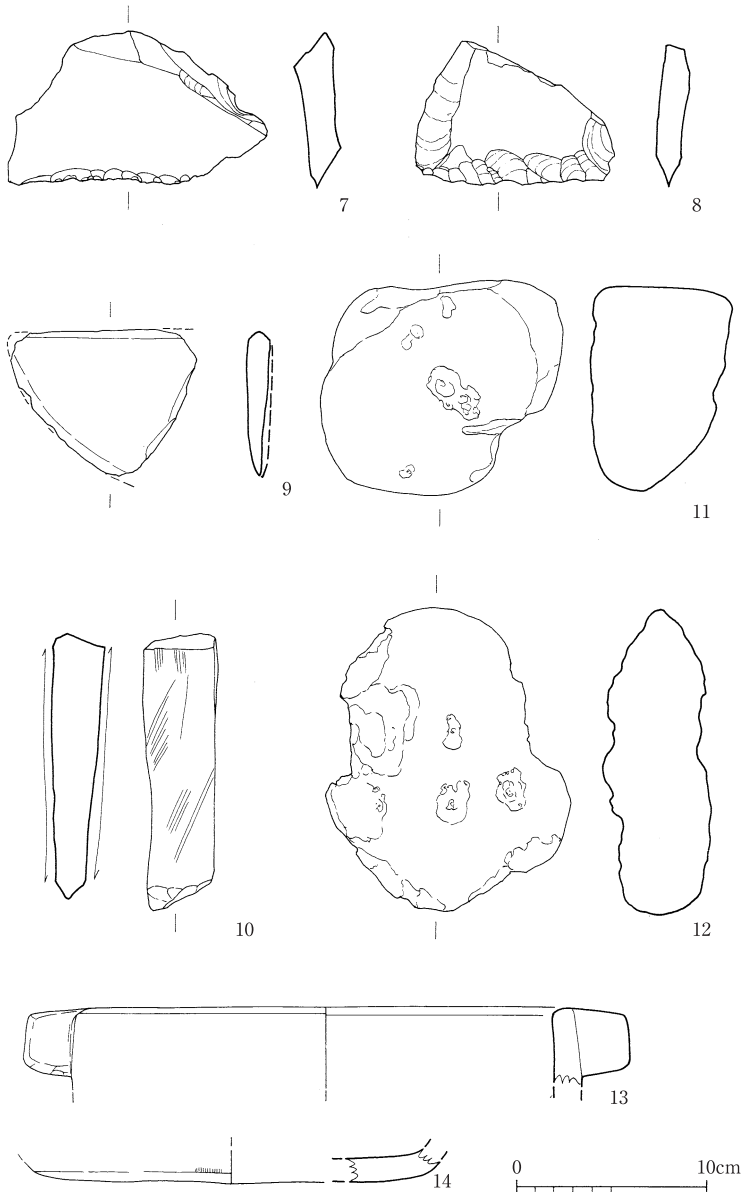
第18図 トレンチ・検出面等出土土器実測図（1～8は1/4、他は1/3）

リーン、胎色は明黄褐色を呈する。外面下位～高台部は露胎。胎土は当遺跡出土の他の中国産青・白磁より劣りやや粗めで、釉の風化も進んでいる。高台径5.1cm。



石器・土製品 (第19図、図版8)

土製品 (1～6) 1～6は土錘である。いずれも単体で棒に粘土を巻き付けて成形したものである。1～4はやや細身で軽量、5はやや太め、6は太いものである。5以外は完形。1は最大径1.1cm、長さ4.8cm、重さ4.8g。2は最大径1.05cm、長さ4.6cm、重さ4.7g。3は最大径1.0cm、長さ4.1cm、重さ3.6g。4は最大径0.85cm、長さ4.2cm、重さ2.6g。5は約2/5が残存し、推定最大径1.95cm、推定長さ5.4cm、残存重さ6.6g。6は最大径2.75cm、長さ5.6cm、重さ41.0g。



石器 (7～10・15～21) 7・8はスクレイパーである。いずれも刃部を細かい剥離により作り出す。刃部以外の刃潰しは観察できない。共に安山岩系の石質である。9は磨製石包丁片である。頁岩系の石質。10は砥石である。白色のきめの細かい石質で、仕上げ砥であろう。15～21は調査区各所から出土した黒曜石片である。計7点あり、計22.7gをはかる。いずれの石質も良質で、一部に原礫面を残すものがある。15は1号溝出土。16・17は1区1層出土。18・19は2区1層出土。20はⅡ区15層、21はⅠ区10層出土。このうち15・19は原礫面を残す。

第19図 遺跡出土土製品・石製品実測図
(1～12は1/2、他は1/4)

石製品 (11～14) 11・12は軽石。11は重さ33.4g、体積約40cm³で、比重は約0.8g/cm³である。12は重さ30.22g、体積約45cm³で、比重は約0.67g/cm³である。13・14は滑石製石鍋である。13は口縁部の耳部分が残存する。小片で径はやや不安だが26.6cmをはかる。14は底部片である。これも小片で径は不安があるが、約21.0cmをはかる。

第3節 小結

玉田遺跡から出土した遺構と遺物について簡単にまとめておきたい。玉田遺跡の基本土層は主に旧河川中に堆積した埋積物から構成される。層中からは、弥生時代前期～中期初頭、後期中葉～古墳時代前期、古墳時代中期、古代～中世の土器が出土し、これらはいずれも東側の台地上から流入した可能性が高い。すなわち、台地上には上記の時期の遺構が展開していると考えられる。

さて、今次調査では種々の事情から最下層まで調査を行うことはできなかったが、調査時点での最下層である10層と台地際に斜めに堆積する15層から、弥生時代前期～中期初頭、後期中葉～古墳時代前期の土器が出土した。このことから、これらは古墳時代前期～中期に堆積したことが分かる。10層は粘質土で、また下層の11・12層の堆積物も粘質土を主体としてきめ細かな砂やシルトが堆積し、わずかに同時期の遺物を含む。堆積物の特徴は静かな水中で堆積した状況を示し、調査区付近の旧河川が閉鎖的な帯水の状況の中で堆積したことを示している。従って、古墳時代前期～中期は調査区付近、特にⅢ区南側を中心とする地域は古筑後川やその支流などから切り離された池沼のような状態で、かなり安定した環境であったことが分かる。

一方、9層からは弥生～古墳時代前期のほか古代前半期の土器が出土した。Ⅱ区南端部の土層では15層と9層の先後関係は直接的には把握できなかったが、出土土器から見る限り15層が9層に先行する。15層はきめの細かい粘質土であり、10層と同様に静かな水中で堆積した可能性が高いことから、15層の堆積後に一度調査区中央部付近が（自然または人為により）掘り下げられ、その後7～9層が堆積した可能性が高い。なお、9層は出土土器より古墳時代前期以降古代までの間に堆積しており、砂質土層や小礫が混じることから比較的動態で堆積した層と考えられる。

1・2層は、9層との間に数層の遺物を殆ど包含しない層を挟んで堆積する層である。土質は下層と比較して粗く、調査区付近が半乾燥状態での堆積層と考えられる。出土土器は弥生時代前期～古墳時代初頭、古墳時代後期～古代前期、古代後期で、古代後期以降の堆積と考えられる。

以上の整理により、1号溝のおおよその時期を推定できる。1号溝の掘削時期はⅡ区南側土層より7（・7'）層の堆積後に掘削され、6層がその上を覆っている。両層は殆ど遺物を包含しないが、下層の9層が古代前半期までに堆積していることから古代前期以降の掘削であることは間違いない。また、1号溝からは古代後期の遺物が出土しており、埋没時期はこれ以降となる。

出土遺物の中で特徴的な遺物が何点かあり、以下に列挙しておきたい。弥生時代前期後半～中期初頭の土器群の中に、下城式系の壺形土器が2点みられた。いずれも口縁部内面に三角突帯を一条巡らせるものである。日田地方よりの流入品であろうか。また、古代の陶磁器片として、白磁碗が多量に出土した。また、同安系・龍泉系の青磁碗、瀬戸灰釉の小型壺形土器片も貴重な資料である。東側の台地上に広がる遺跡の性格の一端を示す資料であり、今後の調査が期待される。

今次調査は遺構が殆ど存在しなかったが、豊富な土器資料により周囲の遺跡に対する理解を深めるとともに自然環境の理解についても一定の資料を得られた。今後の周辺の調査に期待したい。

参考文献

宮崎亮一編、2000：大宰府条坊X V，陶磁器分類編。太宰府市の文化財，49。太宰府市教育委員会。

圖 版



1 調査区周辺地形
(西から)



2 調査区周辺地形
(東から)



1 遺構面全景
(上が北)



2 I区遺構面、1号溝
(上が北)



1 I区南端部東壁基本土層
(西から)



2 I区西壁基本土層
(東から)



3 II区東端部北壁基本土層、
1号溝土層 (南から)



1 II区西壁基本土層
(北東から)



2 II区西壁土層北半部
(東から)



3 II区西壁土層南半部
(東から)

1 II区東端部南壁基本土層、
1号溝土層（北から）

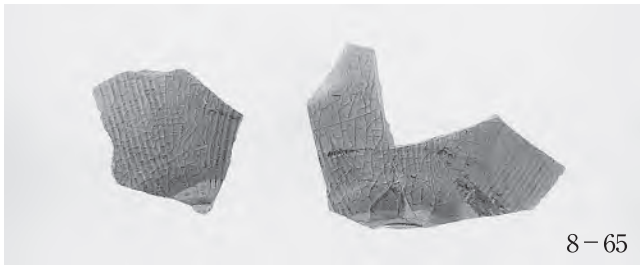
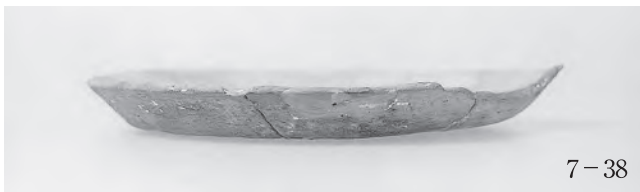


2 III区西端部南壁基本土層
（北から）



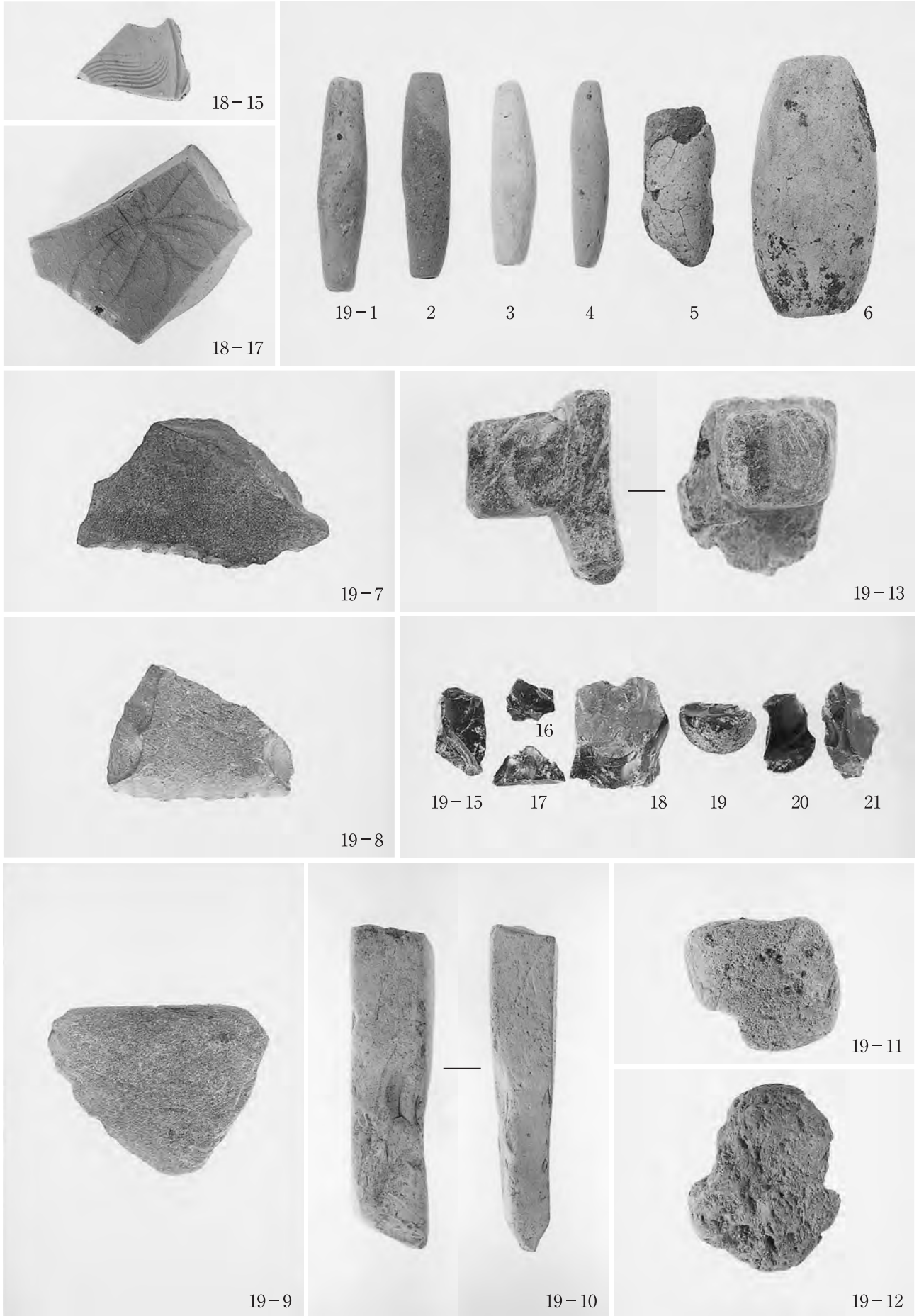
3 III区中央部基盤土層
（北から）





1号沟、I区1层、I区2层、II区15层、I区10层出土土器





船越高原 A 遺跡 6 次

第4章 船越高原A遺跡6次調査の記録

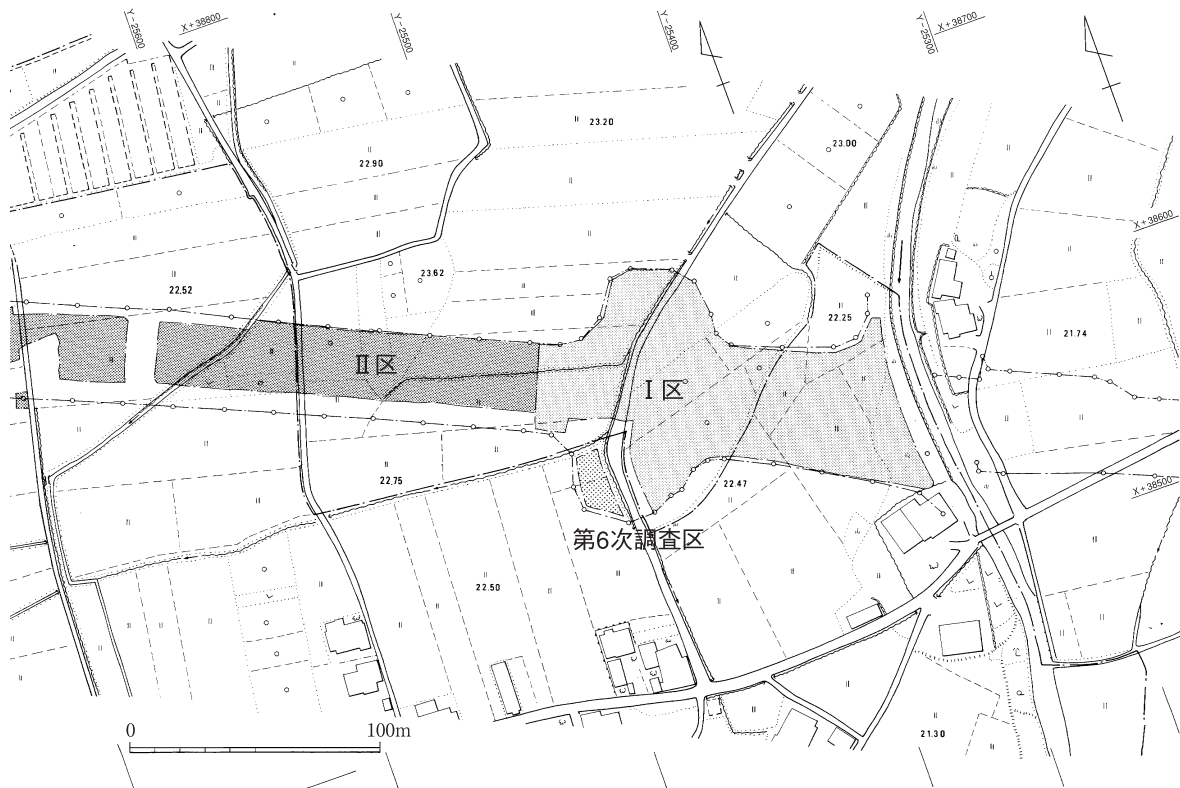
第1節 遺跡の概要と基本層序（第21・22図、図版11）

船越高原A遺跡の立地する微高地は、美津留川の堆積・浸食作用によって形成されており、土壌はシルトや砂質土などの堆積土が基本である。今回調査を行った第6次調査区は第1～5次調査のI区の西南に隣接し、弥生時代～古墳時代の集落域の西端域、標高約22mに位置する。

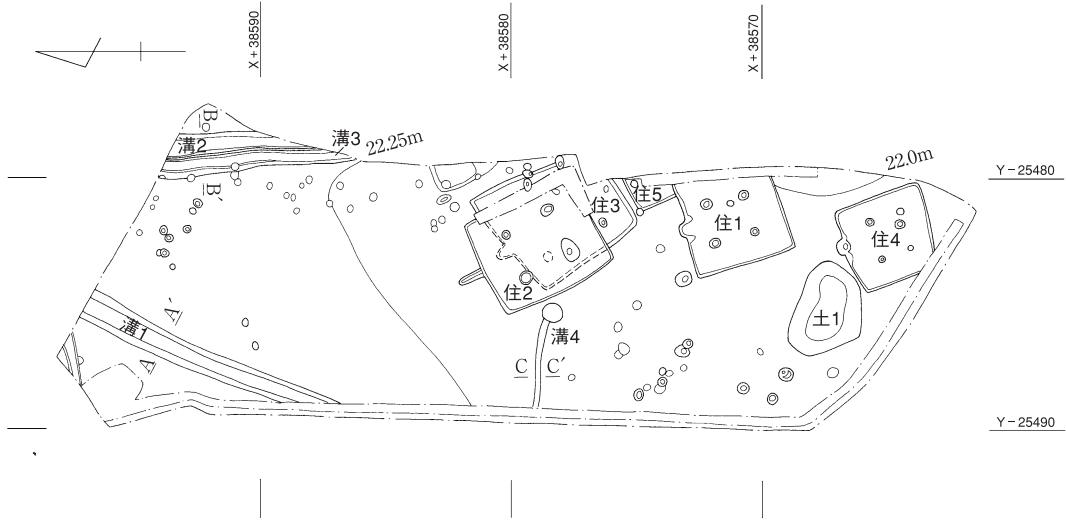
これまでの調査から、2面の遺構面の存在が当初より予想され、土層の観察から第1～5次調査に確認した層との対応関係を把握した上で、第1遺構面、第2遺構面を設定し、調査を行った。

第1層は表土であり、第2層灰褐色土は耕作土、第3層の橙褐色土は床土で、いずれも新しい時期のものである。第4層暗灰褐色土は古墳時代以降の包含層であるが、この層で遺構は確認できず、重機による掘削を行った。第5層の黒褐色シルト上面で白っぽい埋土の古墳時代・中世の遺構が多数検出でき、ここを第1遺構面とした。第6層は暗褐色シルトであるが、第5層との境界は漸次的なものであり、土質は両者ともしまりのあることから、第5層は第6層と基本的には同一のもので、土壌化したものと考えられる。この第5・6層は弥生時代の包含層であり、この下に弥生時代の遺構の存在が予想された。第7層はきれいな黄褐色砂質土の無遺物層であり、この上面で弥生時代中期後半の遺構を確認できたため第2遺構面を設定した。

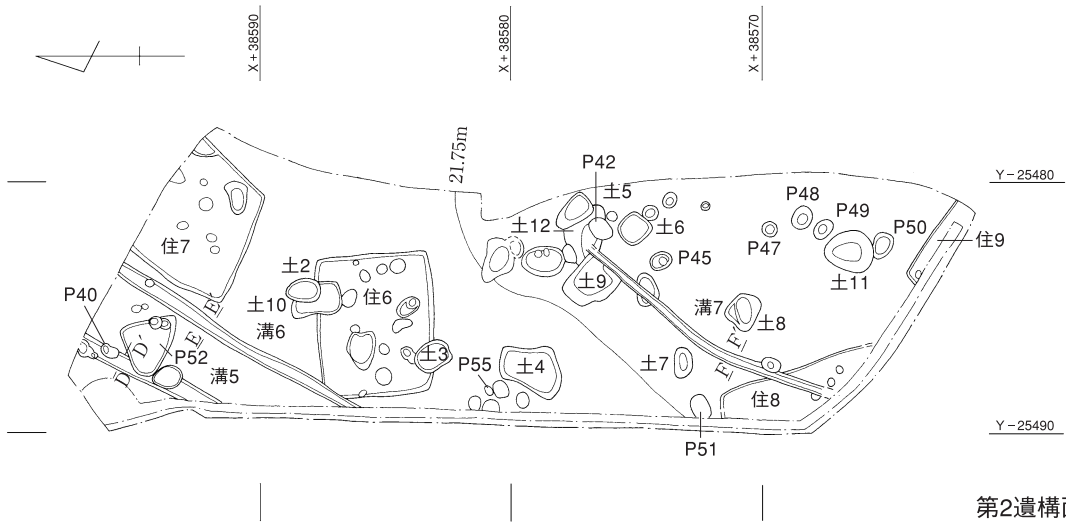
検出した主な遺構は、第1遺構面では竪穴住居跡5棟、土坑1基、溝4条、第2遺構面では竪穴住居跡4棟、土坑11基、溝3条である。



第20図 船越高原遺跡周辺地形図（1/3,000）



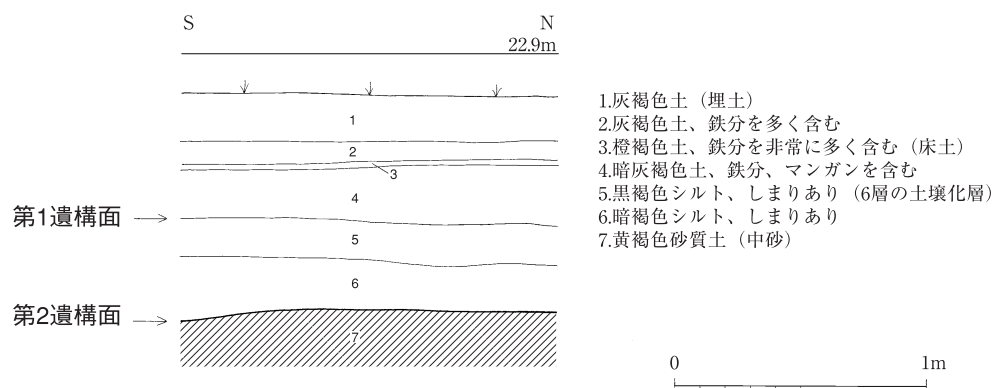
第1遺構面



第2遺構面



第21図 船越高原遺跡第6次調査区遺構配置図 (1/300)



第22図 調査区西壁基本土層図 (1/30)

第2節 第1遺構面の検出遺構と出土遺物

第1項 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡 (第23図、図版11)

調査区南側に位置し、東側は調査区外に延びる。平面形態は方形で、南北軸は400cmである。支柱穴は4本で、北壁中央にカマドを設ける。床は貼床を施していたが、この面では柱穴を検出することができず、貼床を除去した状態で柱穴を確認することができた。カマド内部に径20cm程の焼土面が確認でき、そのすぐ背後に小さな窪みが存在する。

出土土器 (第24図、図版21)

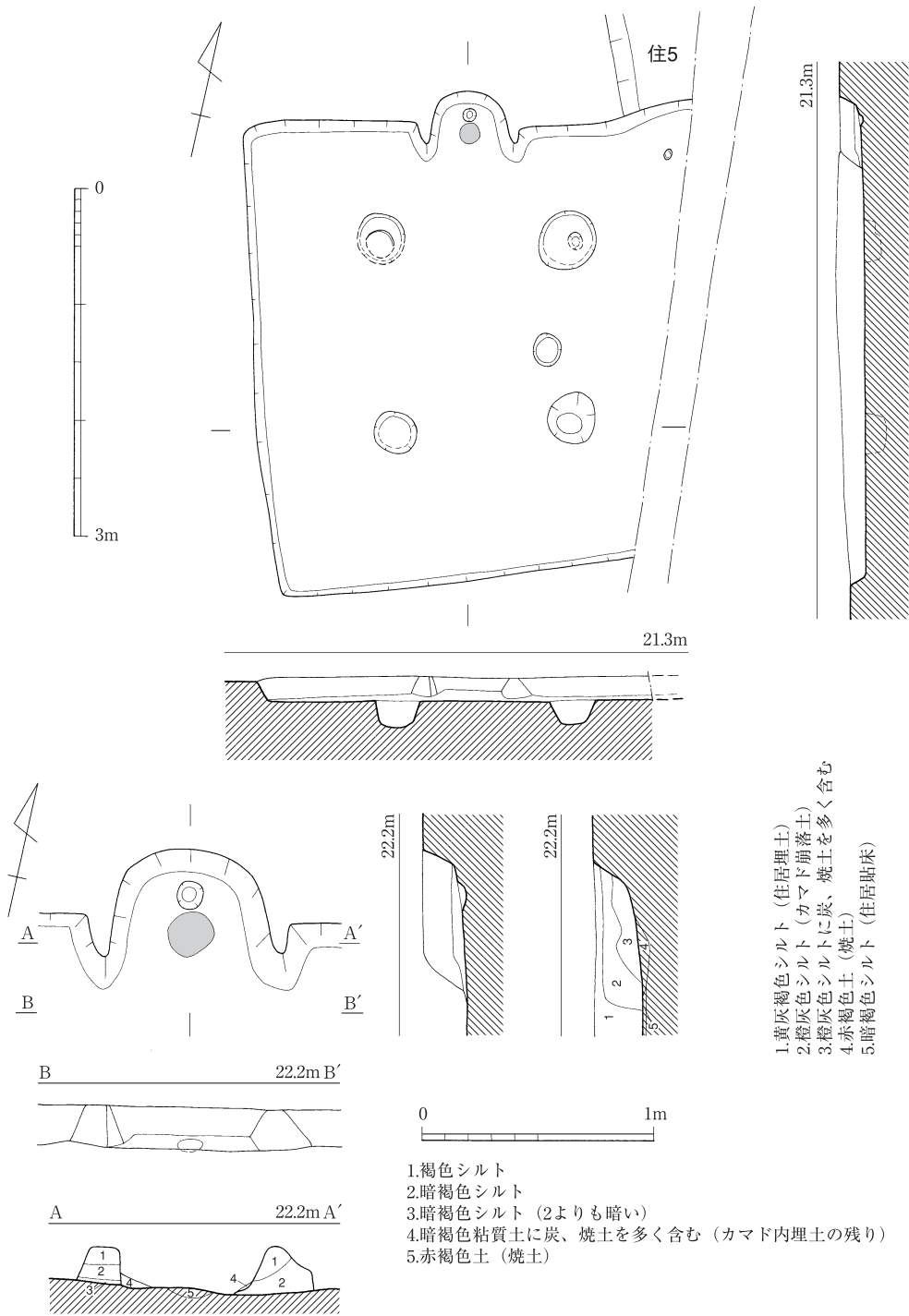
弥生土器 (1～10) 1は壺の底部である。外面はミガキ調整を行い、底面に大きな黒斑が見られる。2は甕棺の口縁部で、端部は丸味を帯びる。口縁部の下に三角突帯を貼り付ける。3～7は甕の口縁部である。3は口縁端部を強いナデによって窪ませる。胴部外面はハケ調整を行い、口縁部に工具の圧痕が残る。4は口縁端部が肥厚し丸味を帯びる。外面屈曲部は強いナデによって窪む。胴部外面はハケ調整を行う。5は器面が摩滅しているが、ハケ調整に用いた工具の圧痕が見られる。6は屈曲部がやや丸味を帯びる。7は胴部外面と口縁部内面にハケ調整を行う。8は甕の胴部破片で2条の三角突帯を貼り付ける。9は平底の甕底部でハケ調整を行う。10は蓋と思われる。天井部は窪み、器壁が薄くなる。

土師器 (11・12) 11は甑で、外面にハケ調整及びナデ調整を行う。12は精製の屈曲杯で、胎土に赤色粒を含み特徴的である。

須恵器 (13・14) 13は杯身の口縁部で端部は欠損している。14は壺の口縁部と思われ、頸部に沈線を巡らす。

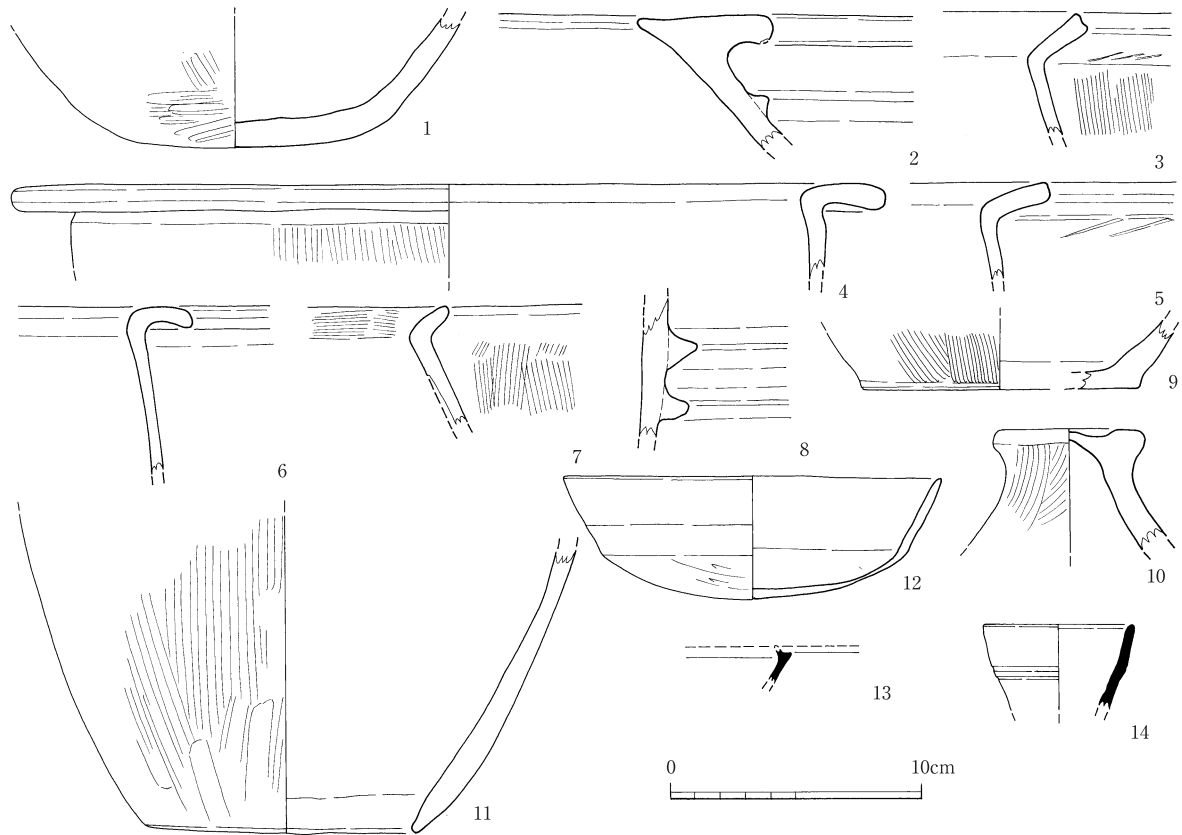
2号竪穴住居跡 (第25図、図版12)

調査区中央やや東寄りに位置し、3号竪穴住居跡を切る。平面形態は方形で、南北軸は480cmである。東側はうまくプランが確認できず、トレンチ状に下げていったが、結局不明のままとなっ



第23図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)

てしまった。北側の一部では東壁の立ち上がりが確認でき、この部分での住居東西幅は406cmである。柱穴は4本で、北壁中央に煙出が長く延びるカマドを設ける。袖部があったと想定されるが、焼土の固まりが少量確認されるに留まり、埋没段階で相当崩れてしまっていたと思われる。床は貼床を施していたが、この面では柱穴を検出することができず、貼床を除去した状態で柱穴を確認することができた。



第24図 1号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

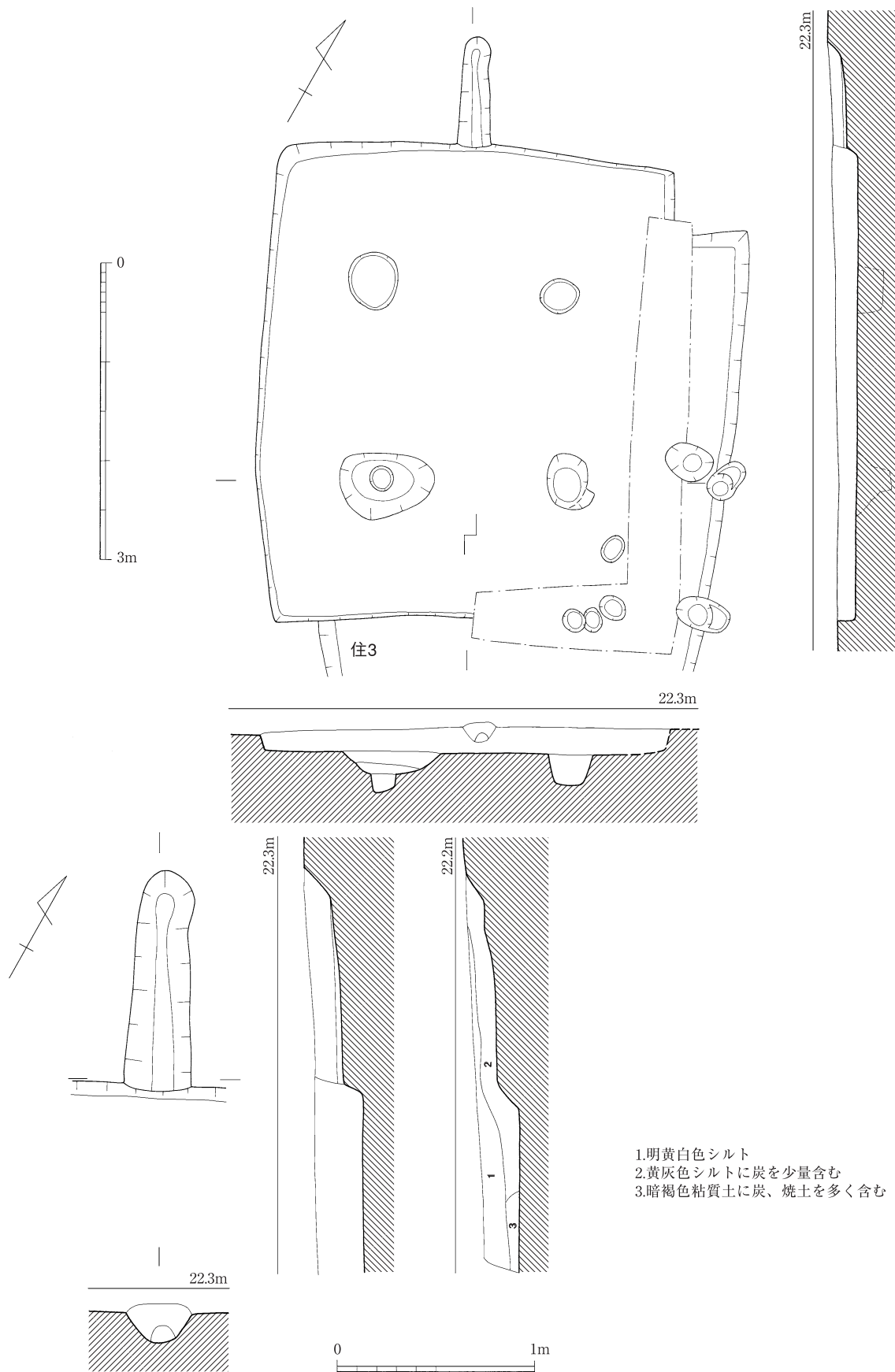
出土土器 (第26図、図版21)

弥生土器 (1~4・11・12・19) 1は甕の口縁部で端部は肥厚し丸く収める。2~4は平底の甕底部である。2は内面の器面が剥離している。3は底面の周辺部分が僅かに窪む。4は外面はハケ調整、内面はケズリ調整を行う。11・12は鋤先状口縁の丹塗磨研高杯であるが、口縁端部を欠損する。三角形の突帯を貼り付ける。19は外面を赤色塗布した小型の皿状の土器である。

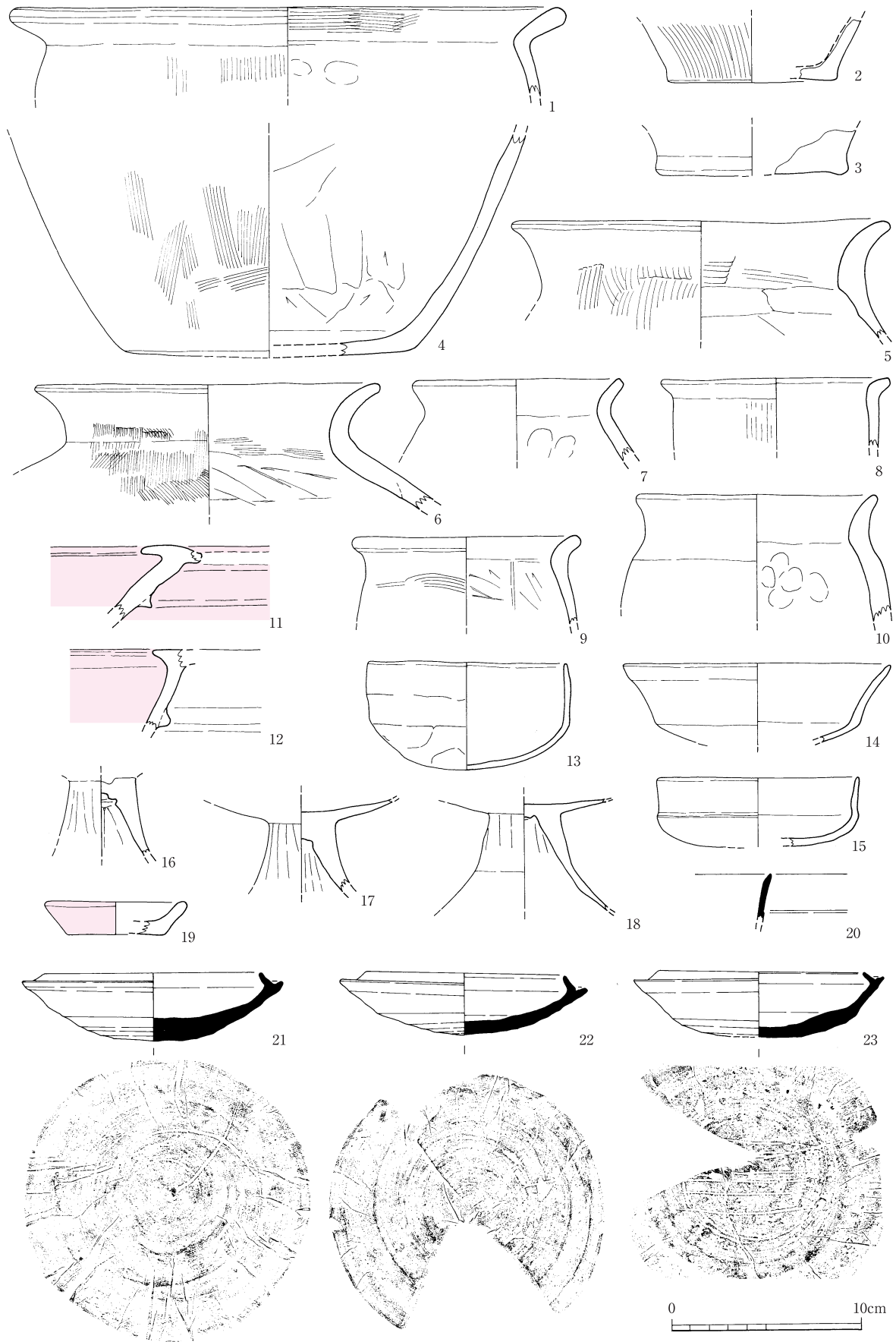
土師器 (5~10・13~18) 5~10は甕である。5・6は外面と口縁部内面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整を行う。6は内面に粘土紐接合痕が確認できる。7・10は器面が摩滅しており、オサエの痕跡が確認できるにすぎない。9の胴部内面はケズリ調整を行うが、工具の圧痕も確認できる。13は精製の土師器杯で、胴部外面に軽い稜を持つ。胴部下半はケズリ調整の痕跡が残る。14・15は高杯で、15は外面屈曲部に整形時についたと思われるスジが横走する。器面は摩滅が激しいが、ミガキ調整を行っていたようである。16~18は高杯脚部である。16は脚部内側頂部に工具痕が残る。

須恵器 (20~23) 20は壺の口縁部になろうか。頸部に沈線を巡らす。21~23は杯身である。底部付近は回転ヘラケズリを行い、底面にヘラ記号を持つ。

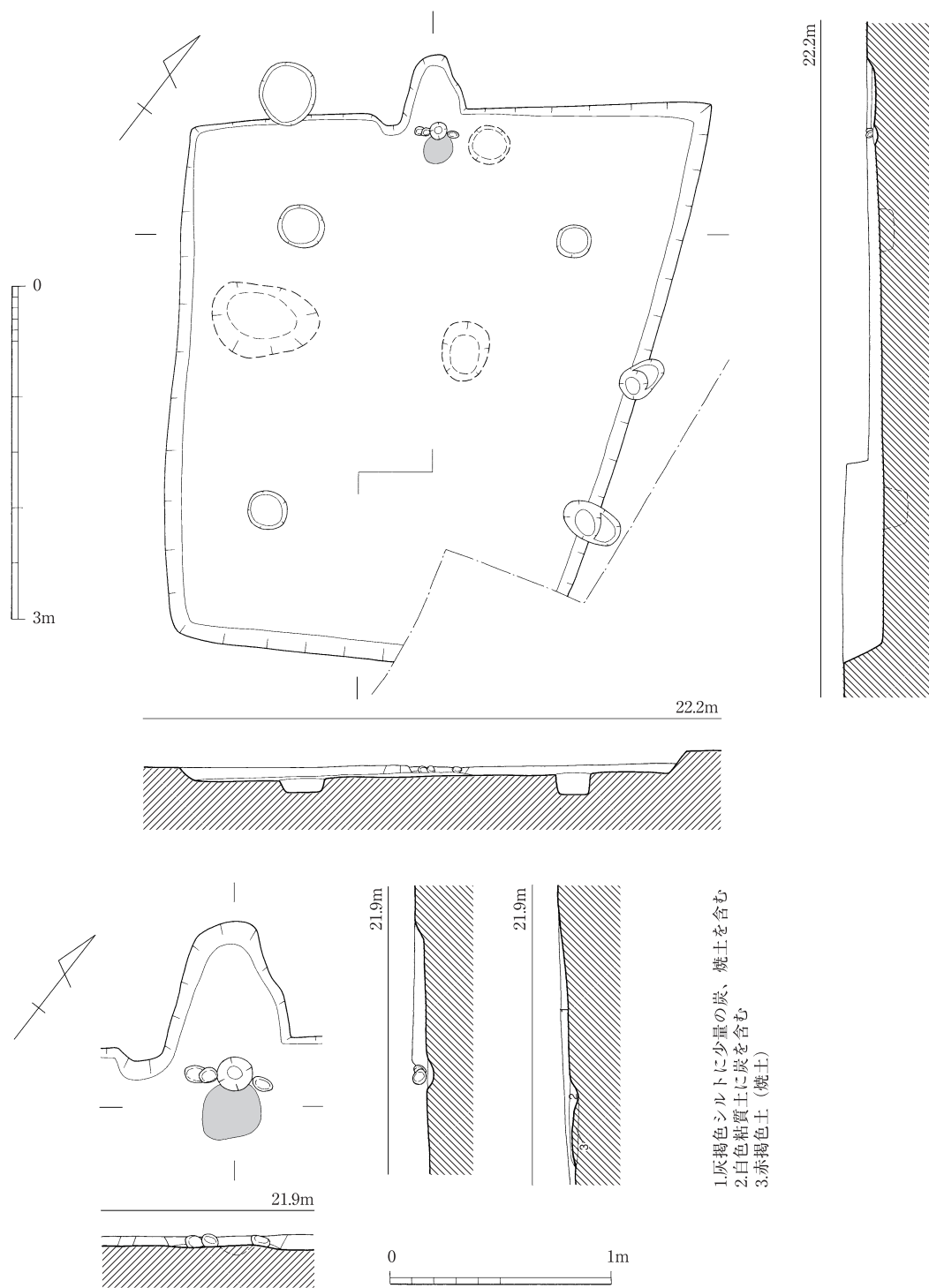
3号竪穴住居跡 (第27図、図版12)



第25図 2号竖穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)

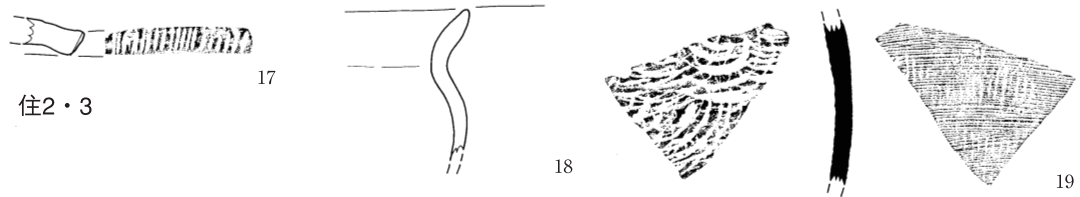
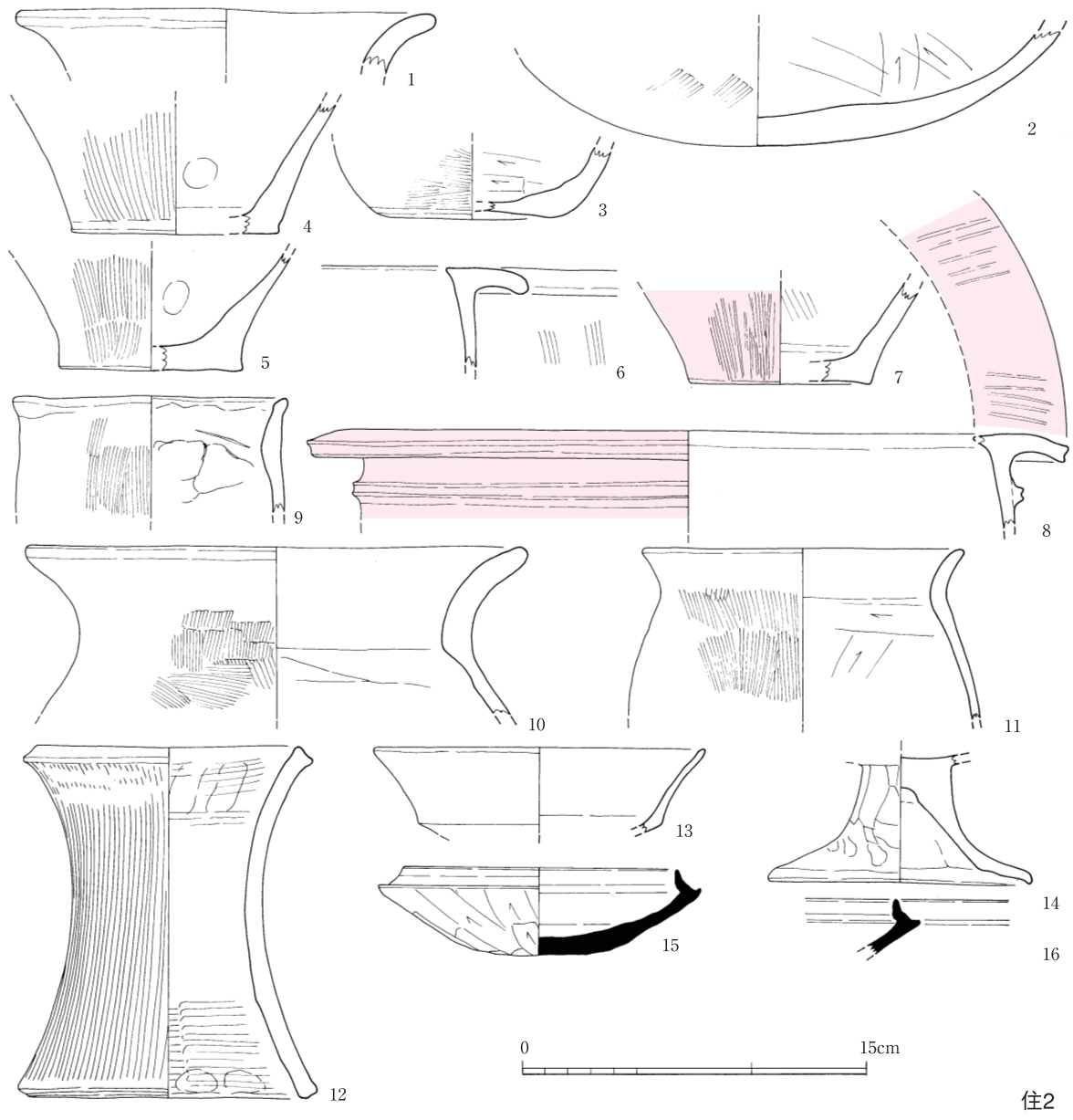


第26图 2号竖穴住居跡出土土器実测图 (1/3)



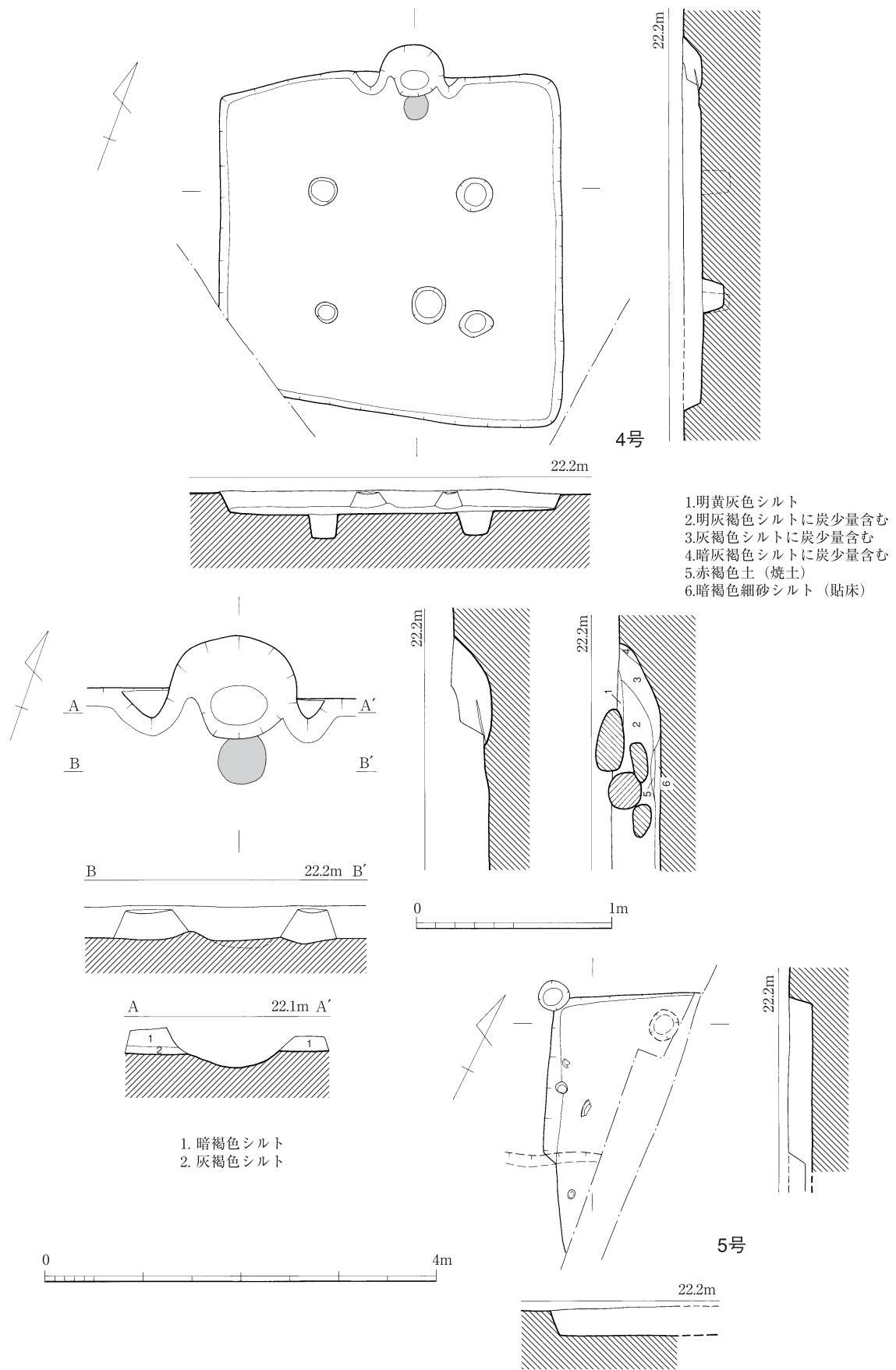
第27図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)

調査区中央の東寄りに位置し、2号竪穴住居跡に切られる。南東隅は調査区外に延びる。平面形態は方形であるが、北東隅は鋭角に屈曲し、東壁は西壁と平行にならない。東壁を間違えて認識してしまった可能性が高い。南北軸は492cm、東西軸は360cm~466cmである。床は貼床を施して

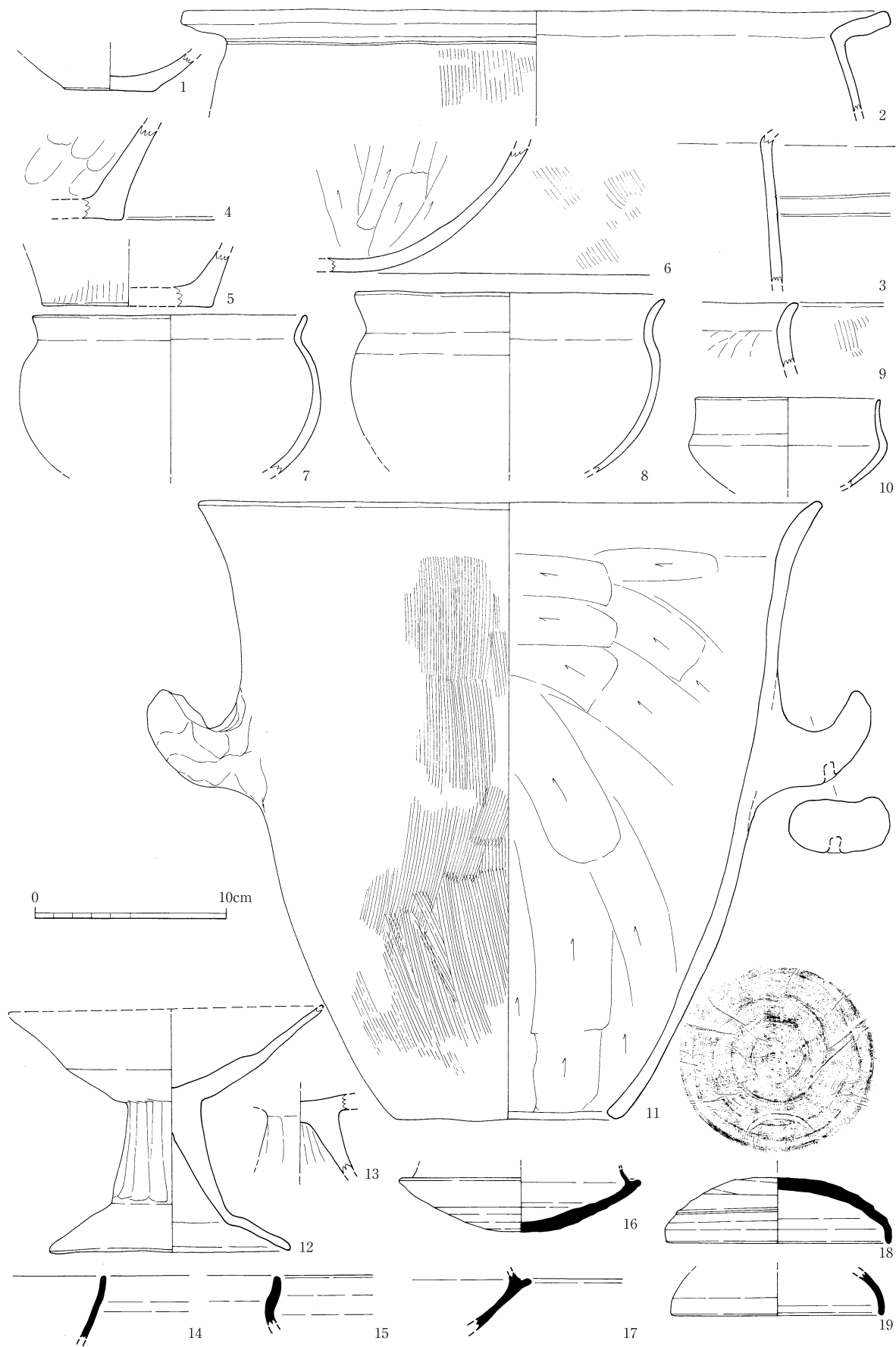


第28図 2・3号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

いたが、この面では柱穴を検出することができず、貼床を除去した状態で3つの柱穴を確認することができた。本来は4本柱と思われるが、南東側の一つはどうしても位置を特定できなかった。東壁の位置と併せて調査時の認識が甘かったためと思われる。北壁は2号竪穴住居跡にかなりの部分を壊されており、立ち上がりも数cmのみを確認するに留まる。北壁中央にカマドを設けるが、



第29図 4・5号竪穴住居跡実測図 (1/60、カマドは1/30)



第30图 4号竖穴住居跡出土土器実測图 (1/3)

東側袖部は壊されたためかうまく検出することができなかった。床面は径25cm程の焼土面のすぐ背後に小さな窪みが見られ、両脇に10cm程の丸石を置いている。土器を支える石かと思われる。

出土土器（第28図、図版21）

弥生土器（1・4～8・12） 1は壺の口縁部である。4・5は甕の底部で外面はハケ調整。6は鋤先状口縁の甕で外面にハケ調整を行う。7は丹塗磨研深鉢の底部で外面縦方向のミガキ調整を行う。内面はハケ調整の痕跡が残る。8は丹塗磨研深鉢の口縁部で鋤先状を呈し、直下に断面「M」字形突帯を貼り付ける。口縁部上面は暗文を施し、口縁端部は強いナデにより窪む。12は器台で外面は縦方向のハケ調整、内面は端部付近に横方向のハケ調整とユビオサエを施す。

土師器（2・3・9～11・13・14） 2・3は丸底の底部で、2は摩滅しているが、外面にハケ調整の痕跡残り、内面はケズリの後ナデ調整を行っている。3は外面ハケ調整、内面はケズリ調整を行う。9～11は甕で、いずれも外面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整を行う。13は高杯の口縁部で、器面は摩滅している。胎土は細かく精良である。14は高杯脚部で、内外面ケズリ調整を行う。

須恵器（15・16） 杯身で、15は外面に手持ちのヘラケズリを行う。

2・3号竪穴住居跡検出中の土器（17～19） 17は弥生土器の甕口縁部で端部に密な刻目を施す。18は土師器甕で器面は摩滅している。19は須恵器の大甕で外面はタタキの後にハケ調整を行い、内面に同心円文が残る。

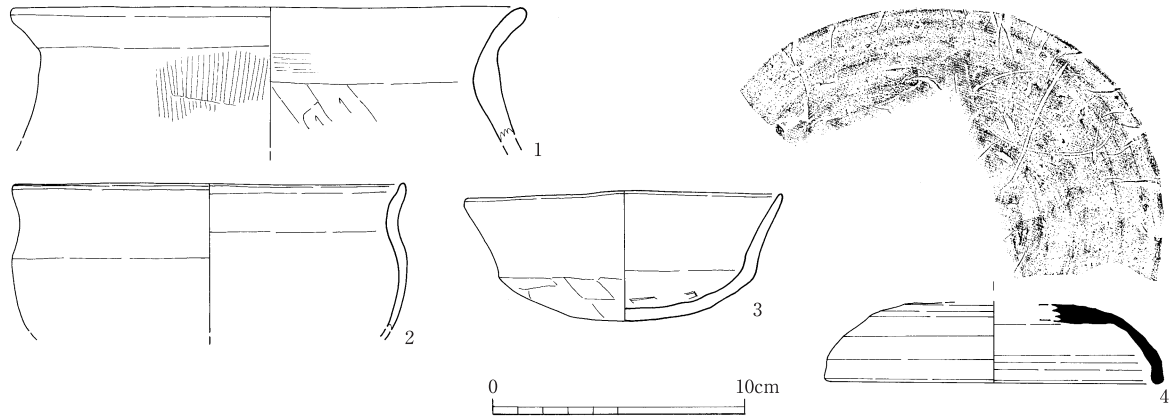
4号竪穴住居跡（第29図、図版13）

調査区南端に位置する。平面形態は方形で、南北軸は360cm、東西軸は350cmである。南西隅は側溝によって壊されてしまった。主柱穴は4本で、北壁中央にカマドを設ける。床は貼床を施していたが、この面では柱穴を検出することができず、貼床を除去した状態で柱穴を確認することができた。住居内南東寄りに一つ組み合わないピットが存在するが、この埋土は他の柱穴とは明らかに異なっていたことから、住居よりも新しいものと思われる。カマドの床面は径20cm程の焼土面が見られ、その背後が窪む。確認した袖部は短いが、焼土面の位置から本来はもっと長く延びていたと思われる。

出土土器（第30図、図版21・22）

弥生土器（1～5） 1は壺の底部と思われる。平底で内外面ナデ調整。2は甕の口縁部で端部は方形に収める。屈曲部外面に浅い沈線状のものが見られる。3は甕の胴部で2条沈線を巡らす。口縁屈曲部は稜を形成する。4・5は甕の底部で平底を呈する。4は外面が摩滅し、内面にユビオサエを施す。5は外面にハケ調整を行う。

土師器（6～13） 6は丸底の底部で外面にハケ調整、内面にケズリ調整を行う。7・8は精製の鉢で器面は摩滅している。9は甕の口縁部で外面はハケ調整、胴部内面はケズリ調整を行う。10は精製の屈曲杯で器面は摩滅している。11は甕で口縁部は弱く外反する。外面はハケ調整、内面はケズリ調整を行うが、口縁部はナデにより仕上げる。また把手に下方向から小さな孔を途中まで穿つ。12・13は高杯である。杯部は屈曲が弱い稜は形成する。脚部は屈曲し、裾部は直線



第31図 5号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

的に開く。脚部は内外面ともケズリ調整を行い、裾部は摩滅している。13も脚部内外面にケズリ調整を行う。

須恵器 (14~19) 14・15は器種はよく分からない。16・17は杯身で底部付近に回転ヘラケズリを行う。18・19は杯蓋で、18は天井部に回転ヘラケズリを行う。

5号竪穴住居跡 (第29図、図版13)

調査区中程の東際に位置し、1号竪穴住居跡に切られる。北東隅部分のみを確認した。平面形態は方形と思われる。床には他の住居跡と同じく貼床を施す。

出土土器 (第31図、図版22)

土師器 (1~3) 1は甕で、外面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整を行う。口縁部内面は摩滅しているが横方向のハケ調整の痕跡が残る。2は精製の鉢で器面は摩滅している。3は屈曲する鉢で、口縁端部内側は小さく肥厚する。器面は摩滅しているが胴部外面はケズリ調整の痕跡が残る、内面は工具の圧痕が見られる。

須恵器 (4) 杯蓋で天井部に回転ヘラケズリを行い、ヘラ記号を持つ。

第2項 土坑・溝

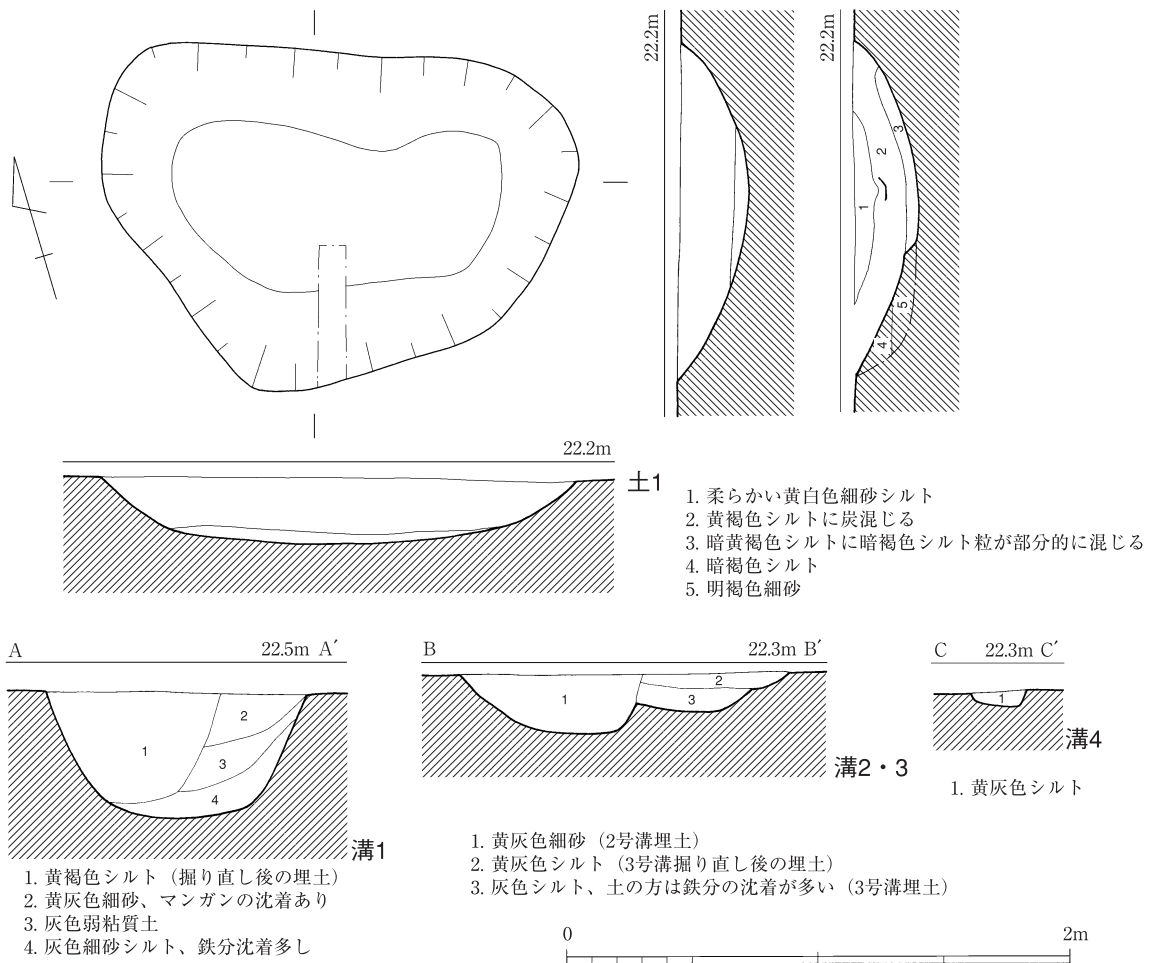
1号土坑 (第32図、図版14)

調査区南端に位置し、平面形態は楕円形である。長径380cm、短径274cmで、床面は窪み、立ち上がりは緩い。埋土に炭を多く含んでいたが、床面に焼けた痕跡は認められなかった。

出土土器 (第33・34図、図版22)

弥生土器 (1・9・22) 1は壺で、胴部最大径の位置に径2cm程の円形浮文を貼り付け、穿孔を行う。9は甕口縁部で外面にハケ調整を行う。22は丹塗磨研の蓋と思われ、端部に近い箇所穿孔を行う。ミガキ調整の前のハケ調整が確認できる。

土師器 (2~8・10~21) 2~8は甕である。外面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整を行う。7は胴部内面に粘土紐接合痕が残る。10は甌の把手で、器壁に孔をあけ差し込んでいる状況が伺

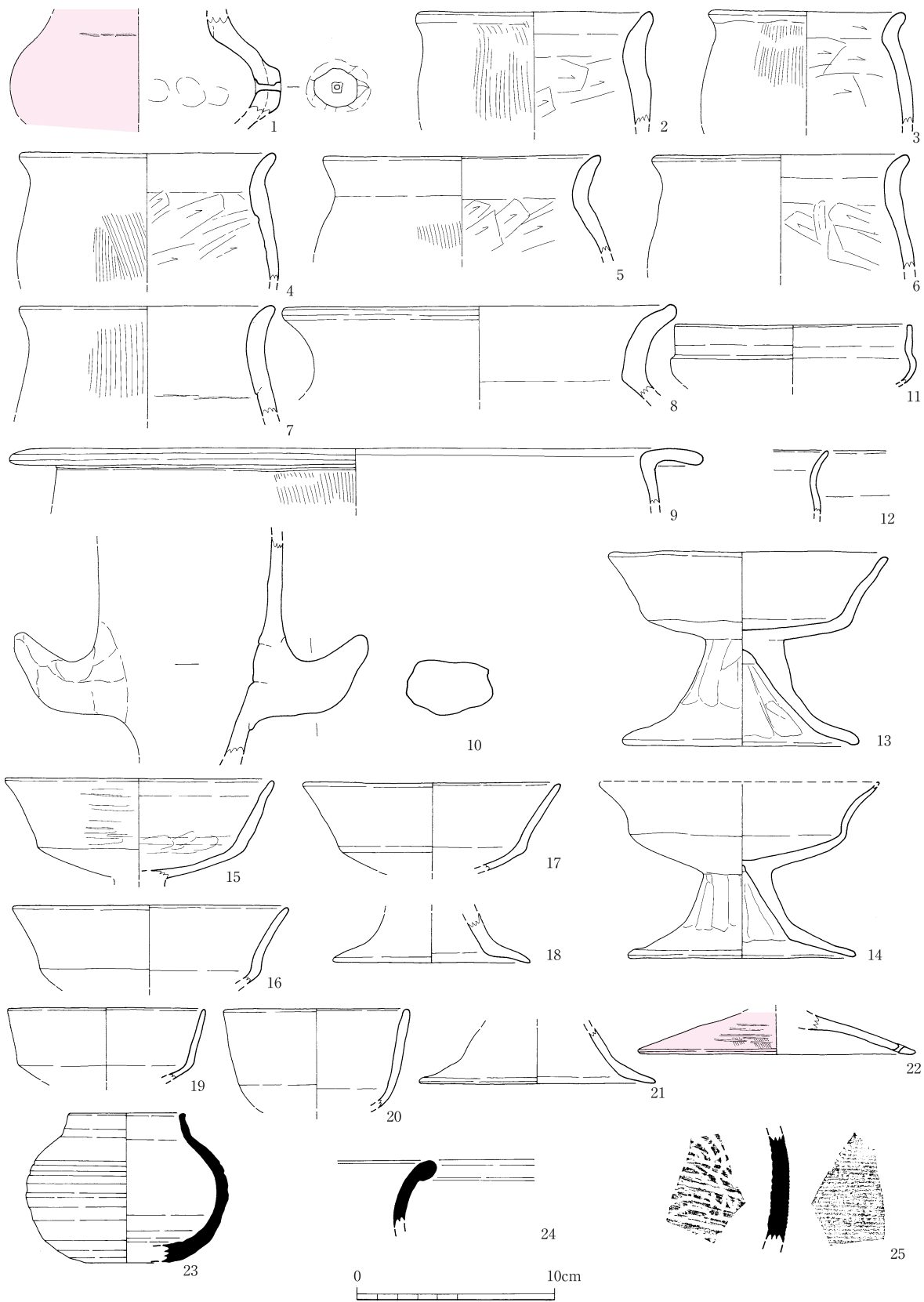


第32図 1号土坑、1～4号溝実測図 (1/30)

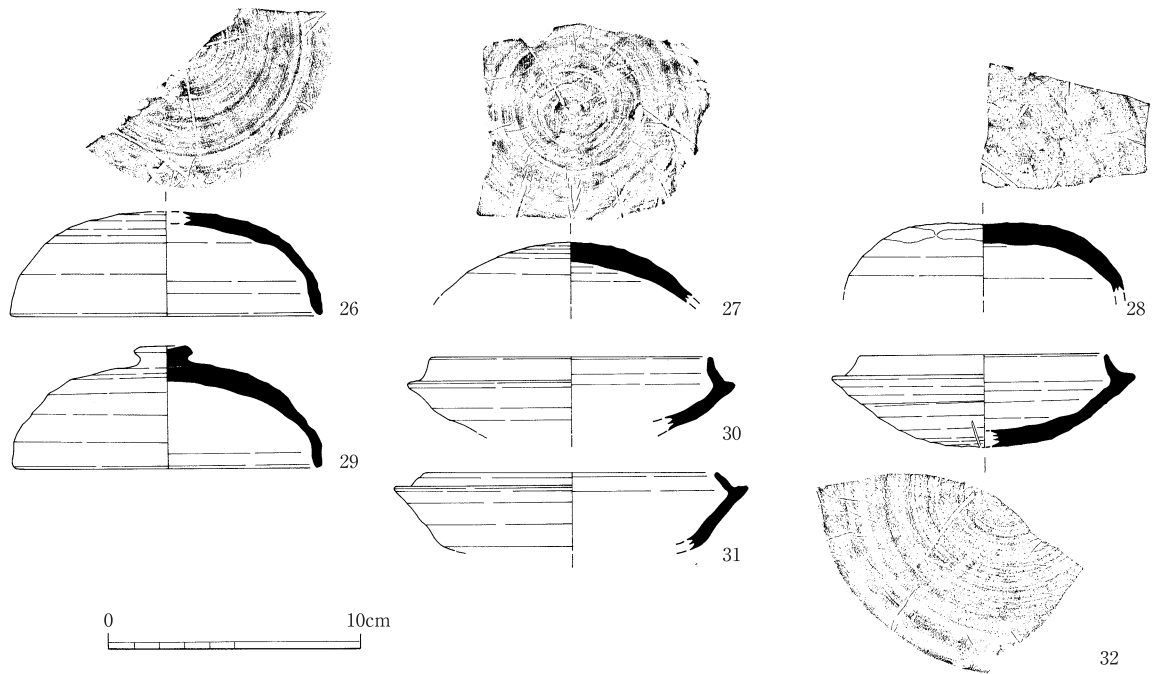
える。11は精製の屈曲する器形で、屈曲部外面に稜を形成する。12は精製の鉢で器面は摩滅している。13・14は高杯である。杯部が屈曲し口縁部は緩やかに外反する。脚部は内外面ともケズリ調整を行う。14は脚柱部と脚裾部の境がはっきりしている。15・16は高杯の杯部で器面が摩滅しているが、15は外面に横方向のミガキ調整、内面にユビオサエの痕跡が見られる。17・18は同一個体と思われる高杯の杯部と脚裾部である。器面は摩滅している。19・20は屈曲し、口縁部が直線的に外傾するものである。胎土は精良で器面は摩滅している。21は高杯脚部である。

須恵器 (23～32) 23は小型壺で、口縁部の立ち上がりは弱く内傾する。24は大型器種になろうか。口縁端部は三角状に小さく肥厚する。25は大型甕で内面に同心円文が残る。26～29は杯蓋である。26は天井部に回転ヘラケズリを行い、ヘラ記号を持つ。27は天井部がやや丸味を帯び、ヘラ記号を持つ。28は天井部に手持ちヘラケズリを行い、ヘラ記号を持つ。29は天井部に回転ヘラケズリを行い、大きなつまみを持つ。30～32は杯身で、31・32は底部に回転ヘラケズリを行う。32にはヘラ記号が見られる。

1号溝 (第32図、図版14)



第33図 1号土坑出土土器実測図その① (1/3)



第34図 1号土坑出土土器実測図その② (1/3)

調査区北西隅に位置する。上端幅は100cm程、断面形態はU字状を呈し、北東-南西方向に延びる。土層の観察から一度掘り直しを行っていると思われる。

出土土器 (第35図)

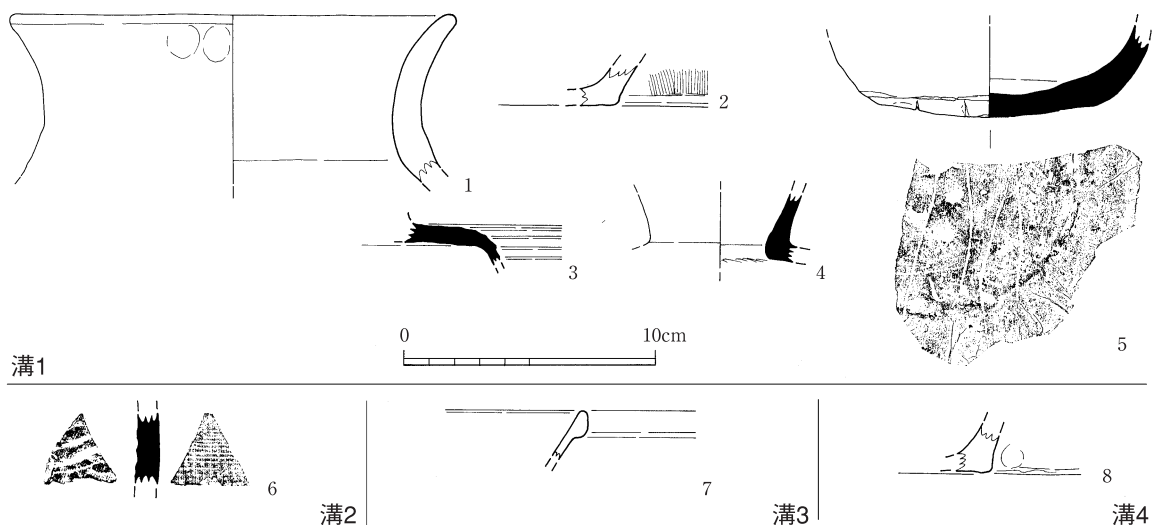
弥生土器 (2) 甕底部で、外面にハケ調整を行う。

土師器 (1) 甕で器面の摩滅が激しい。

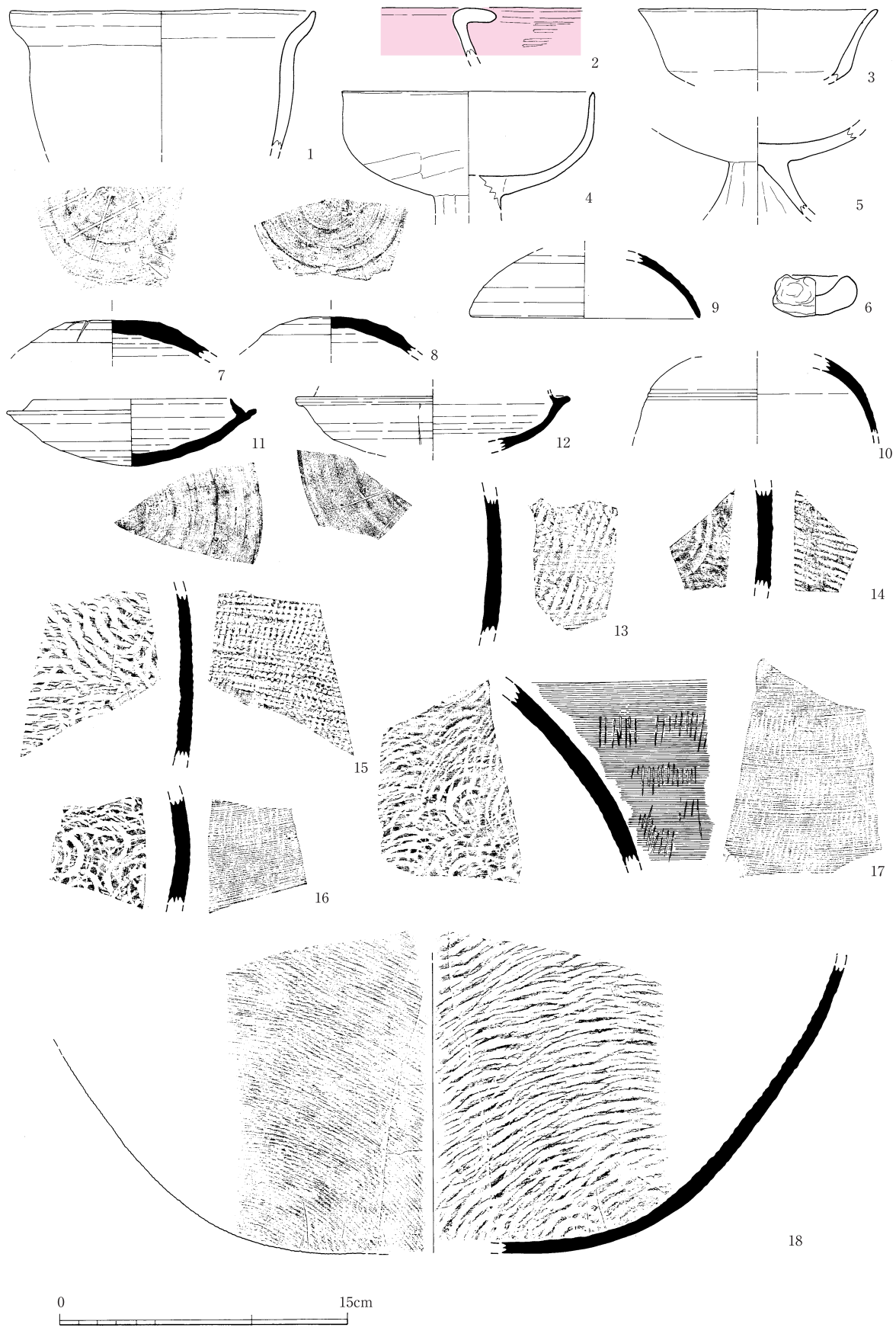
須恵器 (3~5) 3は壺の肩部か。4は壺の頸部~胴部にかけての破片で、胴部内面に当て具痕が残る。5は大型器種の底部になろうか、底面にヘラ記号を持つ。

2・3号溝 (第32図、図版14)

調査区北東隅に位置する。2号溝、3号溝とも上端幅70~80cmで、北-南方向に平行に延びる。



第35図 1~4号溝出土土器実測図 (1/3)



第36図 第1遺構面出土土器実測図 (1/3)

土層の観察から、2号溝が3号溝を切っていることが分かる。3号溝も掘り直しを行っていると思われ、ほぼ同じ位置に何度も溝が掘削された様子がうかがえる。断面形態は2号、3号とも緩い「U」字状を呈する。

出土土器（第35図）

須恵器（6） 2号溝の埋土から出土した甕の破片で、内面に同心円文が残る。

陶磁器（7） 3号溝の埋土から出土した白磁片で、口縁部が玉縁状に肥厚する。釉はやや灰色がかった白色である。

4号溝（第32図、図版15）

調査区中央西側に位置し、東－西方向に延びる。西側は調査区外にさらに延びる。上端幅は20cm程と狭く、深さも非常に浅いものである。

出土土器（第35図）

弥生土器（8） 甕底部で外面にユビオサエの痕跡が残る。

第3項 第1遺構面出土の土器（第36図）

弥生土器（1・2） 1は甕で器面は摩滅しているが胴部外面は石が動いた痕跡があり、ケズリ調整を行ったと考えられる。2は丹塗磨研鉢である。

土師器（3～6） 3～5は高杯で、4の口縁端部は若干外反する。杯部下半にケズリ調整の痕跡が残る。5は器面の摩滅が激しいが、脚部内外面にケズリ調整の痕跡が残る。6は手づくね土器で、外面のオサエが著しい。

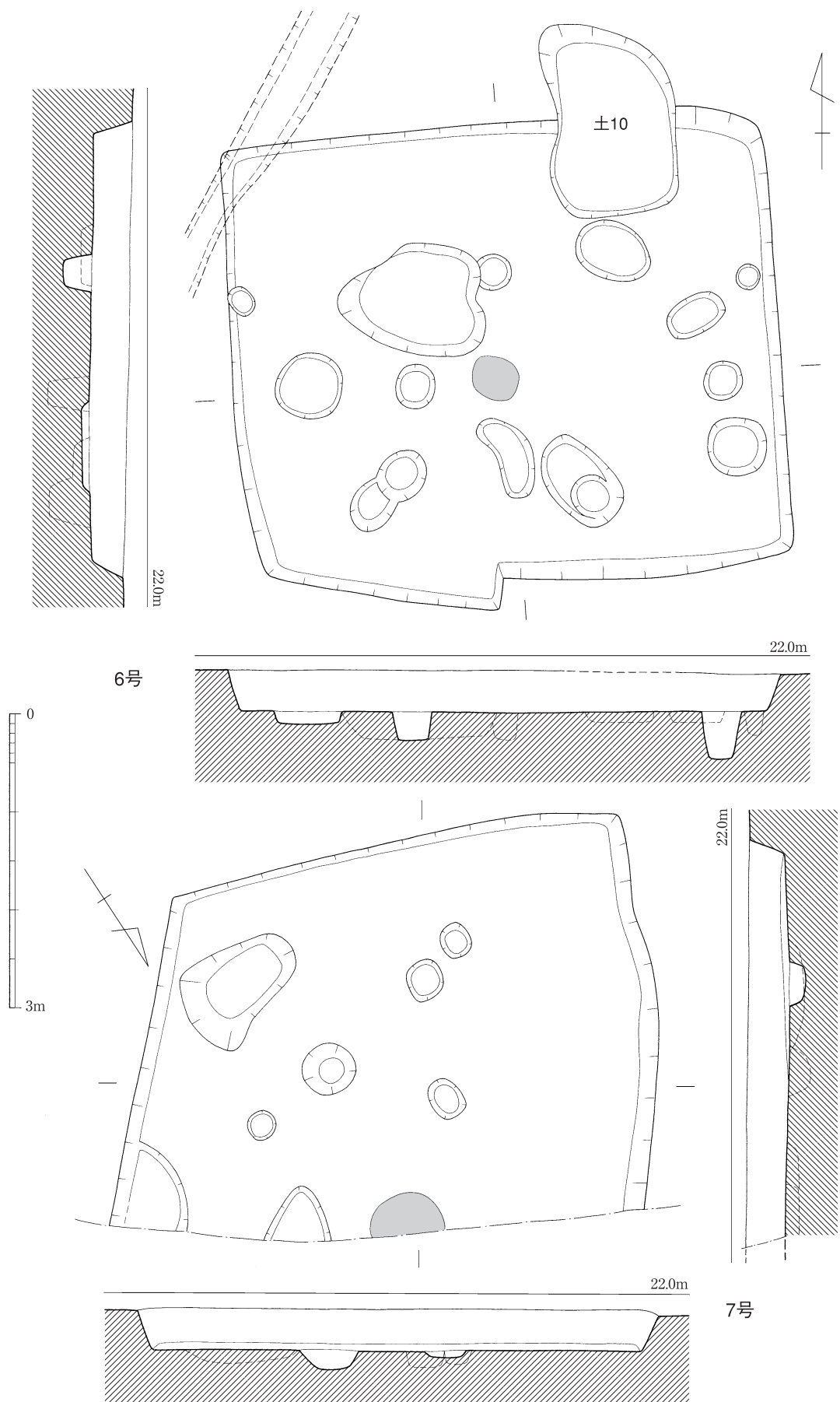
須恵器（7～18） 7～10は杯蓋で、7～9は天井部に回転ヘラケズリを行う。7・8は天井部にヘラ記号を持ち、10は2条沈線を巡らす。11・12は杯身で底部にヘラ記号を持つ。特に12は鋭く深い記号である。13～18は甕で、内面はいずれも同心円文が残る。外面は13が格子タタキと平行タタキ、14が平行タタキ、15が格子タタキ、16・17が平行タタキの後カキ目、18が細かい平行タタキである。

第3節 第2遺構面の検出遺構と出土遺物

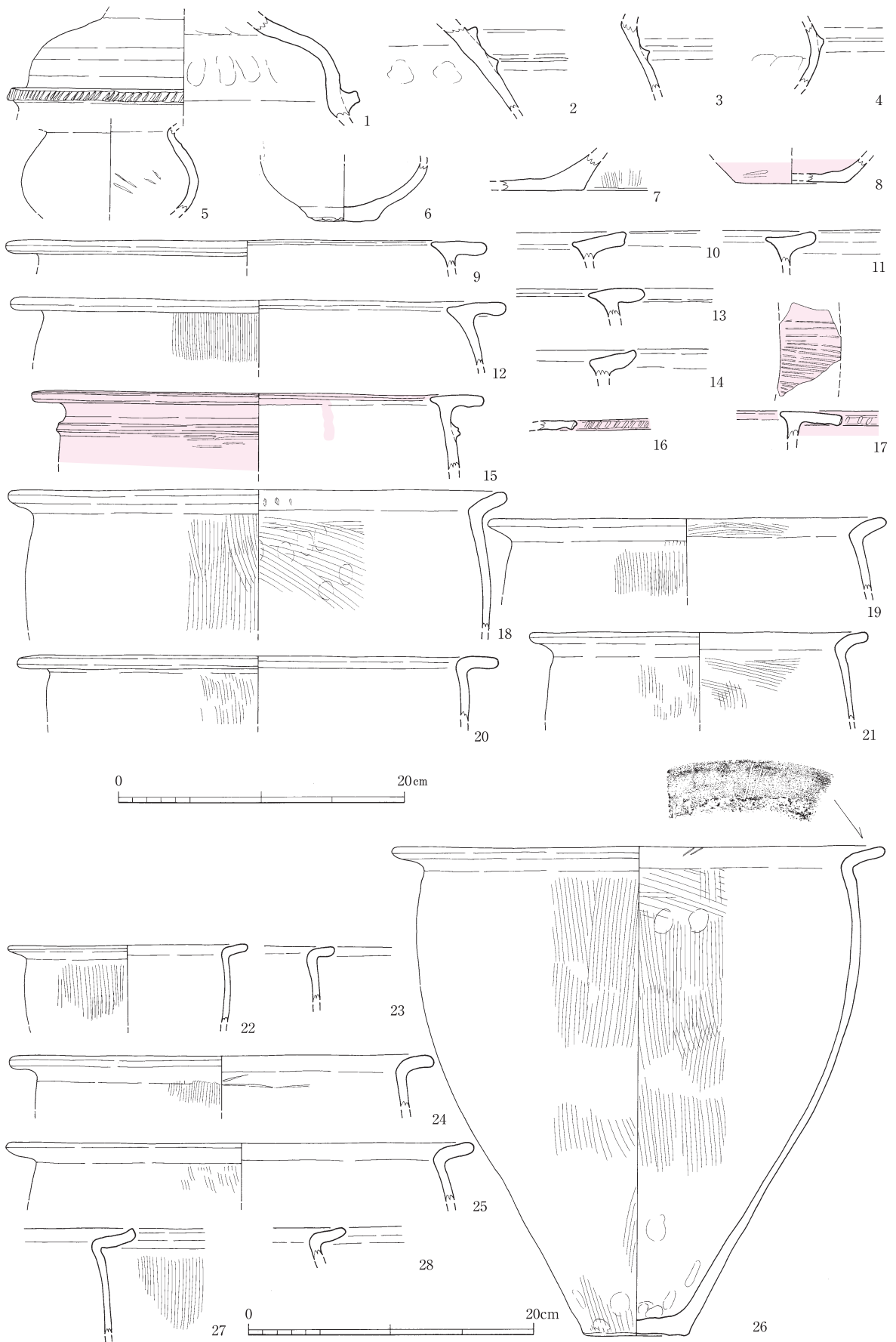
第1項 竪穴住居跡

6号竪穴住居跡（第37図、図版15）

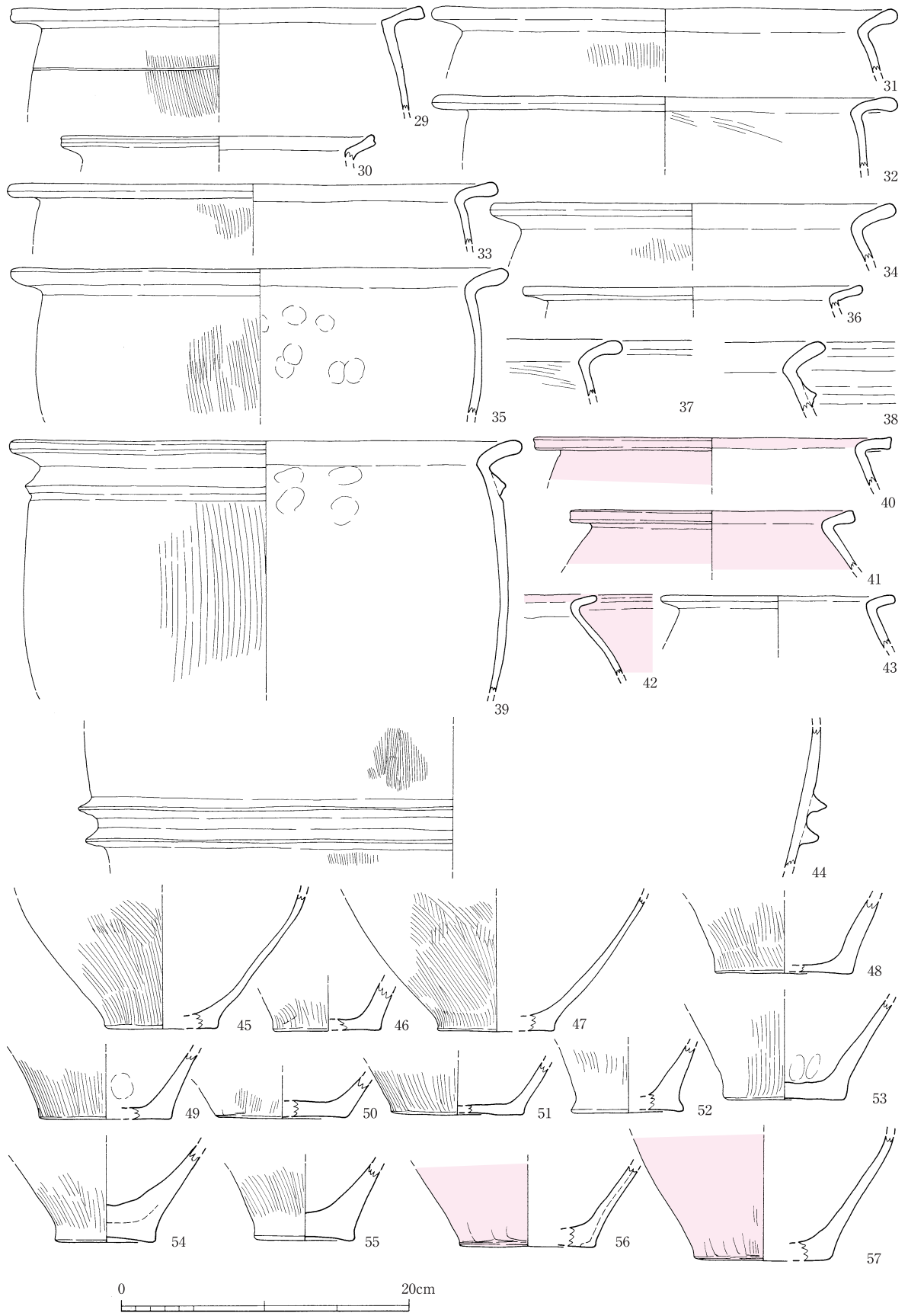
調査区中央北寄りに位置し、3号土坑、6号溝に切られる。平面形態は長方形で長軸562cm、短軸470cmである。南壁の西側は3号土坑と切り合っていたため、プランを誤認し、掘りすぎてしまった。支柱穴は判然としない。中央に炉跡と思われる焼土が認められる。埋土は中央付近下層に黒褐色土が見られたが、壁周りは地山に近い色調の土であり、壁際のかかなりの量の土が崩れているものと思われる。床面の深さは遺構確認面より40cm程あり、本来はかなりの深さがあったと想定できる。



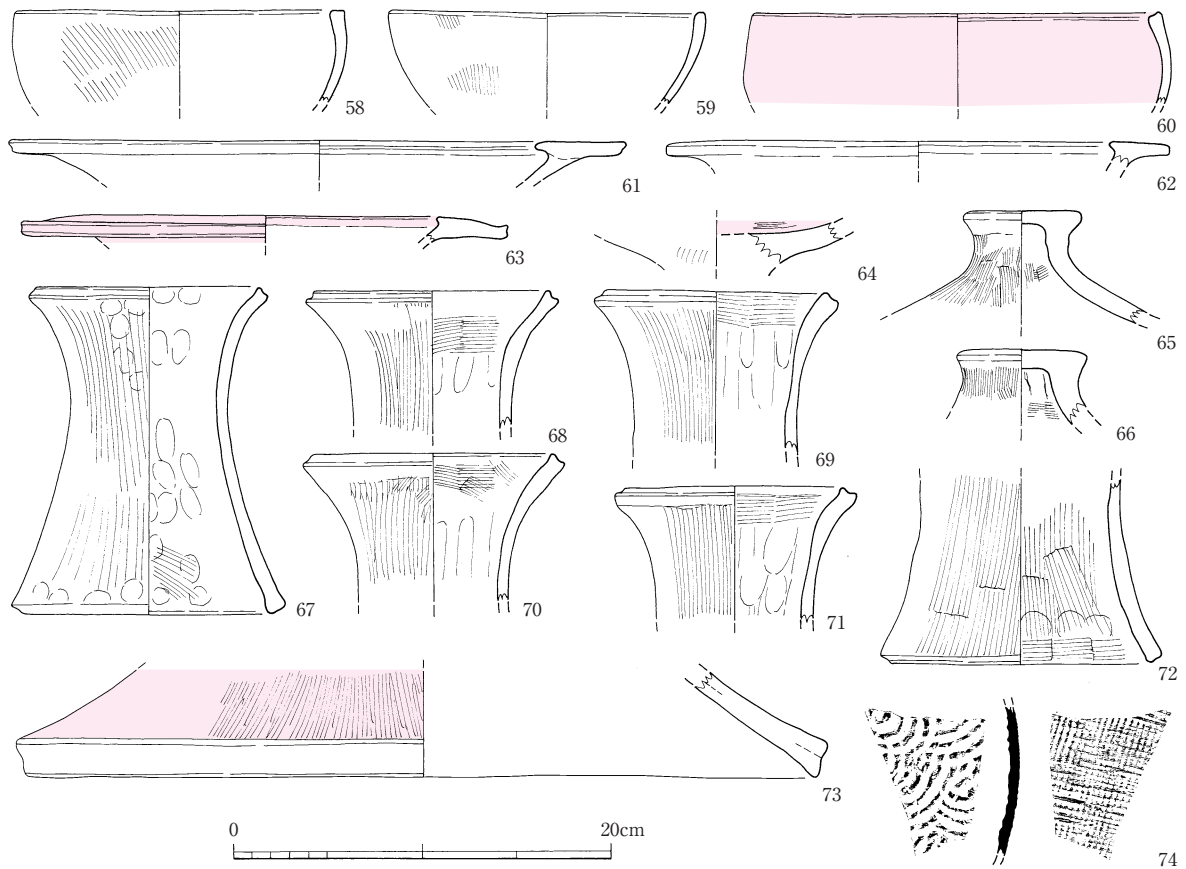
第37图 6·7号竖穴住居跡実測图 (1/60)



第38図 6号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4)



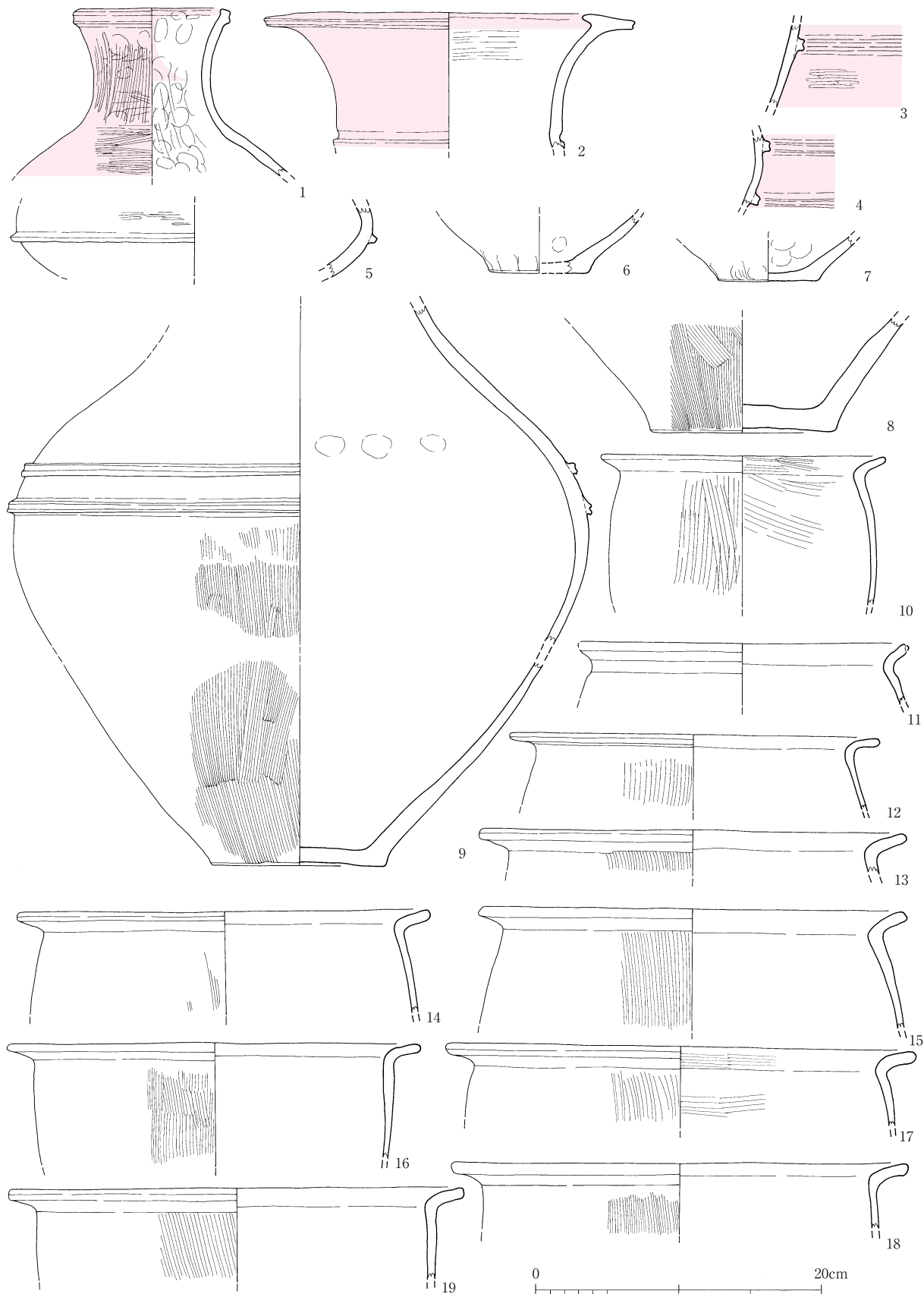
第39図 6号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4)



第40図 6号竖穴住居跡出土土器実測図その③ (1/4)

出土土器 (第38~40図、図版22)

弥生土器 (1~71) 1は壺の胴部に高い突帯を貼り付け、刻目を施す。2~4は壺の肩部~胴部で、三角突帯を貼り付ける。4の内面は工具の圧痕が残る。5は小壺でナデ調整を行うが、内面は工具の圧痕が残る。6~8は壺の底部で、6は外面に工具の圧痕が残る。8は丹塗磨研を施す。9~14は鋤先状口縁の甕である。15~17は丹塗磨研の甕で、口縁は鋤先状を呈する。15は断面「M」字形の突帯を貼り付ける。16・17は端部に刻目を施し、17は口縁部上面に暗文を施す。18~28は「く」字形に屈曲する甕で、口縁端部は丸く収め、外面はほとんどにハケ調整を行う。18は口縁内面に工具の圧痕が付く。24は胴部内面に工具の圧痕が見られる。26は口縁部内面にヘラによる2条の記号を持つ。29・30は「く」字形に屈曲し、口縁端部がナデによる窪みを持つものである。29は屈曲が強く明瞭な稜を形成する。胴部に1条沈線を巡らせ、外面はハケ調整を行う。31~39は「く」字形に屈曲し、口縁端部が丸く肥厚するものである。38・39は屈曲部直下に1条の三角突帯は貼り付ける。39の胴部外面は粗いハケ調整を行う。40~43は鉢で、40~42は丹塗磨研を施す。40の口縁端部はナデにより窪み、41は方形状に肥厚する。44は甕の胴部下半で、高い三角突帯を2条貼り付ける。45~57は甕の底部である。52は外側への張り出しが見られ、54は底面が分厚い。56・57は丹塗磨研を施し、外面に工具の圧痕が残る。58~60は椀形の鉢で、58・60は口縁部がやや内湾する。60は丹塗磨研を施す。61~64は高杯で、器面が摩滅しているが、



第41図 7号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4)

63・64は確実に丹塗磨研を施す。口縁部は鋤先状を呈し、61・63は口縁端部がナデにより窪む。65・66は蓋で内外面ハケ調整を行う。67～72は器台で、端部はナデによって窪む。器面はハケ調整とユビオサエを施す。73は丹塗磨研の大型器台裾部で、縦方向のミガキ調整を行う。

須恵器（74） 甕で外面に格子タタキ、内面に同心円文が残る。混入したものと思われる。

7号竪穴住居跡（第37図、図版15）

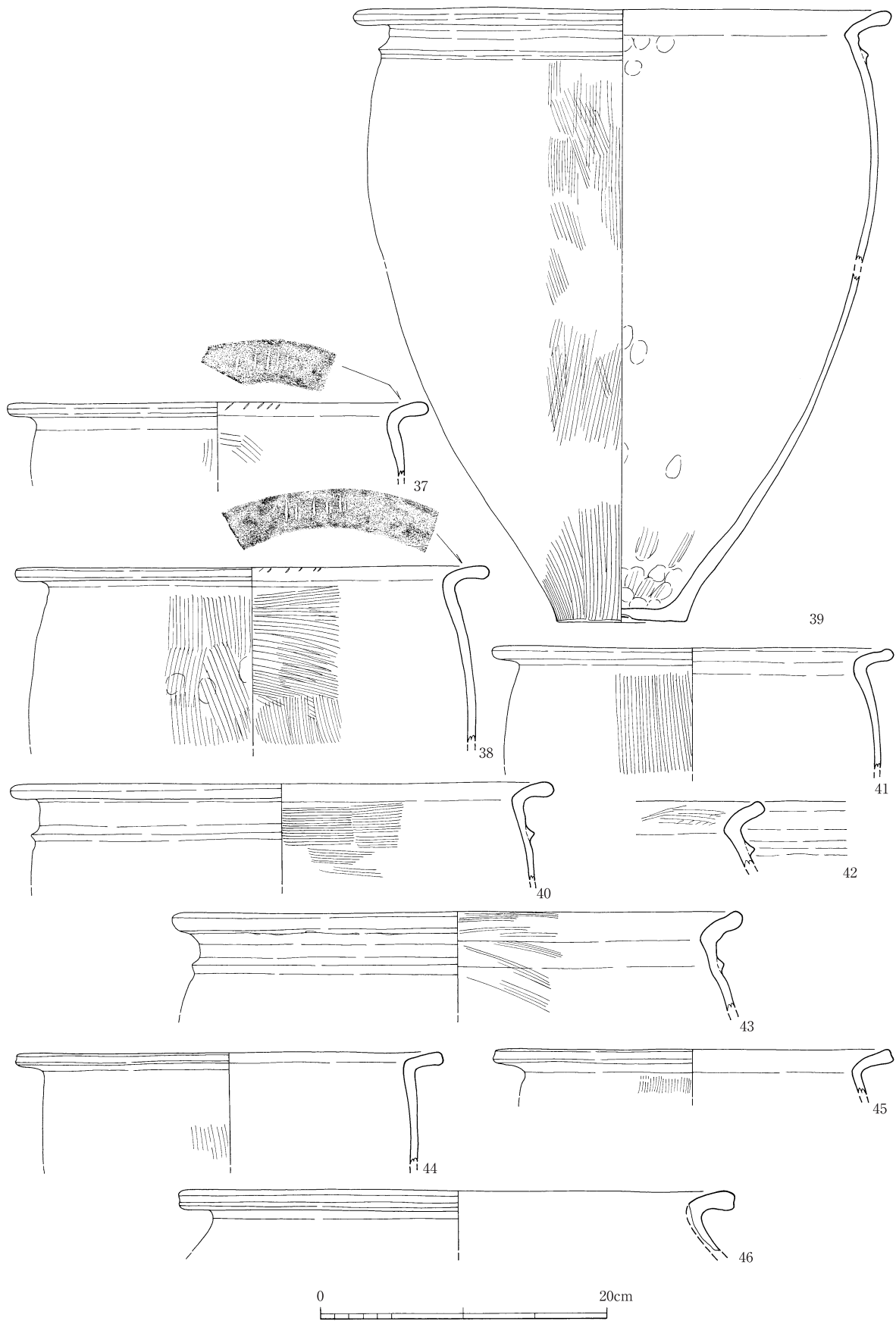
調査区北端に位置し、北側は調査区外に延びる。平面形態は長方形で、東西軸は480cm～550cmである。東壁と西壁が平行にならないが、この付近は平面プランの確認に苦慮したため、東壁を掘り間違えた可能性も考えられる。調査区北端に焼土が見られるが、ここを中央の炉跡と考えた場合、南壁からの距離から、南北方向に700cmを超す大型の住居が復原できる。支柱穴は判然としない。埋土は下層に黒褐色土が堆積していた。

出土土器（第41～45図、図版22～23）

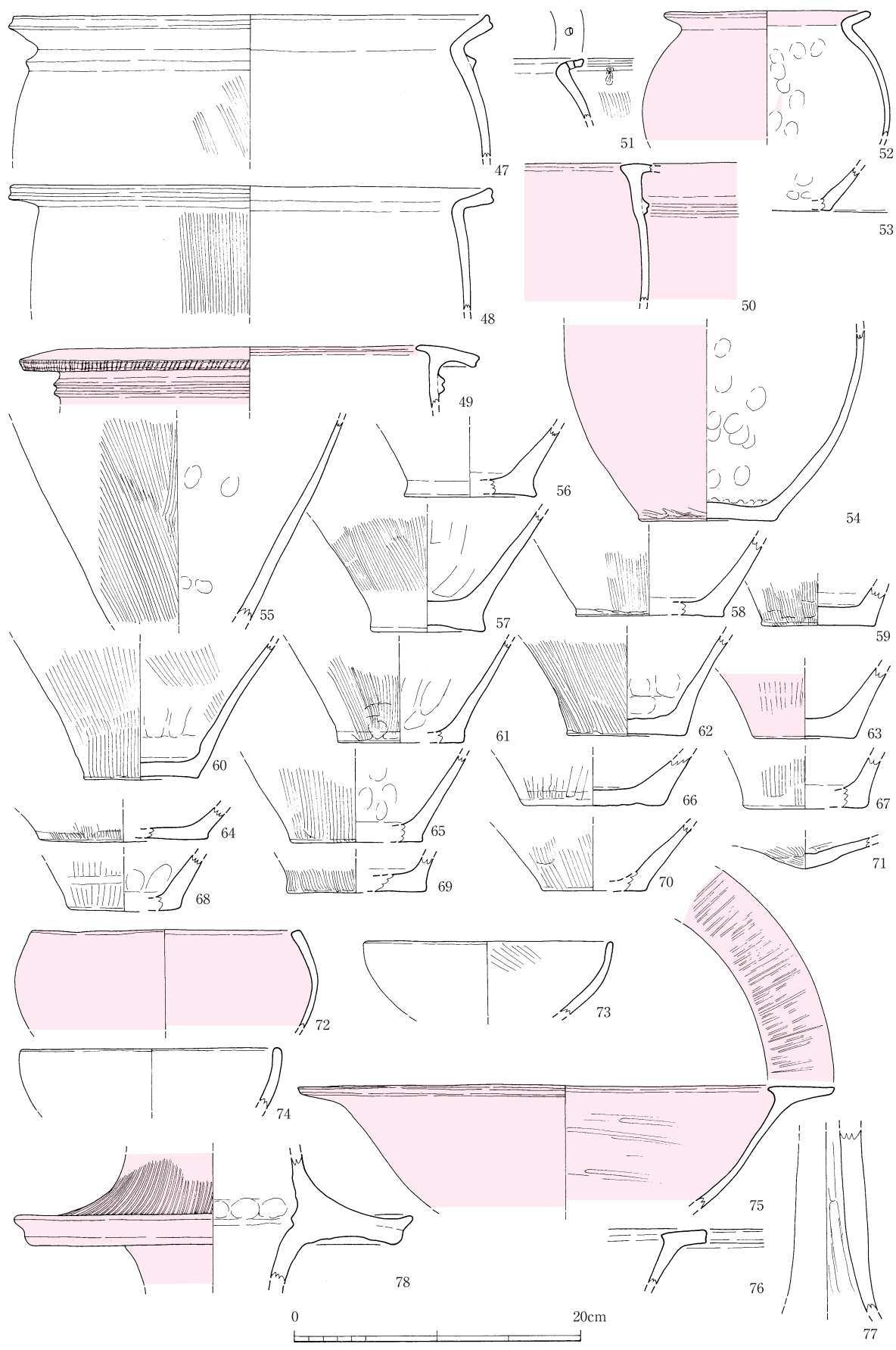
弥生土器（1～82） 1は丹塗磨研の細口壺で、口縁端部外面が段を持って肥厚し、強いナデによって窪む。外面は頸部が縦方向、胴部が横方向のミガキ調整、内面はユビオサエを行う。2は鋤先状口縁の丹塗磨研壺で頸部下端に突帯を貼り付ける。口縁端部はナデにより弱く窪む。内面はハケ調整も行う。3・4は丹塗磨研の壺で胴部に断面「M」字形突帯を貼り付ける。5は壺の胴部で台形状の突帯を貼り付ける。6～8は壺の底部でユビオサエを施す。8は外面ハケ調整を行う。9は壺の頸部～底部にかけてで、胴部に断面「M」字形突帯を貼り付ける。底部は薄い平底を呈する。胴部下半はハケ調整の痕跡がよく残る。胴部上半は摩滅しているが器面は平滑であり本来はミガキ調整を行っていたと思われる。内面はナデ調整でユビオサエが見られる。10～24は「く」字形の甕で口縁端部は丸く収める。胴部外面はほとんど縦方向のハケ調整を行う。11は屈曲部外面が強いナデによって窪む。21は内面屈曲部がやや突出し、強い稜を形成する。屈曲部直下に三角突帯を貼り付ける。22は器形からは鉢とすべきか。底面は器面が剥離しているが、薄い平底を呈する。外面は粗いハケ調整を行う。23は口縁部外面に調整の際の工具の圧痕が残る。25～43は「く」字形に屈曲し、口縁端部が丸く肥厚するものである。27・39・40・42・43は屈曲部直下～胴部上位に三角突帯を貼り付ける。31・34の口縁部外面には調整の際の工具の圧痕が残る。35の屈曲部外面は強いナデにより窪む。36～38の口縁部内面にはヘラ記号が付けられる。39は薄い平底を持ち、内面にユビオサエの痕跡が残る。41は口縁端部が若干立ち上がり気味になる。44～46は口縁端部が肥厚し、ナデによって弱く窪む甕である。46は器壁が厚く口縁部が短い。47・48は「く」字形に強く屈曲し、口縁端部がナデによって強く窪む甕である。47は屈曲部直下に三角突帯を貼り付け、口縁端部上端はやや跳ね上げ気味となる。49・50は丹塗磨研の甕で、口縁部直下に断面「M」字形突帯を貼り付ける。49の口縁端部は強いナデにより窪み、細い刻目を施す。51は短い口縁部の鉢で、口縁部に穿孔を行う。口縁端部はナデにより小さく窪む。胴部外面はハケ調整を行う。52は丹塗磨研鉢で、53は同一個体の底部と思われる。54は丹塗磨研の甕の胴部～底部と思われ、底面中央が盛り上がる。55～70は甕の底部で平底を呈する。外面はハケ調整を行い、内面はナデもしくはユビオサエを行うものが多い。57の内面は工具を使用したナデ、



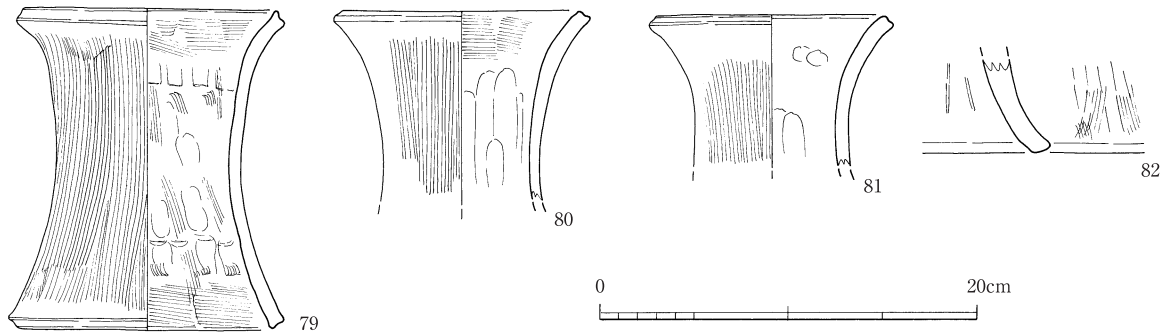
第42図 7号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4)



第43図 7号竖穴住居跡出土土器実測図その③ (1/4)

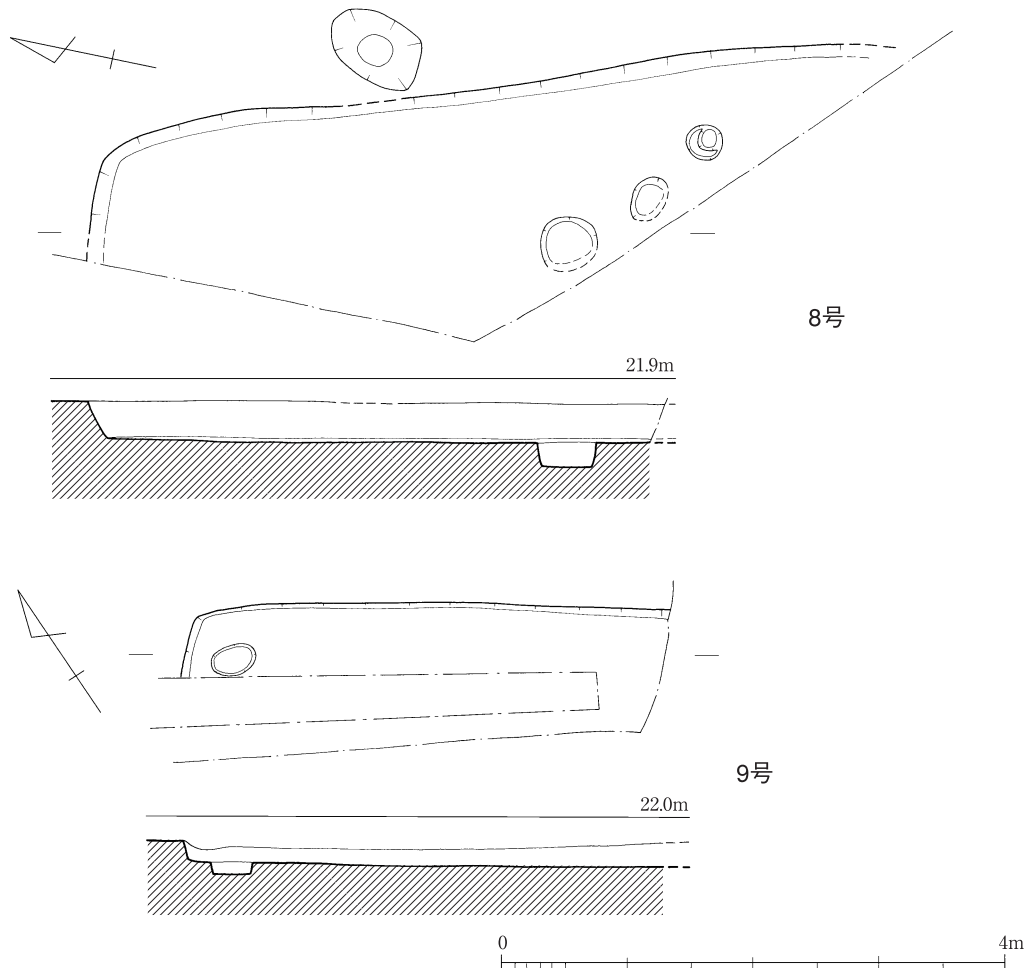


第44図 7号竪穴住居跡出土土器実測図その④ (1/4)

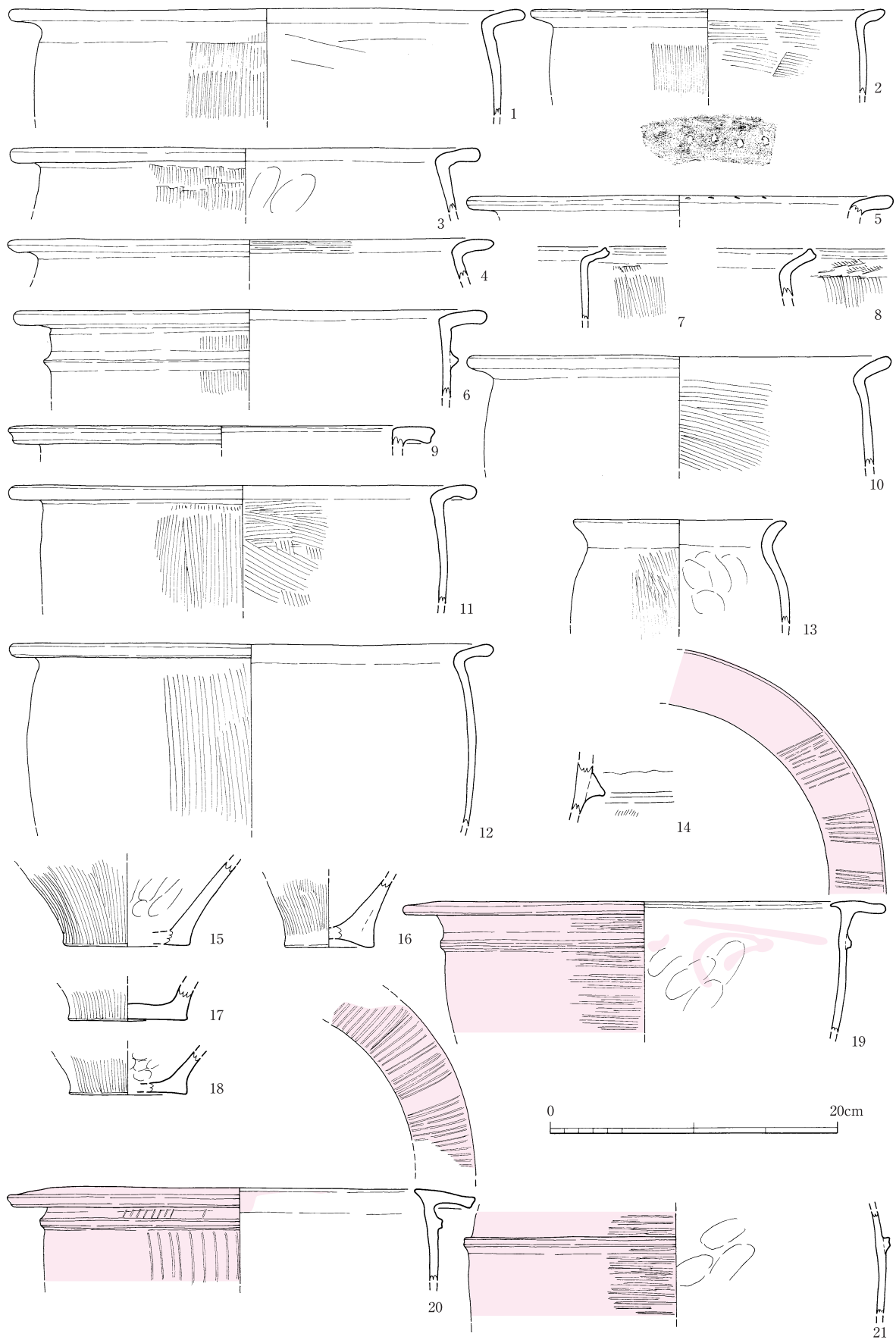


第45図 7号竪穴住居跡出土土器実測図その⑤ (1/4)

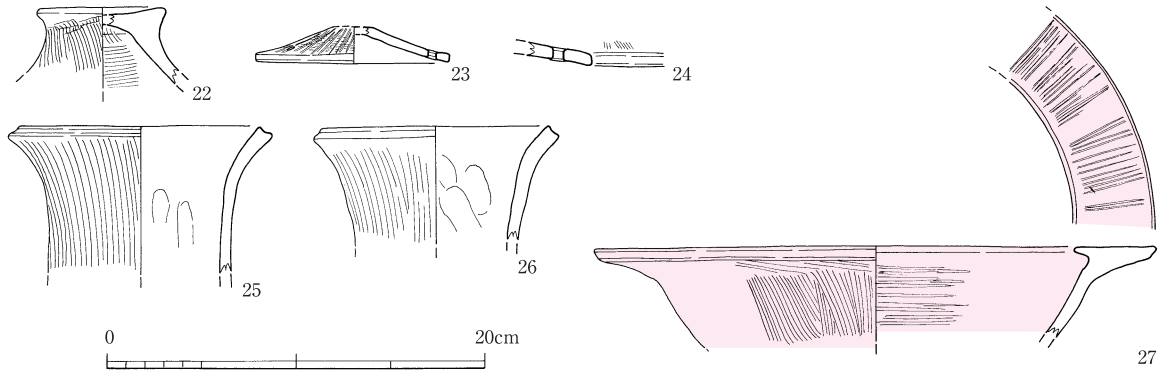
60は内面にハケ調整が見られる。63は外面に丹塗を施す。71は尖底で外面はハケ調整を行う。内面は工具の圧痕が残る。72~74は椀状の鉢で、72は口縁部が内湾し丹塗磨研を行う。75は丹塗磨研高杯で、口縁端部は細くなりナデによって少し窪む。口縁部上面は暗文を施す。76は鋤先状口縁の高杯で口縁端部はナデにより少し窪む。77は高杯脚部で内面にシボリ痕が残る。外面は摩滅が激しい。78は器台で、鏝端部は上方向に跳ね上げ気味に肥厚し、端部がナデにより窪む。鏝上部は暗文を施す。79~82は器台で、79~81の端部はナデによって窪む。79は外面に縦方向のハケ調整、内面は口縁部と脚部に横方向のハケ調整を行い、筒部内面に爪状の工具圧痕が上下2段に



第46図 8・9号竪穴住居跡実測図 (1/60)



第47図 8号竪穴住居跡出土土器実測図その① (1/4)



第48図 8号竪穴住居跡出土土器実測図その② (1/4)

巡る。82は内面にシボリ痕が残る。

8号竪穴住居跡 (第46図、図版22)

調査区南西隅に位置し、7号溝に切られる。平面形態は長方形と思われるが、大部分が調査区外にあるため、詳細は不明である。埋土は下層に黒褐色土が堆積していた。

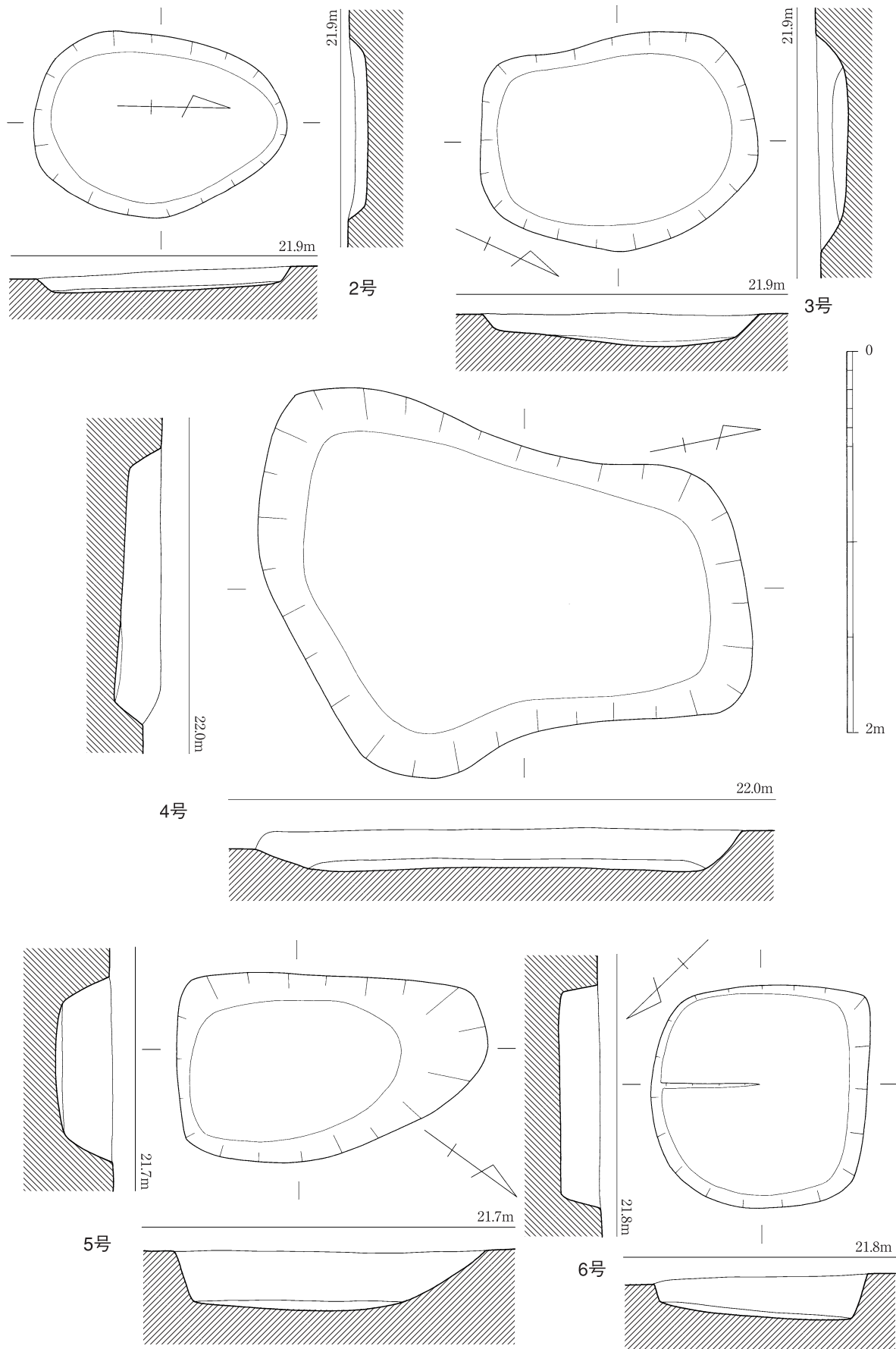
出土土器 (第47・48図)

弥生土器 (1~12・14~27) 1~6は「く」字形の甕で口縁端部を丸く収める。5は口縁部内面に円形の工具痕が残る。6は胴部上位に三角突帯を貼り付ける。屈曲部外面はナデによって窪む。7~9は「く」字形の甕で口縁端部が強いナデによって窪む。7・8は口縁端部上端が少し立ち上がる。9は屈曲が強く、口縁部上面にハケ調整を行う。10~12は「く」字形に屈曲し口縁端部が丸く肥厚する。外面はハケ調整を行うが、10は外面が摩滅しているため確認できない。14は甕の胴部下半で、三角突帯を貼り付ける。15~18は甕の底部で、外面はハケ調整を行う。16はやや上げ底となる。19~21は丹塗磨研の甕である。19は口縁端部は丸みを帯び、胴部上位に断面「M」字形突帯を貼り付ける。口縁部上面には暗文を施す。内面にも一部、丹が付着している。20は口縁端部は強いナデにより窪み、胴部上位に断面「M」字形突帯を貼り付ける。口縁部上面、及び胴部外面に暗文を施す。内面にも一部、丹が付着している。22は蓋で天井部は器壁が薄く、内外面ハケ調整を行う。23・24は精製の蓋で、穿孔を行う。23は外面に暗文を施す。24は端部がナデによって小さく窪む。外面にハケ調整の痕跡が残る。25・26は器台である。端部は強いナデによって窪み、外面はハケ調整、内面はオサエを施す。27は丹塗磨研高杯で、口縁部上面に暗文を施す。杯部外面はハケ調整の痕跡が残り、内面は横方向のミガキ調整を行う。

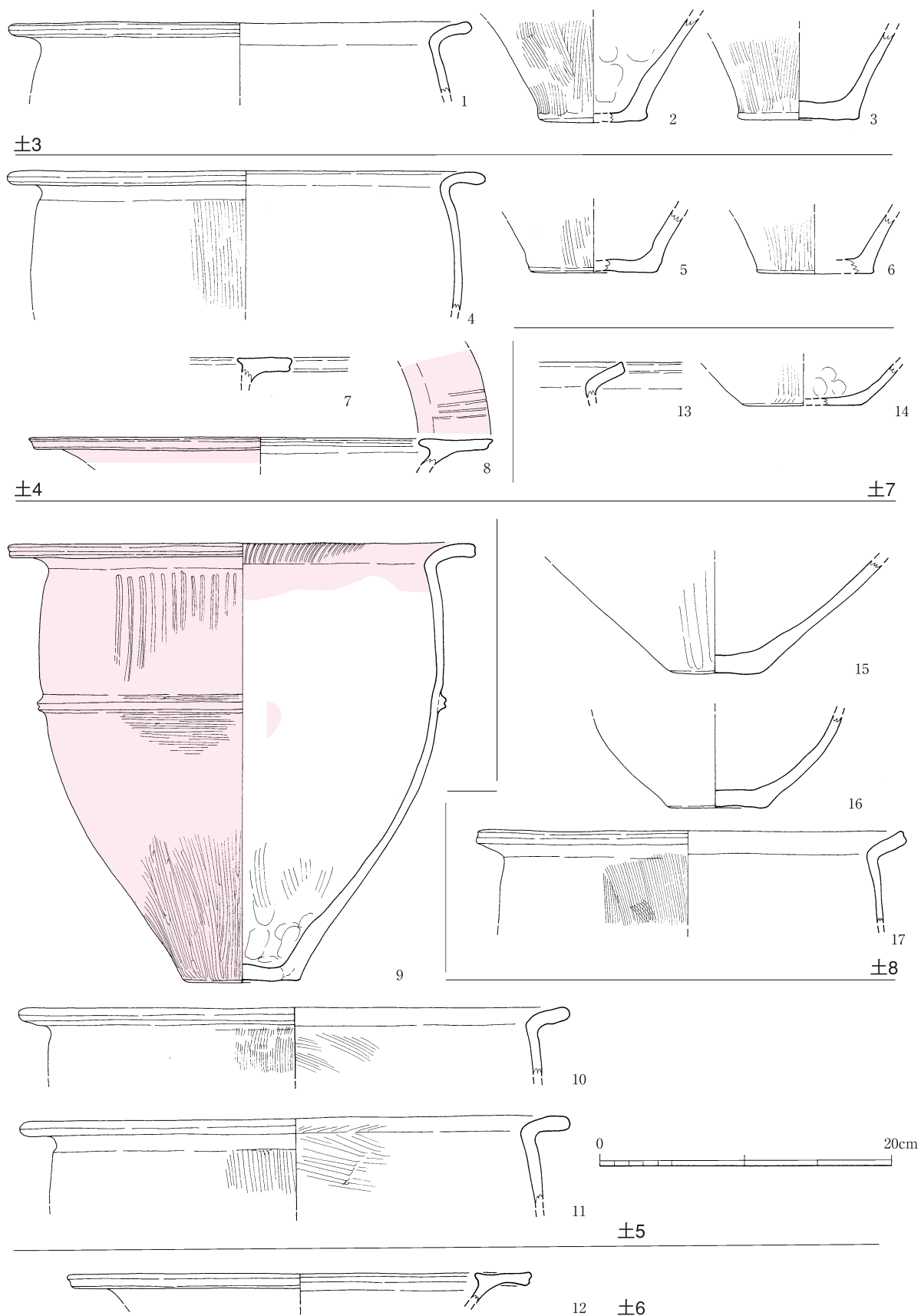
土師器 (13) 13は混入品と考えられる。甕で外面ハケ調整、内面はユビオサエを行う。

9号竪穴住居跡 (第46図、図版16)

調査区南東隅に位置する。平面形態は長方形と思われるが、大部分が調査区外にあるため、詳細は不明である。本住居跡からは図示しうる土器は出土していない。



第49图 2~6号土坑实测图 (1/30)



第50图 3~8号土坑出土土器实测图 (1/4)

第2項 土坑

2号土坑（第49図、図版16）

調査区北側に位置し、10号土坑を切る。平面形態は楕円形で長軸134cm、短軸96cmである。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は暗灰褐色細砂。

本土坑からは図示しうる土器は出土していない。

3号土坑（第49図、図版17）

調査区中央に位置し、6号竪穴住居跡を切る。平面形態は楕円形で長軸145cm、短軸114cmである。床面は緩やかに凹み壁面は外傾して立ち上がる。床面北寄り部分は掘りすぎてしまった。埋土は暗灰褐色シルト。

出土土器（第50図）

弥生土器（1～3） 1は「く」字形の甕で口縁端部は丸く肥厚する。内外面ナデ調整で仕上げる。2・3は甕の底部で薄い平底を呈する。外面はハケ調整を行う。

4号土坑（第49図、図版17）

調査区中央西寄りに位置する。平面形態は不整ながらも楕円形に近く、長軸255cm、短軸200cmと大型である。床面は東側が深くなる。立ち上がりは緩く外傾する。埋土は暗褐色シルト。

出土土器（第50図）

弥生土器（4～8） 4は「く」字形の甕で口縁端部は丸く肥厚する。外面はハケ調整を行う。5・6は甕の底部で薄い平底を呈する。外面はハケ調整を行う。7・8は高杯で、口縁端部は強いナデにより窪む。8は丹塗磨研を行い、口縁部上面に暗文を施す。

5号土坑（第49図、図版17）

調査区東際に位置し12号土坑を切る。平面形態は楕円形だが、南東側と南西側の壁面は直線的である。長軸165cm、短軸100cmで、床面は平坦である。壁面は西側が非常に緩く立ち上がる。埋土は褐色シルト。

出土土器（第50図）

弥生土器（9～11） 9は丹塗磨研の甕で口縁部はやや外反ぎみとなり、端部は強いナデにより窪む。胴部中位に「M」字形突帯を貼り付ける。口縁内面と胴部上位外面に暗文を施す。10・11は「く」字形の甕で端部は丸く収める。内外面ハケ調整を行うが、11の内面のハケは粗い。11の屈曲部外面には強いナデを施す。

6号土坑（第49図、図版18）

調査区中央東寄り、5号土坑の南西1.5mに位置する。平面形態は隅丸方形で、一辺115cmである。床面は南西側に傾き、壁面は垂直気味に立ち上がる。床面は一部掘りすぎ段状になってしまった。埋土は暗褐色シルト。

出土土器（第50図）

弥生土器（12） 高杯で口縁端部は強いナデにより窪む。

7号土坑（第51図、図版18）

調査区南寄りに位置する。平面形態は楕円形で、長軸120cm、短軸75cmである。床面は平坦で、壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。

本土坑からは図示しうる土器は出土していない。

8号土坑（第51図、図版18）

調査区南寄りに位置する。平面形態は不整形で北側が不自然に張り出す。二つの土坑が切り合っている可能性も考えられる。大きさは東西軸145cm、南北軸150cmで、床面は北側に張り出す部分が浅く段状となる。深い部分では西側に若干傾く格好となる。壁面は南壁が緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色シルト。

出土土器（第50図）

弥生土器（15～17） 15・16は壺の底部で、15は外面に単位の大きなミガキ調整を行う。16の器面は摩滅している。17は「く」字形の甕である。口縁端部は強いナデにより窪み、内面もわずかに窪む。

9号土坑（第51図、図版19）

調査区中央に位置し、12号土坑を切り、7号溝に切られる。平面形態は不整ながらも長方形に近く、長軸215cm、短軸165cm、深さも遺構確認面より50cm以上あり大型である。床面は平坦で壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。埋土は暗褐色シルト。

出土土器（第53図）

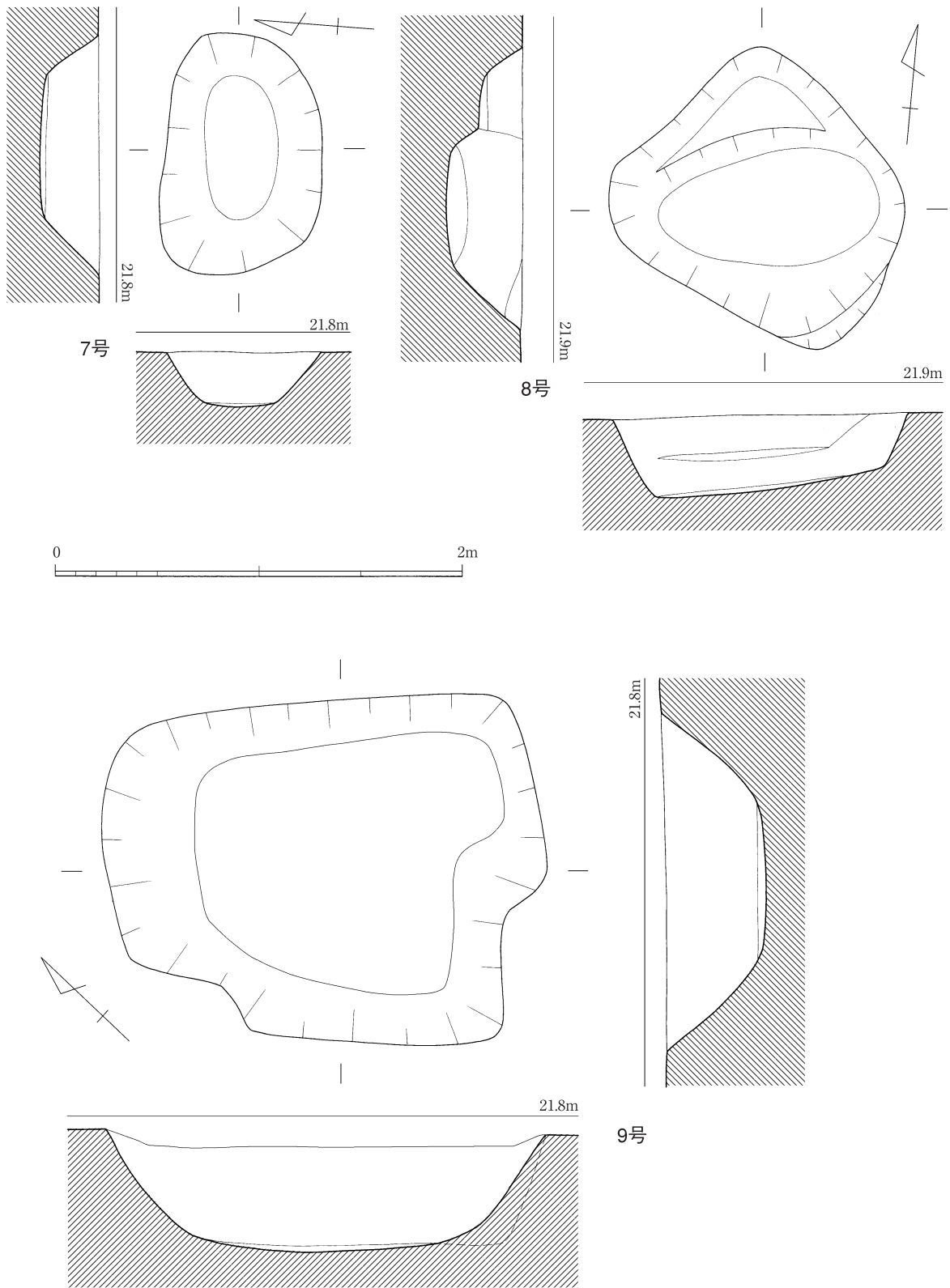
弥生土器（1～8） 1・2は「く」字形の甕で口縁部は丸く収める。1は内面に工具の圧痕が見られる。3は丹塗磨研の甕で、胴部上位に断面「M」字形突帯を貼り付ける。口縁端部に刻目を施し、口縁部上面に暗文を施す。4～6は甕の底部で薄い平底を呈する。7は大型の丹塗磨研の器台で、鏝部に暗文を施す。8は丹塗磨研高杯の脚部である。

10号土坑（第52図、図版19）

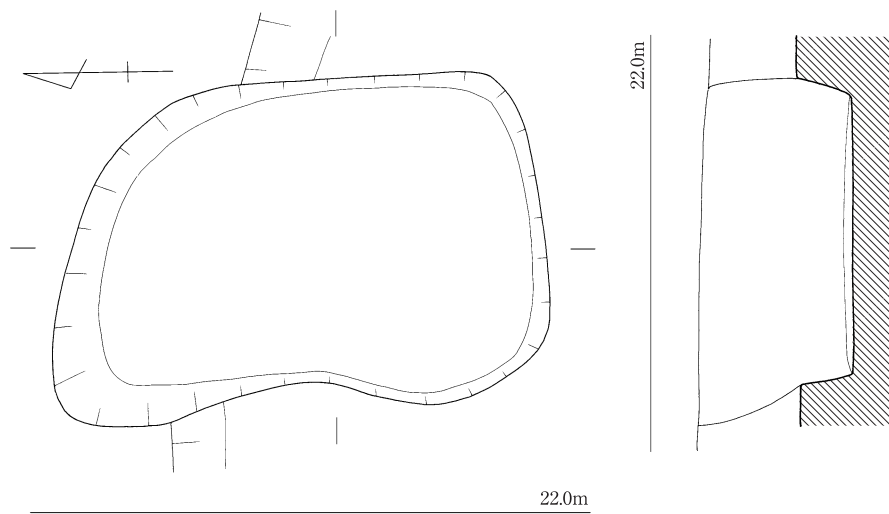
調査区北寄りに位置し、2号土坑に切られる。平面形態はいびつな楕円形を呈し、長軸190cm、短軸120cmである。6号住居跡と切り合うが、南側のプランは2号土坑の平面プランに惑わされたこと、また6号住居跡との埋土の識別が困難であったこともあり、実際には6号住居跡完掘後に住居跡床面にてプランを確定することができた。よって6号住居跡との切り合い関係は不明である。床面は平坦で壁面は外傾して立ち上がる。埋土は褐色シルト。

出土土器（第53図）

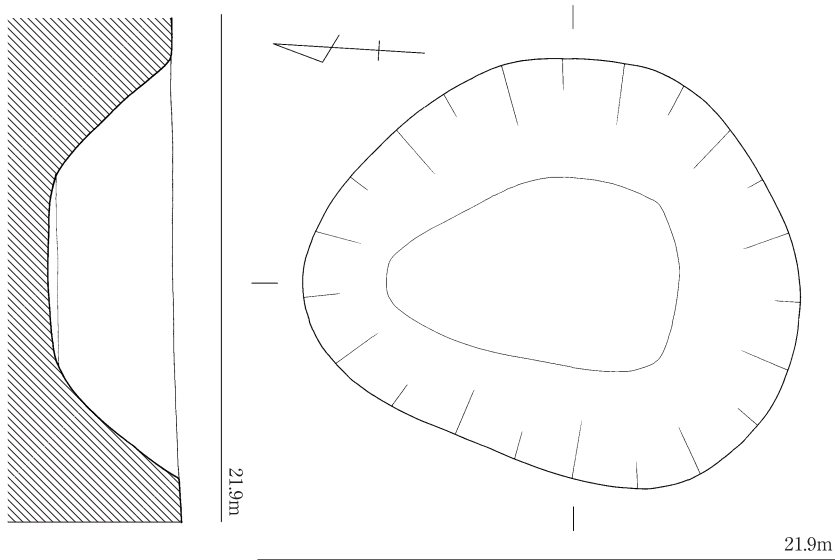
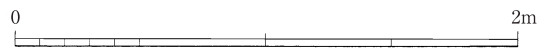
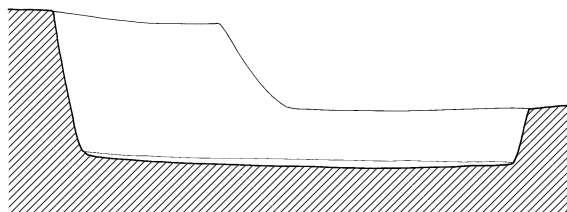
弥生土器（9～11） 9は「く」字形の甕で口縁端部は方形状に収める。10は甕の底部で薄い平



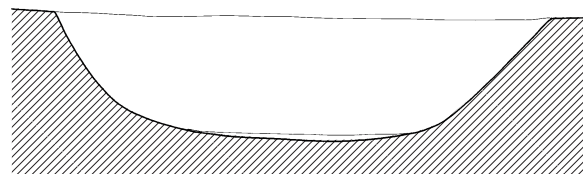
第51图 7~9号土坑实测图 (1/30)



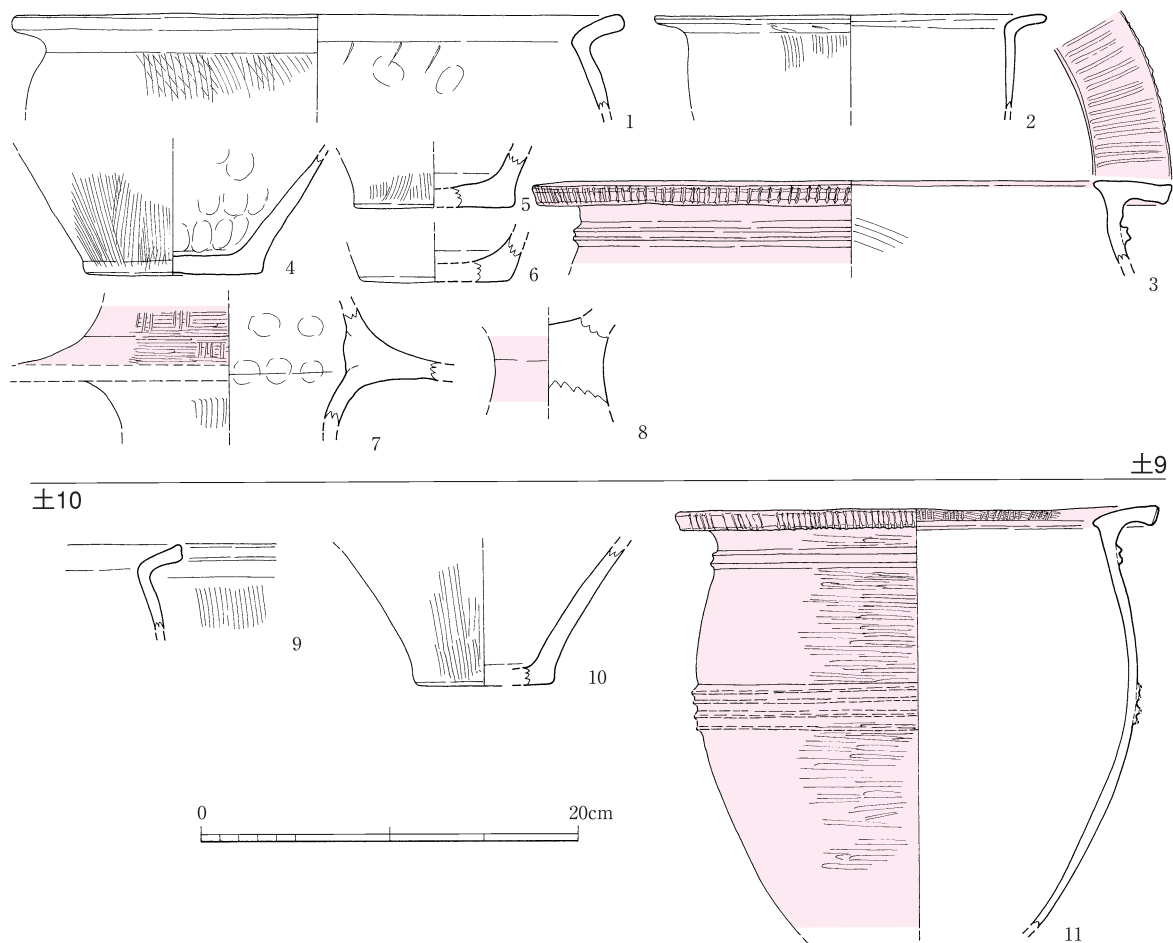
10号



11号



第52图 10・11号土坑实测图 (1/30)



第53図 9・10号土坑出土土器実測図 (1/4)

底を呈する。11は鋤先状口縁を呈する丹塗磨研の甕で、端部は肥厚し刻目を施す。口縁部上面には暗文を施す。胴部最大径の箇所断面「M」字形突帯を2条貼り付ける。

11号土坑 (第52図、図版19)

調査区南に位置し平面形態はいびつな円形を呈する。径は166cm~198cm、床面はほぼ平坦で隅丸三角形に近い形状を呈する。壁面は緩やかに立ち上がる。埋土は暗褐色シルト。

出土土器 (第55図)

弥生土器 (1~17) 1~5は「く」字形の甕で口縁端部は丸く収める。1は内面の稜部分が若干突出ぎみとなる。口縁部内面は横方向のハケ調整を行う。6~9は「く」字形の甕で口縁端部がナデにより窪む。6は屈曲部が丸みを帯び、口縁内面もナデによってわずかに窪む。8は丹塗磨研を施す。10は甕棺の口縁部片で、直下に三角突帯を貼り付ける。口縁端部は強いナデにより窪む。11は丹塗磨研の甕で断面「M」字形突帯を貼り付ける。12は口縁端部に浅い刻目、口縁部上面に暗文を施す。13・14は壺の底部で薄い平底を呈する。14は外面にミガキ調整を行う。15は器台で端部は強いナデにより窪む。外面は縦方向のハケ調整、内面は端部に近い箇所では横方向のハケ調整、筒部はユビオサエを行う。16・17は丹塗磨研高杯である。16は脚部で外面にミガキ

の単位が確認できる。

12号土坑（第54図、図版20）

調査区東寄りに位置し、5号土坑、9号土坑、7号溝に切られる。平面形態はいびつな楕円形で長軸240cm程、短軸165cmと大型である。床面は浅く凹み、壁面は北～東壁にかけて緩やかに立ち上がる。埋土は褐色シルト。

出土土器（第55図）

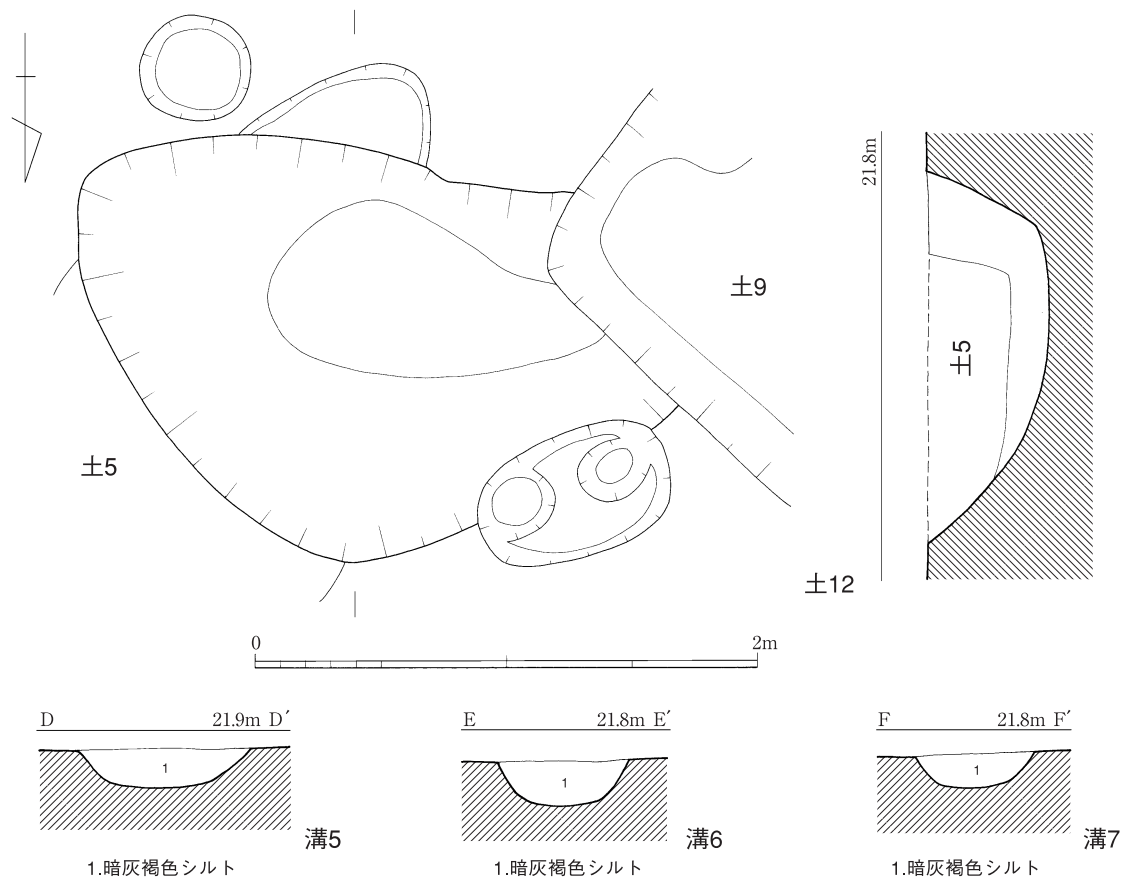
弥生土器（18～23） 18は壺の頸胴部界の部分で、三角突帯を貼り付ける。19は甕の口縁部で端部は丸く収める。20は丹塗磨研の甕で、口縁部は長く伸び端部に刻目を施す。口縁部上面には暗文を施す。21～23は甕の底部で薄い平底を呈する。外面はハケ調整を行う。

第3項 溝

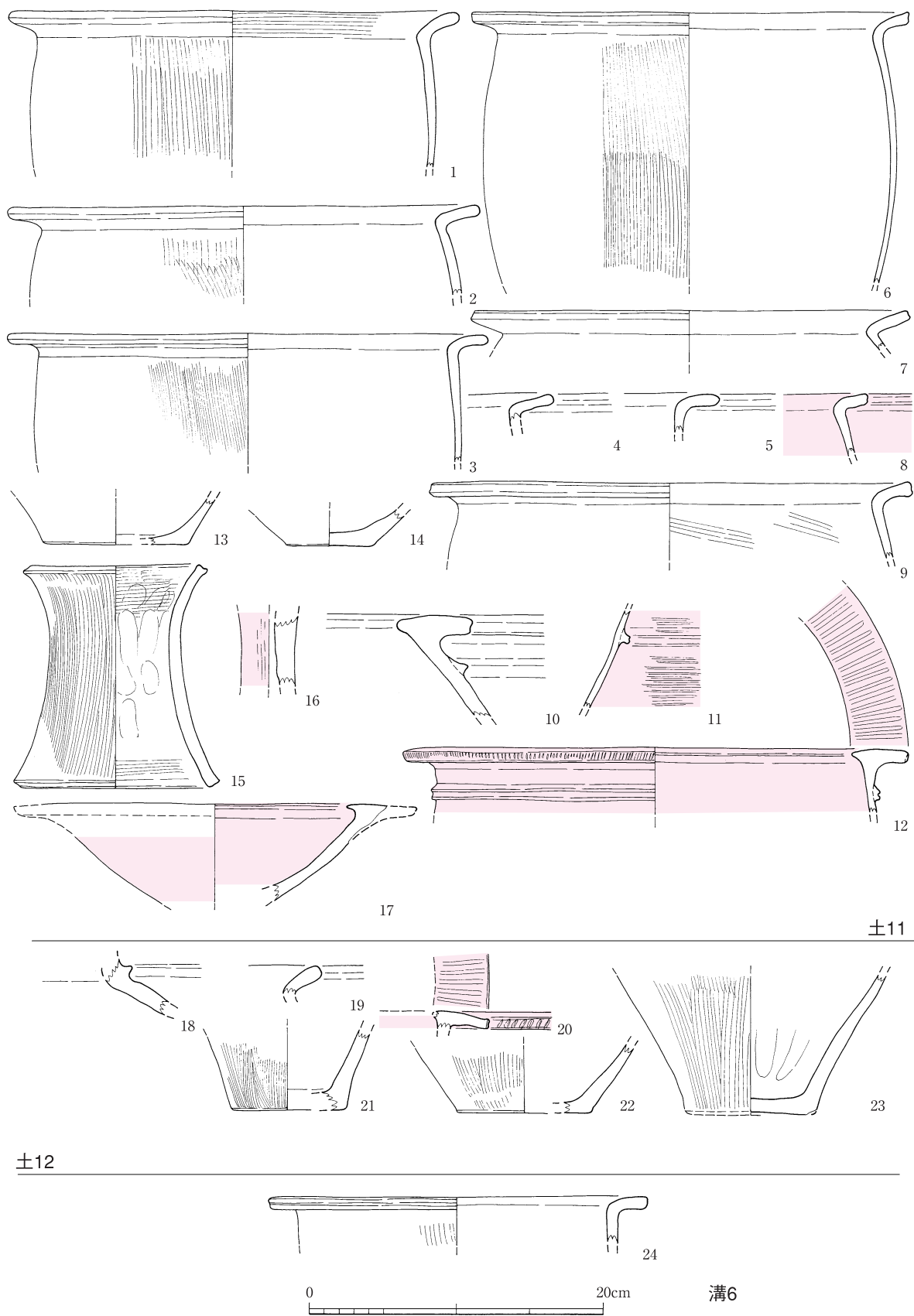
5号溝（第54図、図版20）

調査区北西隅に位置し、北東-南西方向に延びる。幅は70cm程で断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は暗灰褐色シルトである。本溝からは図示しうる土器は出土していない。

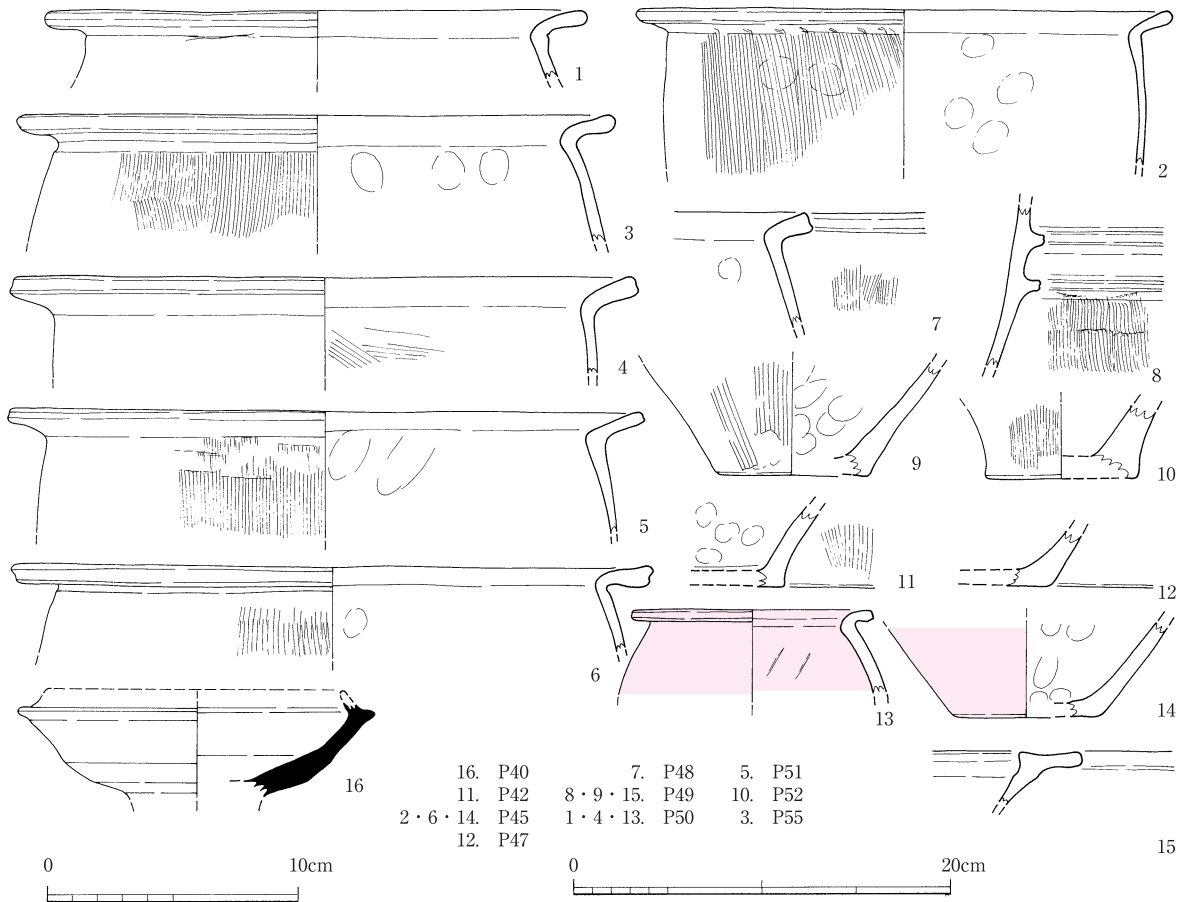
6号溝（第54図、図版20）



第54図 12号土坑、5～7号溝実測図（1/30）



第55图 11·12号土坑、6号沟出土土器实测图 (1/4)



第56図 ピット出土土器実測図 (16は1/3、他は1/4)

調査区北西隅、5号溝の東側に位置し、6号住居跡を切る。5号溝と平行に北東-南西方向に延び、その間隔は心々で2.5~3.2mである。幅は50~60cm程で断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は暗灰褐色シルトである。

出土土器 (第55図)

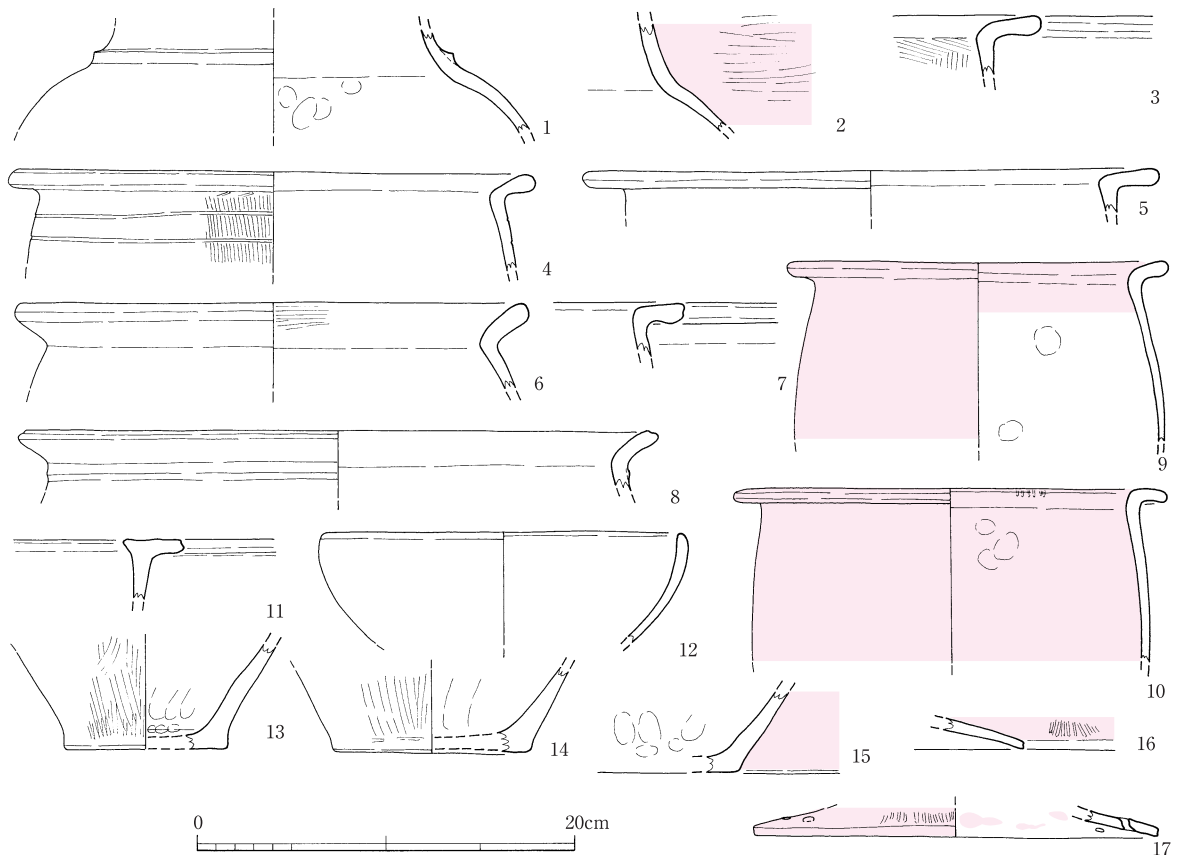
弥生土器 (24) 「く」字形の甕で、口縁端部はナデにより窪む。外面はハケ調整を行う。

7号溝 (第54図、図版20)

調査区南寄りに位置する。8号住居跡、9号土坑、12号土坑を切り、北東-南西方向に延びる。7号土坑の東側で向きが若干変わっている。断面形態は浅い「U」字状を呈する。埋土は暗灰褐色シルトである。本溝からは図示しうる土器は出土していない。

第4項 ピット出土土器 (第56図)

弥生土器 (1~15) 1~3は「く」字形の甕で口縁端部を丸く収める。1は屈曲部外面に粘土紐の接合痕が残る。2は端部が若干肥厚する。口縁部内面と外面は明黄褐色なのに対し、胴部内面は黒褐色を呈する。焼成の際に内面に炭素が多く吸着したためと思われる。4~7は「く」字形の甕で口縁端部がナデにより窪む。8は甕の胴部破片で2条の突帯を貼り付ける。突帯上は強

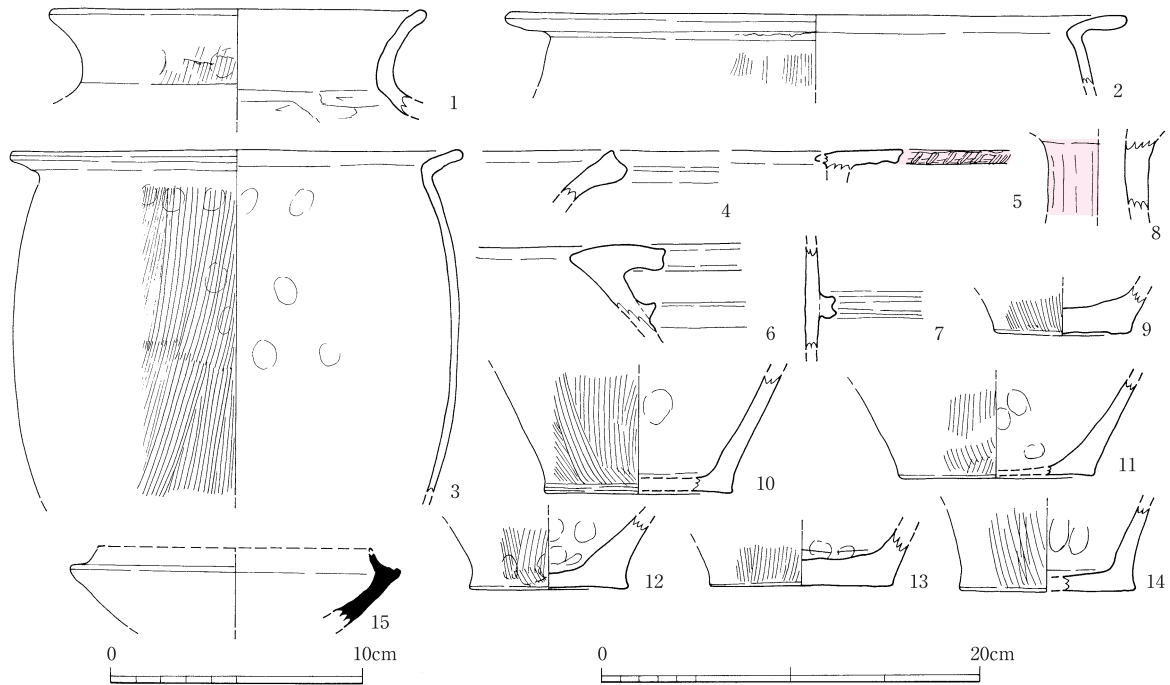


第57図 第2遺構面出土土器実測図 (1/4)

いナデにより窪む。9～11は甕の底部である。11は端部がやや外側に張り出す。12は形態から壺の底部と思われるが被熱による赤変が著しい。13・14は丹塗磨研土器で、13は口縁部が短く屈曲する鉢である。15は鋤先状口縁の高杯で口縁端部は方形状に収める。須恵器(16) 脚部を欠損するが、割れ口の状況から高杯と思われる。

第5項 第2遺構面出土の土器(第57図)

弥生土器(1～17) 1は壺で、頸胴部界に三角突帯を貼り付ける。器面は摩滅している。2は丹塗磨研壺の頸部から胴部にかけてである。3～6は「く」字形の甕で端部は丸く収める。4は端部が肥厚し、胴部上位に2条の沈線を巡らす。外面はハケ調整を行い、屈曲部に工具の圧痕が残る。7は強く屈曲する甕で、口縁端部はナデによって窪む。8は「く」字形に屈曲する甕で、屈曲部外面に薄く粘土を貼り付ける。口縁端部はナデによりスジがつく。9・10は丹塗磨研の甕で、「く」字形に屈曲し口縁端部は丸く収める。10は内外全面に丹塗磨研が見られるのに対し、9は内面胴部中位以下は丹を施さない。11は鋤先状口縁の甕である。口縁端部はナデにより窪む。12は鉢で口縁部はやや内湾する。器面は摩滅している。13・14は甕の底部で外面はハケ調整、内面はユビオサエやナデ調整を行う。15は丹塗磨研の甕の底部で内面はユビオサエ。16・17は丹塗磨研の蓋で、外面に縦方向のミガキ調整を行う。17は確認できる範囲で、5cm間隔の2箇所



第58図 包含層出土土器実測図 (15は1/3、他は1/4)

孔を行っている。

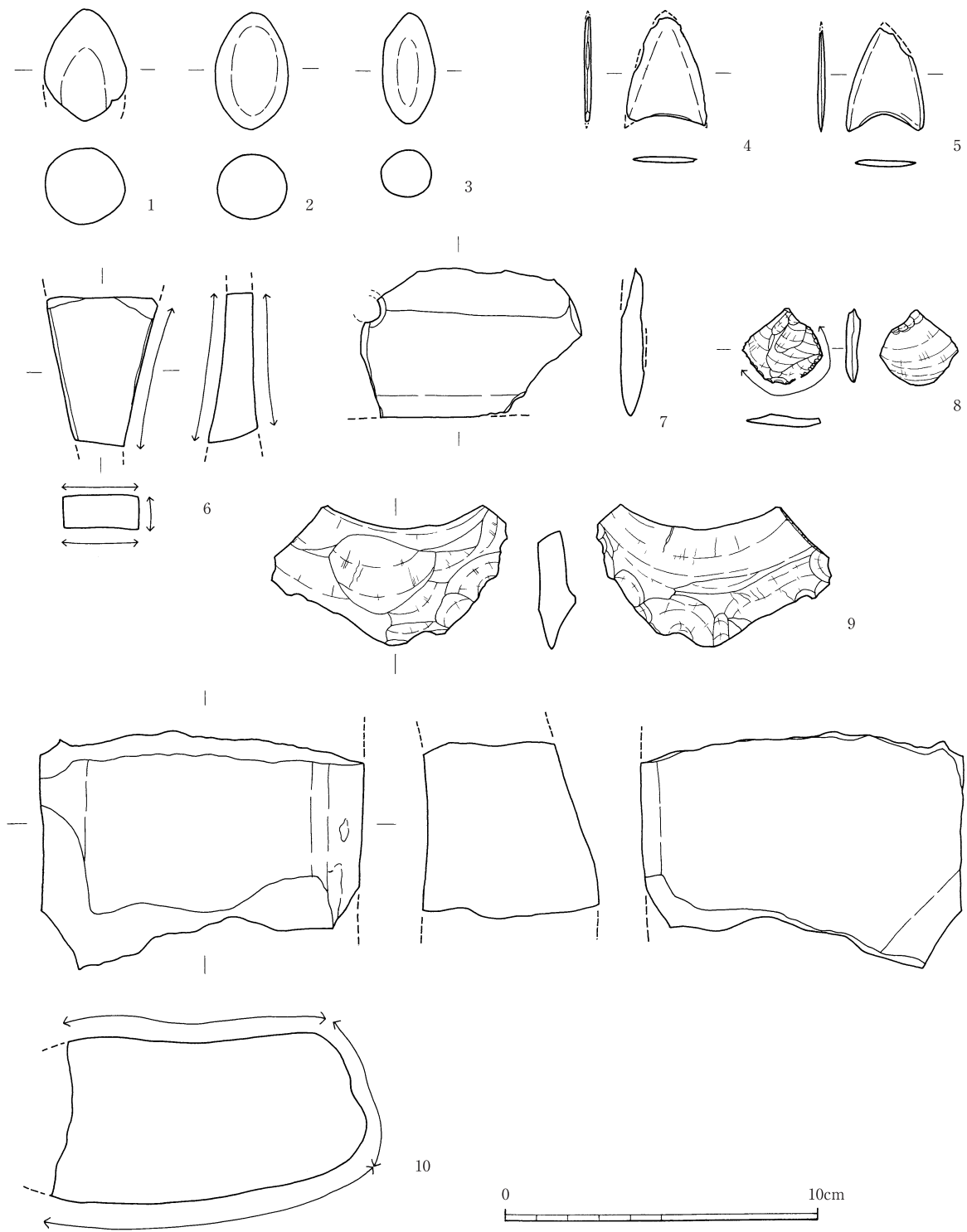
第4節 包含層出土土器、その他土製品、石器

第1項 包含層出土土器 (第58図)

弥生土器 (2~14) 2・3は「く」字形の甕で口縁端部を丸く収め、胴部外面はハケ調整を行う。2は屈曲部外面に薄い粘土の貼り付けを行う。4は甕の口縁部で端部が肥厚し、ナデによって大きく窪む。5は丹塗磨研の甕の口縁部で、欠損しているが鋤先状を呈する。端部に刻目を施

表1 船越高原A遺跡6次調査出土土製品・石器一覧表

挿図番号	種類	出土地点	長・径 (cm)	短・径 (cm)	厚・高 (cm)	重量 (g)	石材	備考
第59図-1	投弾	住6内埋土	(3.6)	2.5	—	(15.2)	—	
第59図-2	投弾	住6内埋土	3.7	2.2	—	14.8	—	
第59図-3	投弾	住3内埋土	3.6	1.6	—	7.8	—	
第59図-4	磨製石鎌	土9内埋土	(3.5)	2.6	0.2	(3.5)	頁岩	
第59図-5	磨製石鎌	住7内埋土	(3.3)	2.5	0.2	(2.6)	頁岩	赤みを帯びる。
第59図-6	砥石	土9内埋土	(4.0)	(3.5)	1.0	(29.9)	片岩	砥面は3面。
第59図-7	石包丁	第1遺構面	(7.1)	(4.8)	0.8	(36.6)	砂岩	穿孔部分あり。両刃。
第59図-8	剥片	住7内埋土	2.4	2.5	0.3	3.3	黒曜石	縁辺部に微細剥離あり。
第59図-9	剥片	住6内埋土	7.5	3.7	1.1	34.3	安山石	
第59図-10	石皿	第2遺構面	(10.3)	(7.1)	5.3	(673)	砂岩	側面も使用。



第59図 出土土製品、石器実測図 (1/2)

す。6は甕棺の口縁部で、口縁部の下に三角突帯を貼り付ける。口縁端部はナデにより少し窪む。7は甕の胴部で断面「M」字形突帯を貼り付ける。8は丹塗磨研高杯の脚部で、外面は工具によるナデを行う。9～14は甕の底部で外面にハケ調整を行う。9の底面は少し窪むが、他は薄い平

底を呈する。12の端部はやや外に張り出す。

土師器 (1) 甕で器面は摩滅しているが口縁部外面にハケ調整、胴部内面にケズリ調整の痕跡が残る。

須恵器 (15) 杯身で口縁端部は欠損している。

第2項 土製品・石器 (図版24、第59図)

土製品 (1～3) 投弾で平面形態は長楕円形、断面形態は円形である。ナデによって仕上げる。

石器 (4～10) 4・5は凹基式の磨製石鎌で中央部分は平らに仕上げる。6は小型の砥石で、欠損しているものの砥面は3面は確認できる。7は石包丁である。紐孔がかろうじて残存しており、復元すると8mm程の径となる。8は黒曜石の剥片で、縁辺部に微細剥離が確認できる。9は安山岩の剥片で、大きく打ち欠いた痕跡が残る。10は石皿の破片か。凹み部分以外に裏面及び側面も使用している。11は4号竪穴住居跡から出土した軽石で、大きさは11cm×9.5cm×5.5cmである。

第5節 小結

以上のように第1遺構面では古墳時代や中世、第2遺構面では弥生時代の遺構を確認した。弥生時代の遺構はほとんどすべて弥生時代中期後半～中期終末の所産と思われ、住居跡の平面プランはすべて方形である。中央に炉穴を設けるが、支柱穴は判然としなかった。その他、多数の土坑を確認したが、形態及び規模は様々である。

古墳時代の遺構は6世紀後葉～7世紀初頭と思われる住居跡と土坑からなるが、住居跡はいずれも方形プランの4本柱構造で、床には貼床を施し、北壁にカマドを持つ。土坑は1号の大型土坑が該当する。埋土に炭が多く入っていたが性格は不明である。

中世の遺構としては第1遺構面の溝が該当するが、遺物の量が少量のため詳細な時期を特定するまでには至らない。

第6次調査区では弥生・古墳時代の竪穴住居跡の分布が、調査区の東寄りに偏在しており、以前調査を行ったI区西寄りの状況と同じく、遺跡の居住域の西端にあたることを確認できた。ただ南側についてはまだ延びるようである。



浮羽バイパスと調査区

圖 版



1 調査区遠景
(北から)



2 第1遺構面全景
(北から)



1 第1遺構面全景
(西から)



2 第2遺構面全景
(北から)

1 調査区西壁土層
(東から)



2 1号竪穴住居跡
(南東から)



3 1号竪穴住居跡カマド
(南東から)





1 2号竪穴住居跡
(南東から)



2 2・3号竪穴住居跡
(南から)



3 3号竪穴住居跡カマド
(南東から)



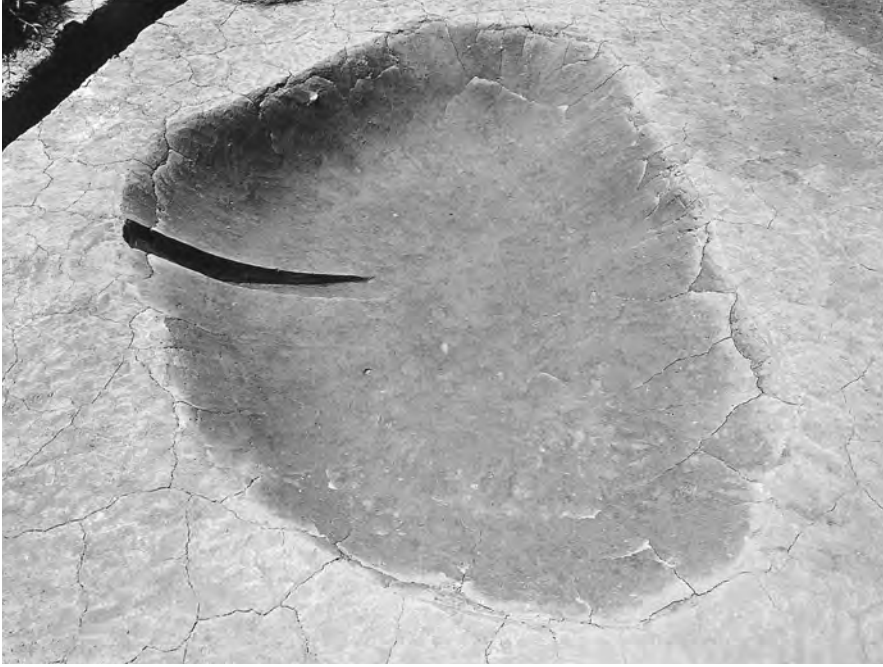
1 4号竪穴住居跡
(南東から)



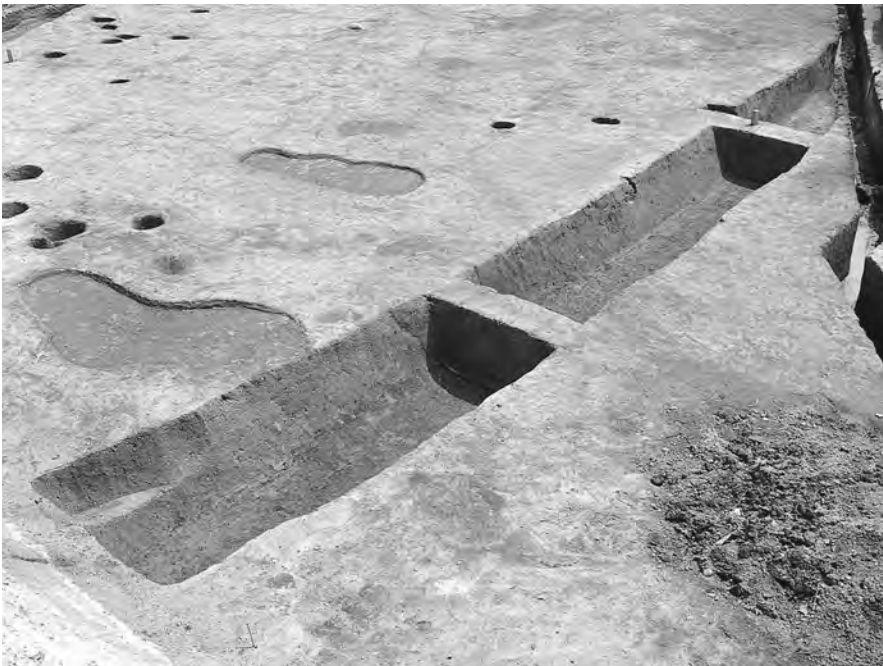
2 4号竪穴住居跡カマド
(南東から)



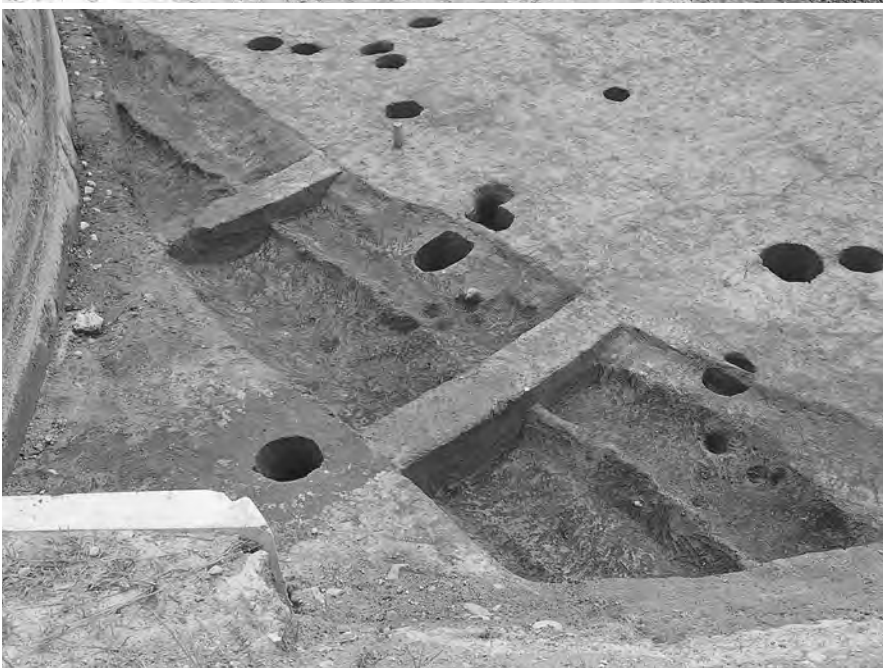
3 5号竪穴住居跡
(南東から)



1 1号土坑（東から）



2 1号溝（北から）



3 2・3号溝（北東から）



1 4号溝（北西から）



2 6号竪穴住居跡（東から）



3 7号竪穴住居跡（東から）



1 8号竪穴住居跡
(南から)



2 9号竪穴住居跡
(南東から)



3 2号土坑 (東から)



1 3号土坑（北東から）



2 4号土坑（西から）



3 5号土坑（南西から）



1 6号土坑（南東から）



2 7号土坑（北から）



3 8号土坑（北から）



1 9号土坑（南東から）



2 10号土坑（南から）



3 11号土坑（西から）



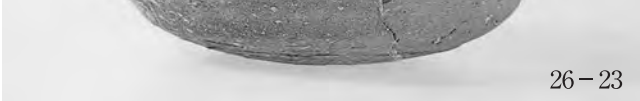
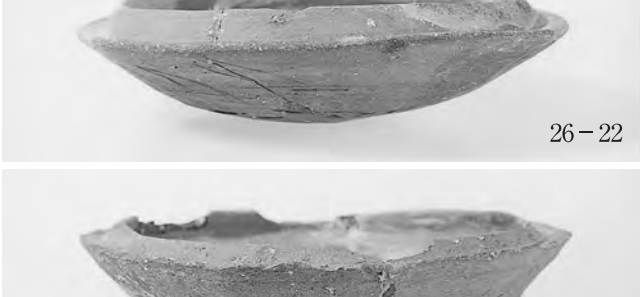
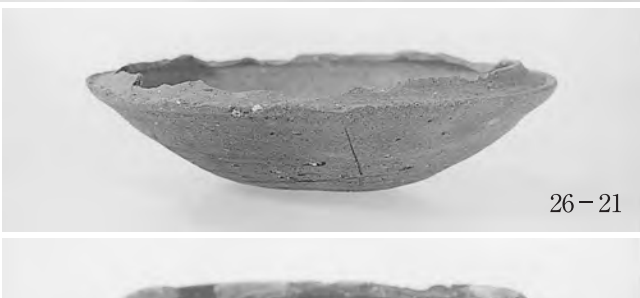
1 12号土坑（北から）



2 5・6号溝（北西から）



3 7号溝（南西から）



1 ~ 4 号竖穴住居跡出土土器



4~7号竖穴住居跡、1号土坑出土土器



41-9



43-39



42-22



42-30



50-9

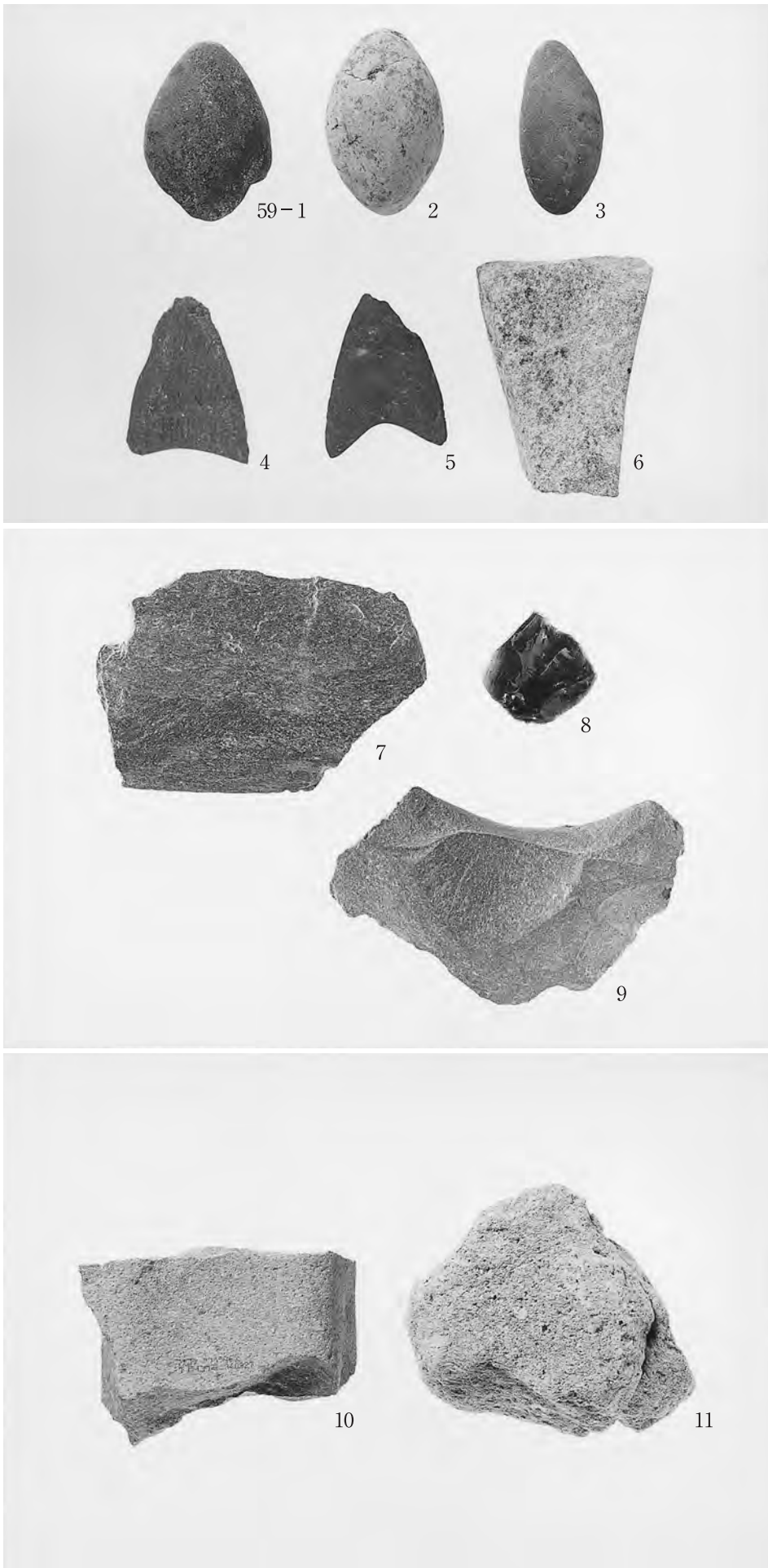


45-79

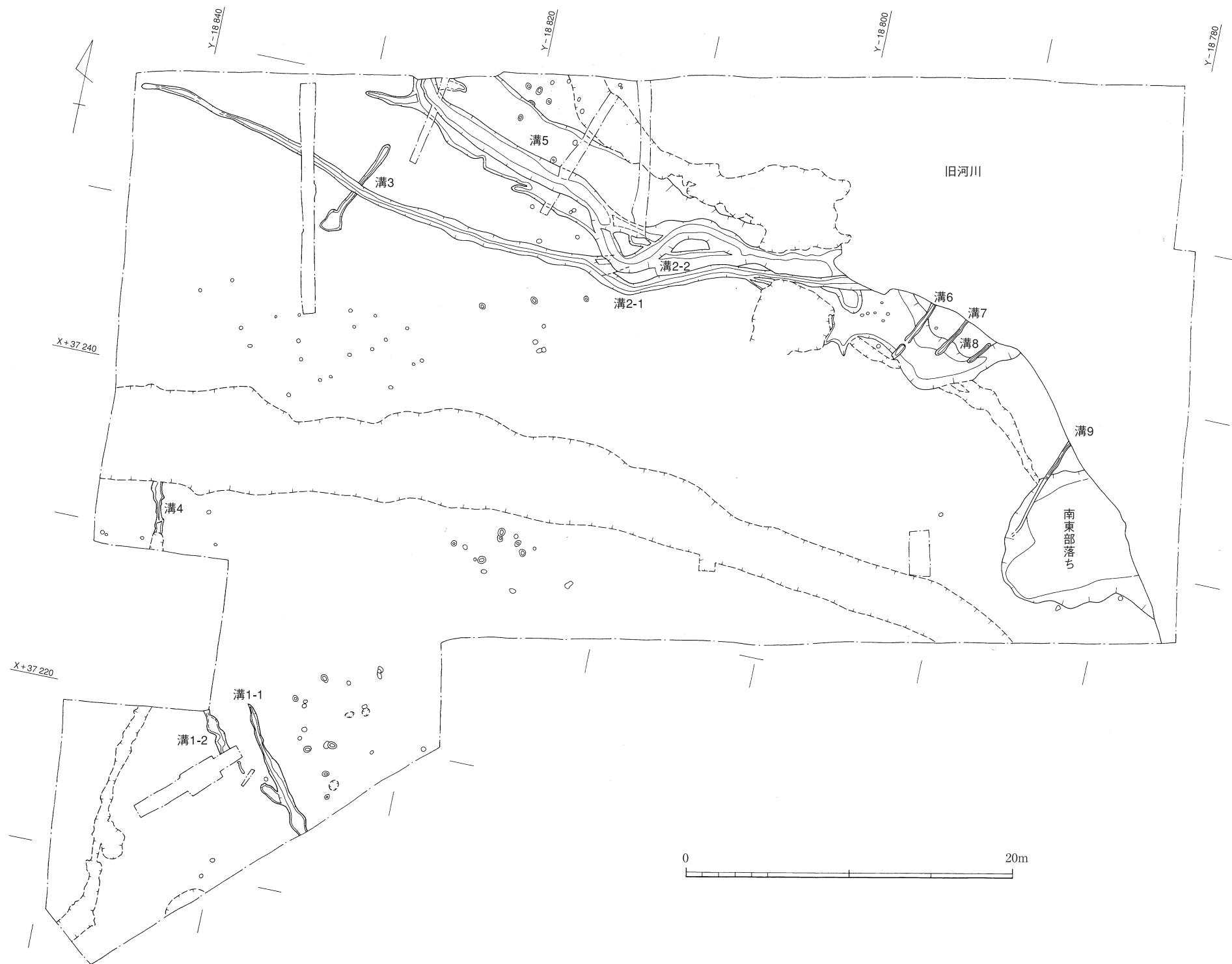


53-11

7号竖穴住居跡、5・10号土坑出土土器



西隈上中川原遺跡



第60図 西隈上中川原遺跡遺構配置図 (1/300)

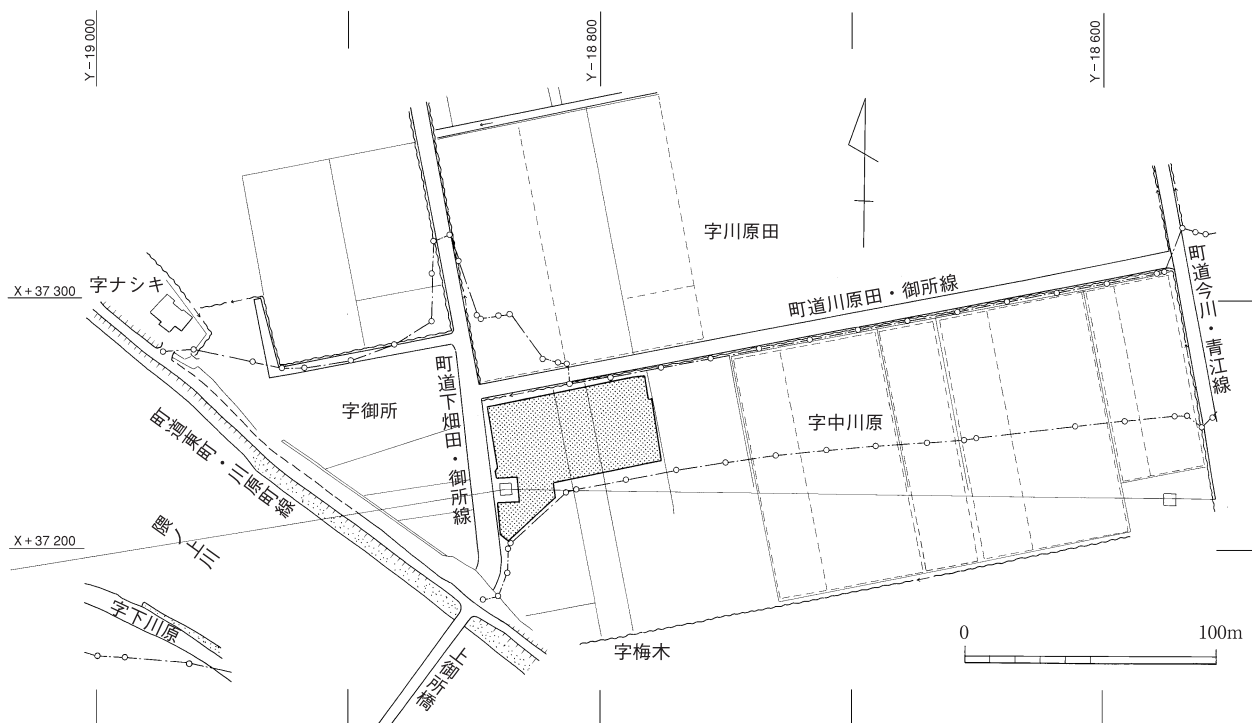
第5章 西隈上中川原遺跡の調査の記録

第1節 遺跡の概要と基本層序

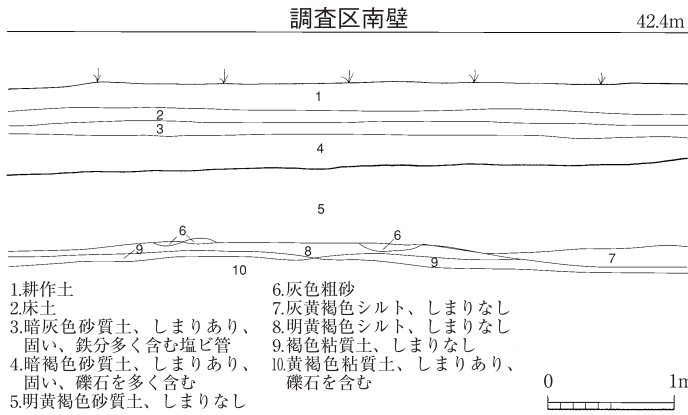
遺跡の概要 西隈上中川原遺跡は先述のように、筑後川と隈上川によって形成された扇状地の端部に位置する。調査区は南北40m×東西65mの長方形の南西部下側に、三角形の外区が取り付く形となる。調査面積は約3,800㎡。調査区西壁沿いの一部は送電線の鉄塔が立つため調査を実施していない。

表土剥ぎの結果、調査区北東部は大部分を旧河川が占めており遺構面が消失していた。また、調査区中央を東西に攪乱の大溝が走る。さらに大溝より北側は遺構面の広い範囲に攪乱を受けた跡があり、遺構の検出に困難を極めた。調査の結果、弥生時代中～後期の流路や落ち込み、古墳時代の溝を検出した。このうち調査区南西部では遺構・遺物ともに残存状態が悪い。1-1・1-2・4号溝は上部が大きく削られ、埋土最下層の粗砂層がわずかに土器の小片を含んで残っていた。南西部の遺構面が削られた理由として河川（隈上川）の氾濫と圃場整備とが考えられる。基本土層では遺構面と3層の間に4層が入るため、遺構面は圃場整備以前の氾濫で削られたと考える。一方で2-1号溝や5号溝・南東部落ちなどは、一部が攪乱や旧河川によって消失するが、残る部分の状態は比較的良好に検出できた。

基本層序 調査区の基本層序は調査地の南西側を流れる隈上川の堆積作用により形成されている。調査区周辺は調査前には水田として利用されており、表土は水田耕作土からなるが厚さは20cm程度、その下に10cmの床土があり、さらに下10cmは暗渠排水用のビニール管を含む3層が堆積する。圃場整備に伴う整地層である。それより下層の堆積土には水田耕作の痕跡は確認できなかった。



第61図 調査区位置図 (1/3000)



第62図 調査区土層実測図 (1/60)

4層は遺構面を覆う土で南に薄く、北にやや厚く堆積する。その下の5層は厚く水平な堆積で、遺構はこの土を掘り込んで構築されていた。さらに下層は6～9層が薄いレンズ状に堆積して10層に至る。

第2節 検出遺構と出土遺物

第1項 溝

1-1号溝 (第63図、図版27)

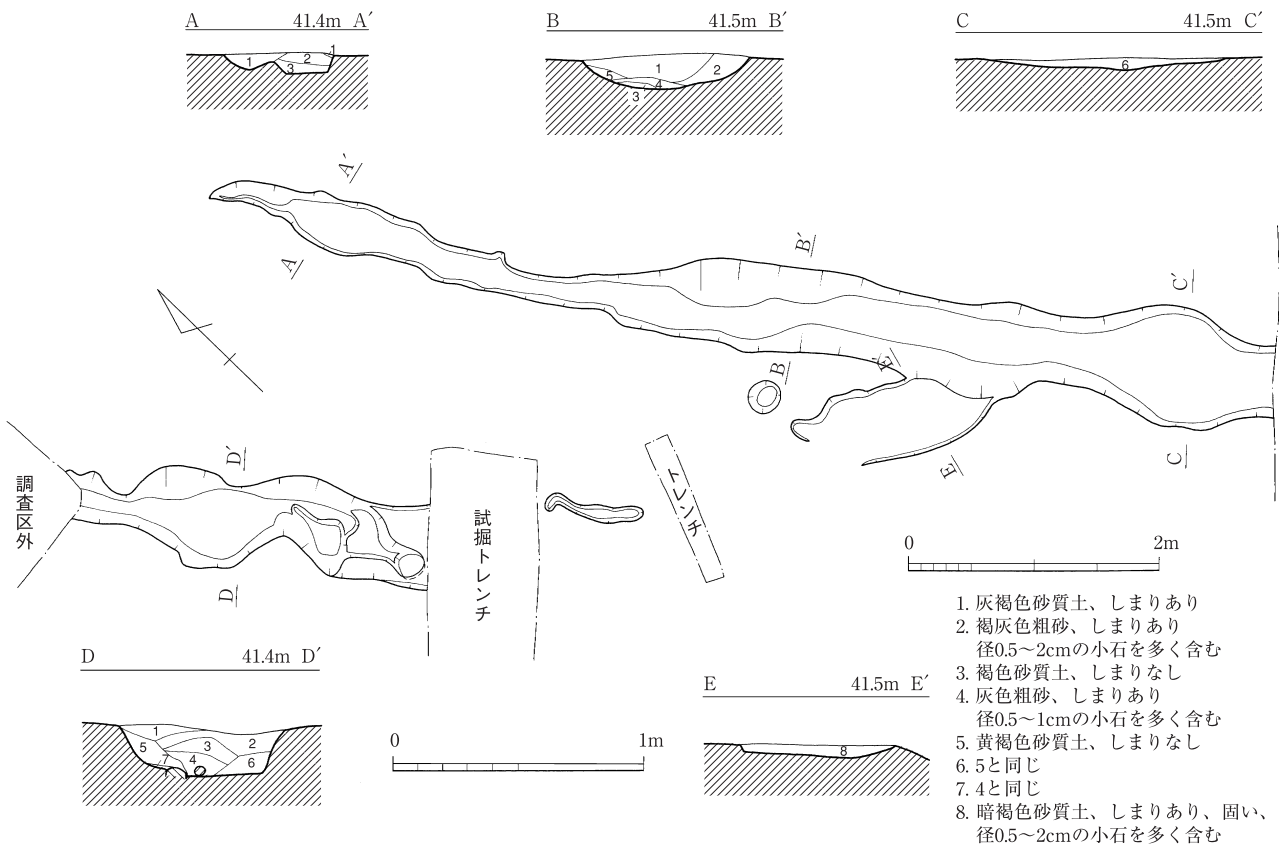
調査区の南西部で検出した。調査区南壁から北西方向に延び、長さ8.6mで消える。幅は最も広いところで80cm、深さは13cm未満と浅い。堆積状況や溝の深さから、溝の上半は失われて、最深部のみが残ったものと考えられる。遺物は埋土から弥生土器もしくは土師器の小片9点が出土したが、いずれも図化できる物ではなかった。

調査区の南西部で検出した。調査区南壁から北西方向に延び、長さ8.6mで消える。幅は最も広いところで80cm、深さは13cm未満と浅い。堆積状況や溝の深さから、溝の上半は失われて、最深部のみが残ったものと考えられる。遺物は埋土から弥生土器もしくは土師器の小片9点が出土したが、いずれも図化できる物ではなかった。

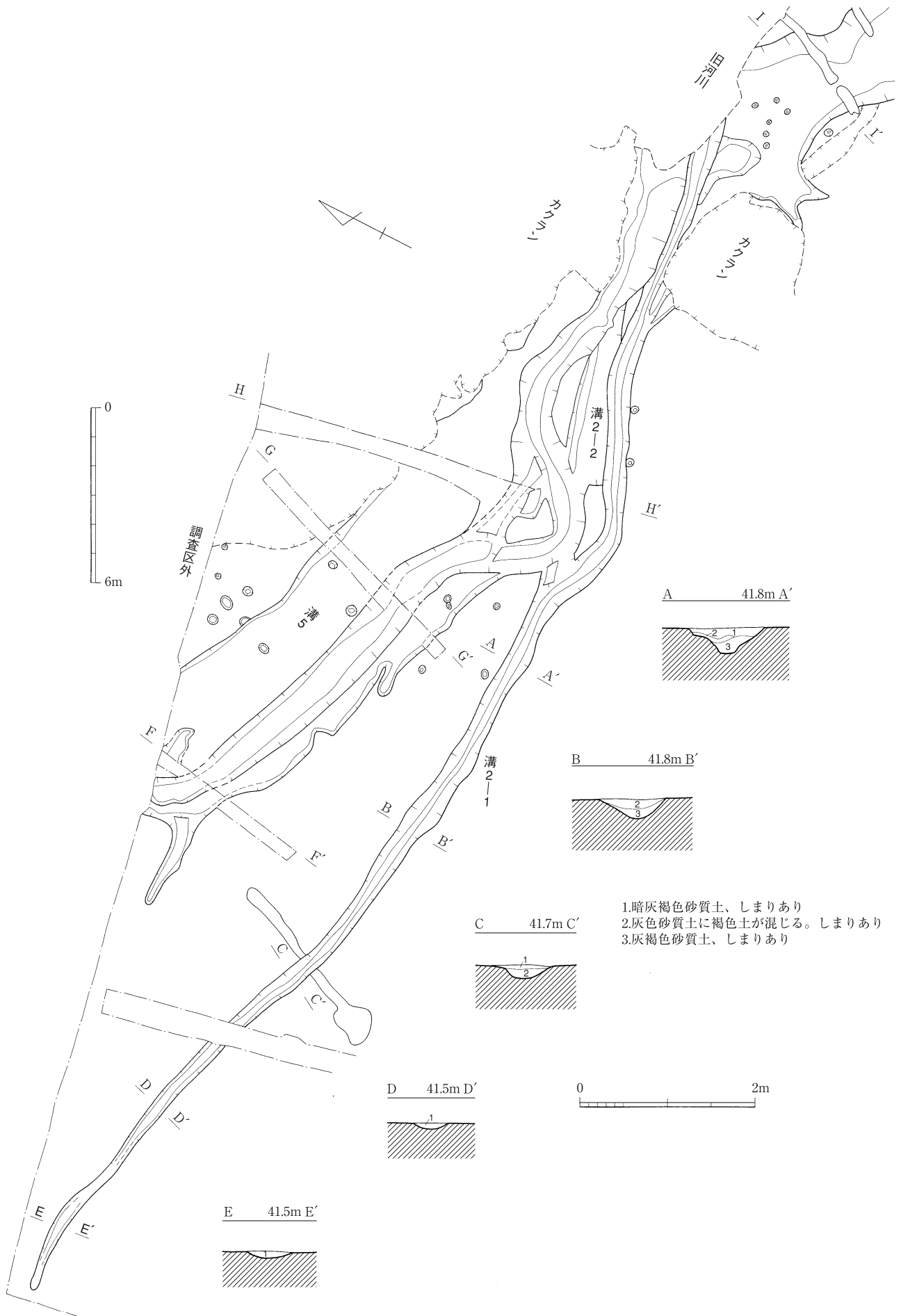
1-2号溝 (第63図、図版27)

調査区南西部で検出した。調査区東壁から南東に向かって延び、1-1号溝にぶつかって消え

- | | |
|-------------------------------|-----------------------|
| 1. 灰色細砂 しまりあり、径0.5~1cmの小石を含む | 4. 褐色砂質土、しまりあり |
| 2. 黄褐色質土、しまりあり | 5. 暗褐色砂質土、しまり固い |
| 3. 褐色灰粗砂、しまりあり、径0.5~2cmの小石を含む | 6. 4に灰色粗砂が混じるしまりあり、固い |



第63図 1-1・1-2号溝実測図 (1/60、土層断面図は1/30)



第64図 2-1・2-2・5号溝実測図 (1/180、土層断面図は1/60)

る。途中試掘トレンチに切られるほか、自然に消失している部分がある。幅は最も広いところで65cm、深さは20cmを測る。1-1号溝と同じく、溝の上半が失われて最深部のみ残ったものと思われる。遺物は埋土から弥生土器もしくは土師器の小片6点が出土しているが、図化に耐える物はなかった。

2-1号溝（第64図、図版27）

調査区北西部から中央部にかけて検出した。東西方向の溝で、西端は調査区外へ延び、東端は旧河川によって失われる。2-2号溝・3号溝・5号溝を切る。調査区中央付近では上半が攪乱で削られるが下半部は残存し、全体の残存長は約47mに及ぶ。幅は残りの良い箇所では85cm、深さは同じく32cmを測る。溝底面は相対的に東から西に向けて下がっている。埋土から弥生土器もしくは土師器の小片が30点近く出土したが、いずれも図化できる物ではない。

2-2号溝（第64図、図版27）

調査区中央部で検出した。5号溝を切り、2-1号溝に切られる。調査当初はその存在を認識できず、5号溝の掘削とともに大半を消失してしまった。土層断面図で幅165cm、深さ35cmが確認できる。遺物は弥生土器もしくは土師器の小片3点が出土したが図化に耐えない。

3号溝（第68図、図版28）

調査区北西部で2-1号溝と直交して検出した。2-1号溝に切られる。全長約7.5m、最大幅20cmで、南端部は不整形に広がっている。深さは概ね10cm以下と浅い。遺物は弥生土器もしくは土師器の小片1点が出土したが図化に耐えない。

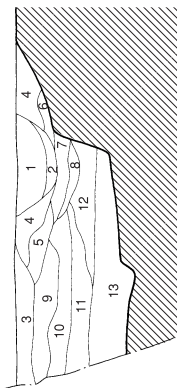
4号溝（第68図、図版28）

調査区西部のほぼ中央で検出した。南北方向に延びる溝で、南・北端がそれぞれ攪乱に切られており、残存するのは約3.2mである。残存状況が良い箇所では幅50cm、深さ13cmを測る。1-1号溝・1-2号溝と同じく溝の上半が失われているものと思われる。遺物は出土していない。

5号溝（第64・65図、図版28・29）

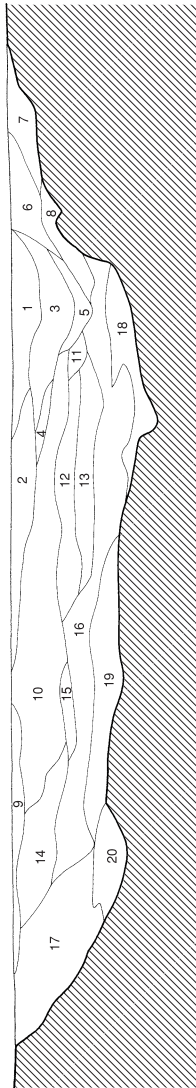
調査区北部の中央で検出した。2-1・2-2・6・7・8号溝に切られる。調査区北壁の中央やや西から緩く弧を描くように東へ延び、長さ約30~40mで旧河川にぶつかって失われている。幅4~5m、深さ50~70cmの大きな溝で、北岸が南岸に比して緩やかに下がっている。この北岸の直上からは古式土師器が状態良く出土した。また5号溝は包含層を掘削して構築されていたが、当初は溝埋土と包含層の差異を認識できず底面を深く掘りすぎてしまった。この包含層の状況を確認するため、5号溝を横断する3本のトレンチを設けて土層の観察を行ったところ、幅約8m、深さ0.8~1mにわたる流路状の堆積が確認された。この流路の埋没後に5号溝が築かれたと考えられる。

F 41.6m F'



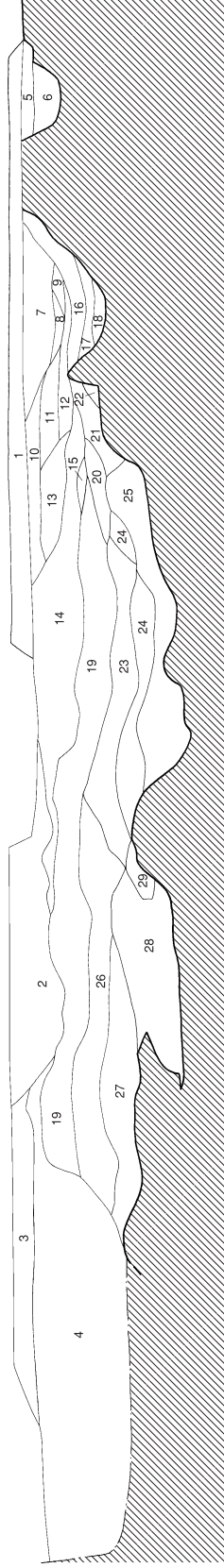
- 1.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 2.灰色粘質土、しまりあり、粘性高い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 3.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 4.褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 5.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 6.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、9よりも粒が細かい、しまりあり、固い
- 7.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりなし、固い、径0.5~1cmの小石を多く含む
- 8.灰色粘質土、しまりあり
- 9.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、7よりも粒が細かい、しまりあり、固い
- 10.明黄褐色粘質土、しまりなし
- 11.黄褐色粘質土、しまりなし
- 12.褐色粘質土、しまりなし
- 13.灰色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりなし

G 41.7m G'



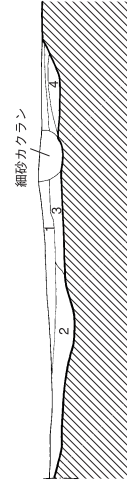
- 1.灰褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 2.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 3.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 4.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 5.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 6.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 7.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 8.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりなし
- 9.明黄褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 10.明黄褐色粘質土、しまりあり、固い、径10cmの小石を多く含む
- 11.明黄褐色粘質土、10よりも粒が細かい、しまりあり、固い
- 12.明黄褐色粘質土、10よりも粘性が高い、しまりあり、固い
- 13.黄褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 14.灰色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 15.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 16.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 17.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 18.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 19.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む
- 20.暗褐色粘質土、しまりあり、粘性高い、明褐色の粒子を含む

H 42.0m H'



- 1.暗青灰色土、しまりなし
- 2.黄褐色土、しまりなし
- 3.黄褐色土、しまりなし
- 4.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 5.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 6.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 7.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 8.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 9.黄褐色土、砂礫がブロック状に混じる
- 10.明黄褐色粘質土、8よりも明い、しまりあり
- 11.明黄褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~2cmの小石を少し含む
- 12.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を含む
- 13.黄褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を含む
- 14.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を含む
- 15.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を含む
- 16.暗褐色粘質土、しまりあり、固い、径0.5~1cmの小石を含む
- 17.暗褐色粘質土、7よりも固い、しまりなし
- 18.暗褐色粘質土、7よりも固い、しまりなし
- 19.暗褐色粘質土、7よりも固い、しまりなし
- 20.暗褐色粘質土、7よりも固い、しまりなし
- 21.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 22.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 23.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 24.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 25.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 26.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 27.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い
- 28.暗褐色粘質土、砂礫がブロック状に混じる、しまりあり、固い

I 41.8m I'



- 1.暗褐色粘質土、しまりなし、柔らかい
- 2.明黄褐色粘質土、しまりなし
- 3.暗褐色粘質土、しまりあり、固い
- 4.3.1に混じる、しまりあり、固い



第65図 5号溝土層断面図 (1/60)

出土土器（第66・67図、図版31）

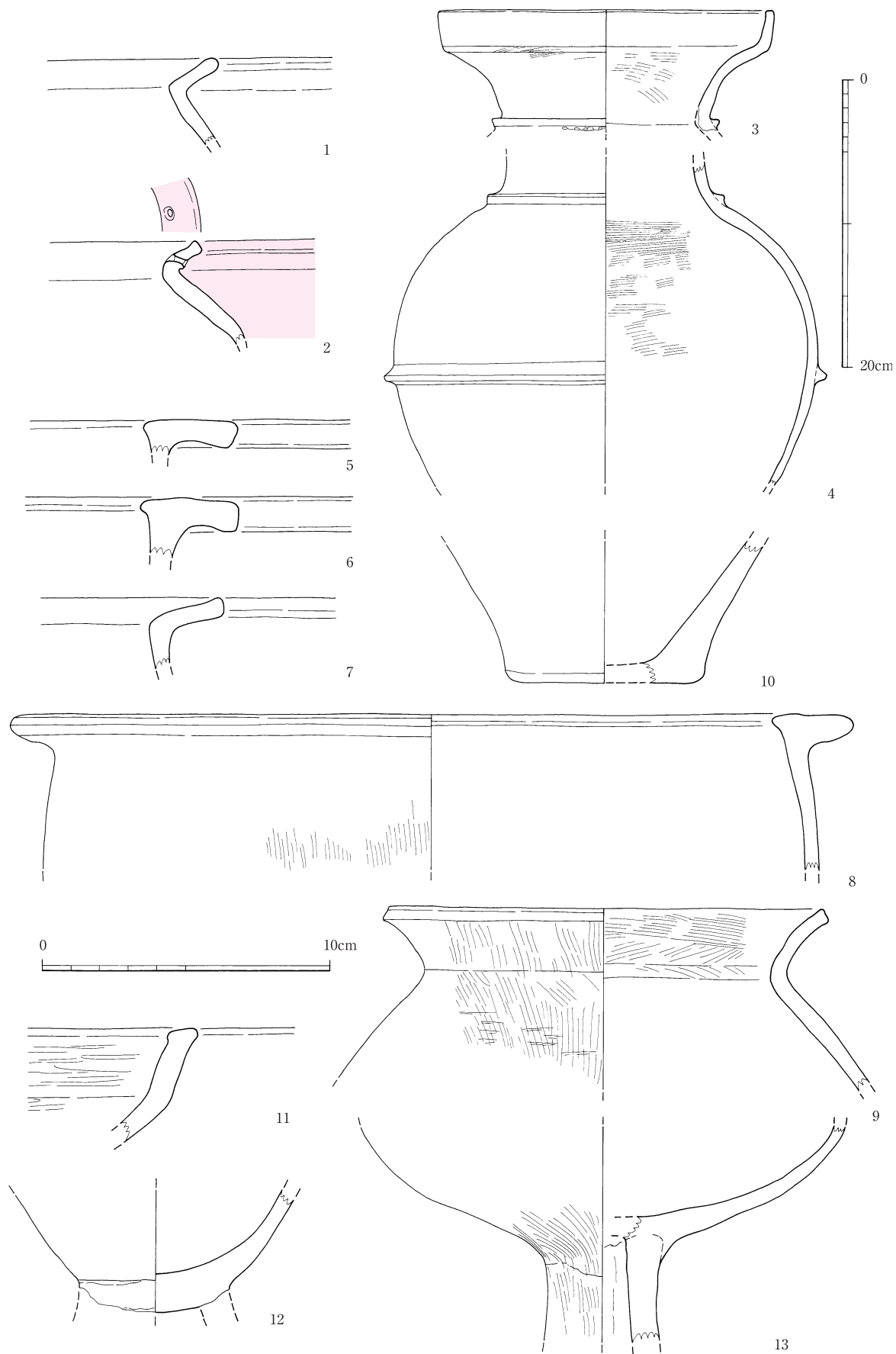
弥生土器（1～13） 1～4は壺。1・2は小型壺の口縁部破片である。1は薄い器壁を持ち、口縁部は水平からやや立ち上がって外上方に延びる。「く」の字形の前段階。2は全体的に摩滅するが、口縁部内面から外面全体に丹塗りが残る。口縁部には焼成前に内面から開けられた穿孔がある。3は複合口縁壺の口頸部。復元口径23.3cm。頸基部に、直下に刻み目を持つ断面三角形の突帯が1条廻る。頸部は短く口縁部が直立する。4は複合口縁壺の頸～体部。頸基部と体部中位にそれぞれ断面三角形の突帯が1条廻る。体部の内面上半にハケメを残すが、外面は摩滅する。5～10は甕。5～9は口縁部である。5は逆「L」字状の口縁部。6も逆「L」字状で、端部内側が突出する。7は口縁部が逆「L」字からわずかに立ち上がる。8は復元口径29.4cm。口縁部はほぼ水平で、端部内側が突出するいわゆる鋤先口縁。9は復元口径15.6cm。内傾する体部から口縁部は「く」の字形を呈して外反する。端部は面取りされる。体部内面はナデ、外面の全体と口縁部内面はハケメで整えられる。10は底部。復元底径は6.4cm。薄い平底である。11は高坏の口縁部破片。坏部は屈曲し、口縁部は短くわずかに外反する。端部上面は平らに整えられる。内面ミガキ、外面は摩滅する。12は高坏の坏部。深い坏部で、底部外面には脚部との擬口縁が露出している。13は高坏の坏部～脚部上位。残存する坏部の最大径は17cmを測る。坏・脚部の接合痕が観察でき、接合部から脚部の外面はハケメで整えられる。

土師器（14～17） 14～16は古式土師器。14は壺。復元口径21.2cm、体部最大径27.0cm、残存高39.0cm。倒卵形の体部で、口縁部は基部から大きく外反する。端部は面が作られて凹む。底部は欠損するが丸底になる。体部の調整は内面タテハケ、外面は斜め方向のタタキと頸部近くのみ横方向のタタキが施される。口縁部は内面ヨコハケ、外面は斜め～縦方向のハケメで、端部に近い箇所には細い沈線状の筋が4～5条ほど廻る。15と16は5号溝北岸直上から出土した。15も壺。口径18.0cm、体部最大径27.4cm。口縁部はわずかに外反し、端部は面取りする。体部内面は横方向のケズリ、体部外面はハケメのちナデ、口縁部は内外面ヨコナデで仕上がる。16は甕。復元口径24.0cm。倒卵形の体部で、口縁部は短くやや外反する。端部は面取りされわずかに凹む。体部内面はハケメ、体部外面は中位～上位にタタキ痕、下半と頸部近くにハケメを残す。口縁部は内外面とも摩滅する。17は甕の把手。

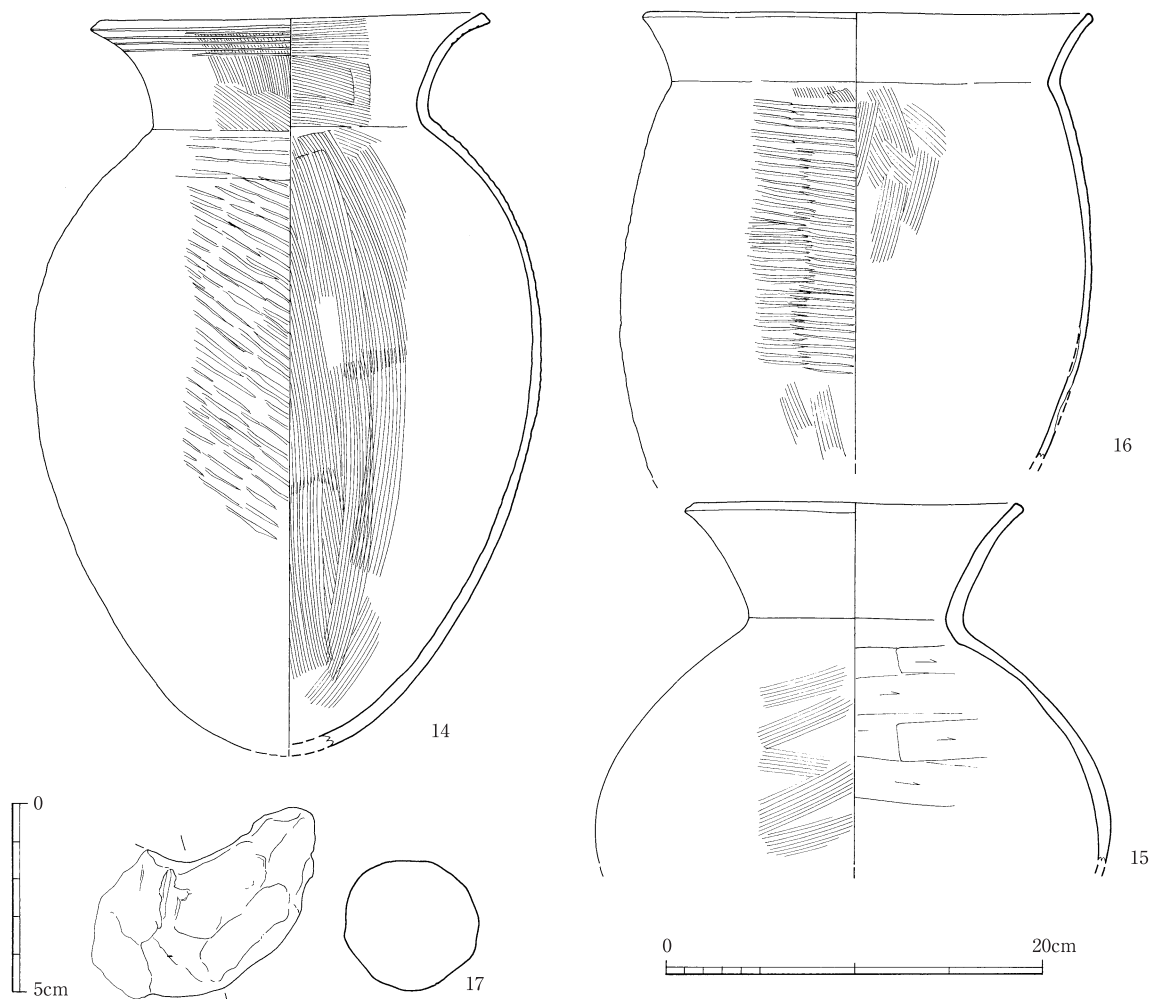
以上の出土土器はその属する時期にばらつきが見られるが、概ね弥生時代中期中葉～古墳時代前期前半の物である。なかでも15・16の古式土師器の出土状況から、5号溝は古墳時代前期前半に属すると考える。

6・7・8号溝（第68図、図版29）

調査区の中央やや東で3条並んで検出した。いずれも5号溝の埋土を切り込む北東－南西方向の小溝で、西から6・7・8号溝とした。6号溝は残存する長さ4mで北東側は旧河川で失われる。最大幅20cm、深さは概ね10cmである。7号溝は残存長2.4mで、同じく北東側は旧河川で失われる。最大幅14cm、深さは概ね10cm以下である。8号溝は全長約1.4m、幅約11cm、深さ約10cm。遺物は6号溝から弥生土器もしくは土師器の小片3点が出土したが図化に耐えない。7・8号溝からは遺物は出土していない。



第66図 5号溝出土土器実測図その① (3・4は1/4、他は1/2)



第67図 5号溝出土土器実測図その② (17は1/2、他は1/4)

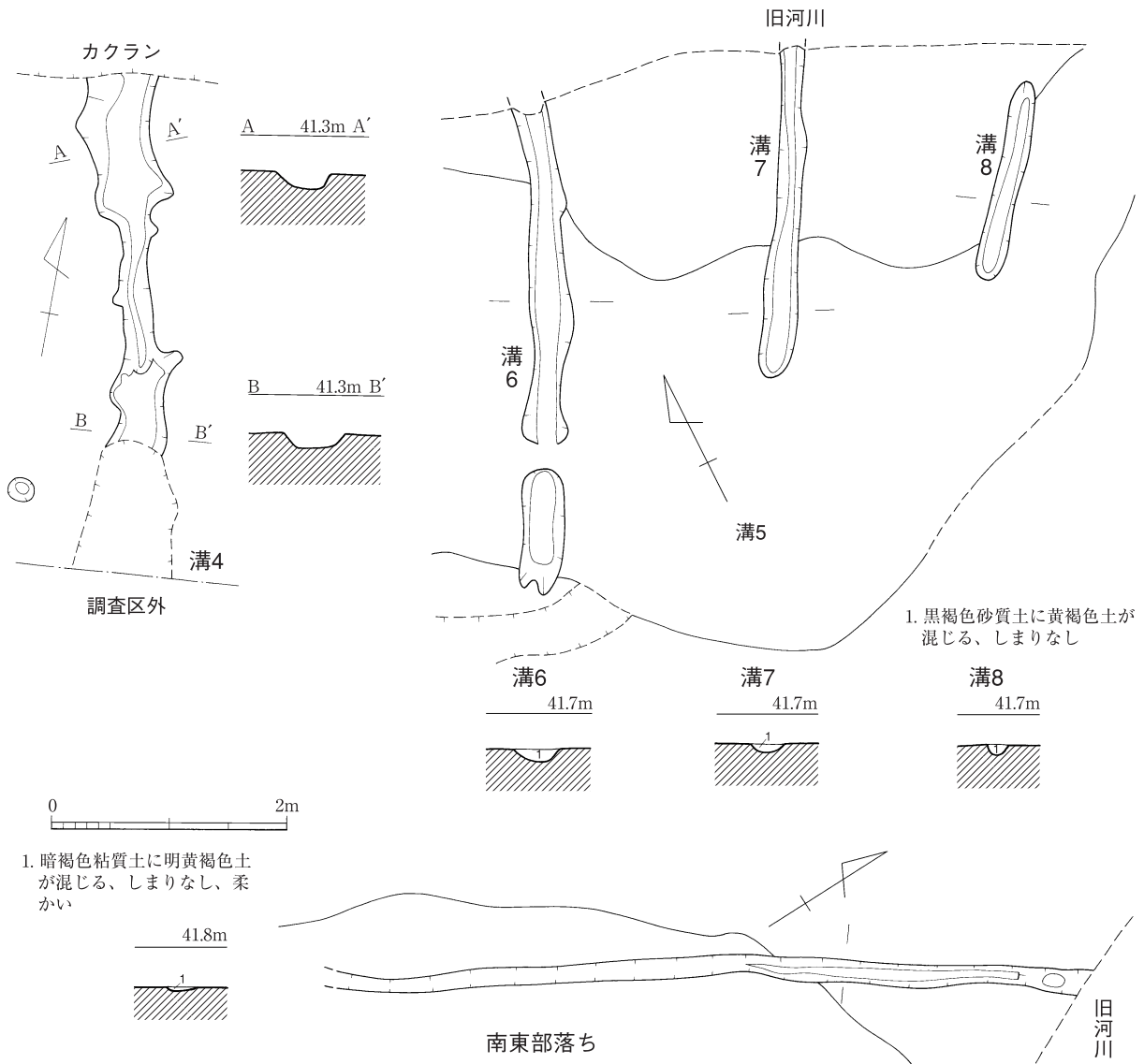
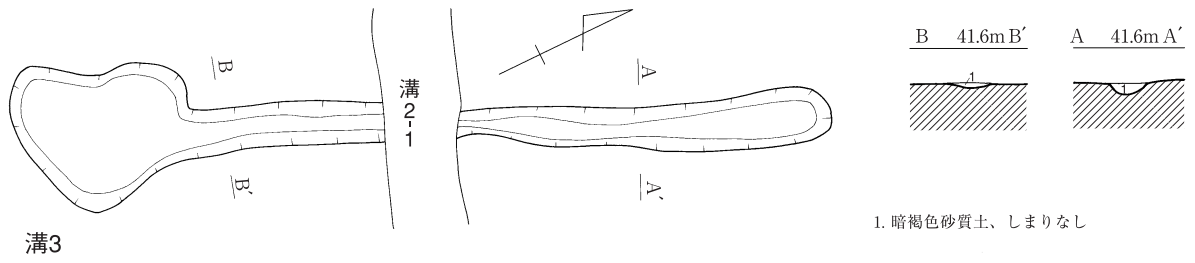
9号溝 (第68図)

調査区南西部で検出した。南東部落ちの埋土を切り込む。6～8号溝と同じく北東-南西方向に走る小溝である。北東側は旧河川によって失われ、残存長は約3m。南東部落ちの埋土上に延長する溝の痕跡がわずかに観察でき、その部分を含むと6.4mを測る。残りの良い箇所では幅20cm、深さは2・3cm程である。遺物は出土していない。南東部落ちの埋土上層から13世紀前半の土師質土器が出土しており、それ以降の時期に属する。

第2項 その他の遺構

南東部落ち (第69図、図版30)

調査区の南東部で埋土に遺物を多く含む落ち込みを検出した。確認できた範囲は南北約8.4m、東西は約8mで、さらに東側に広がるが旧河川によって消失している。南側半分が仮設道路予定地に入るため先に調査を終える必要があり、落ち全体を半裁するような形で南側の調査を進め、引き渡し後に北側半分の掘削を行った。埋土下層に砂礫を多く含むことから流路の一部であったと考えられる。埋土上層から13世紀前半の土師質土器が1点出土しているが、下層は弥生時代中

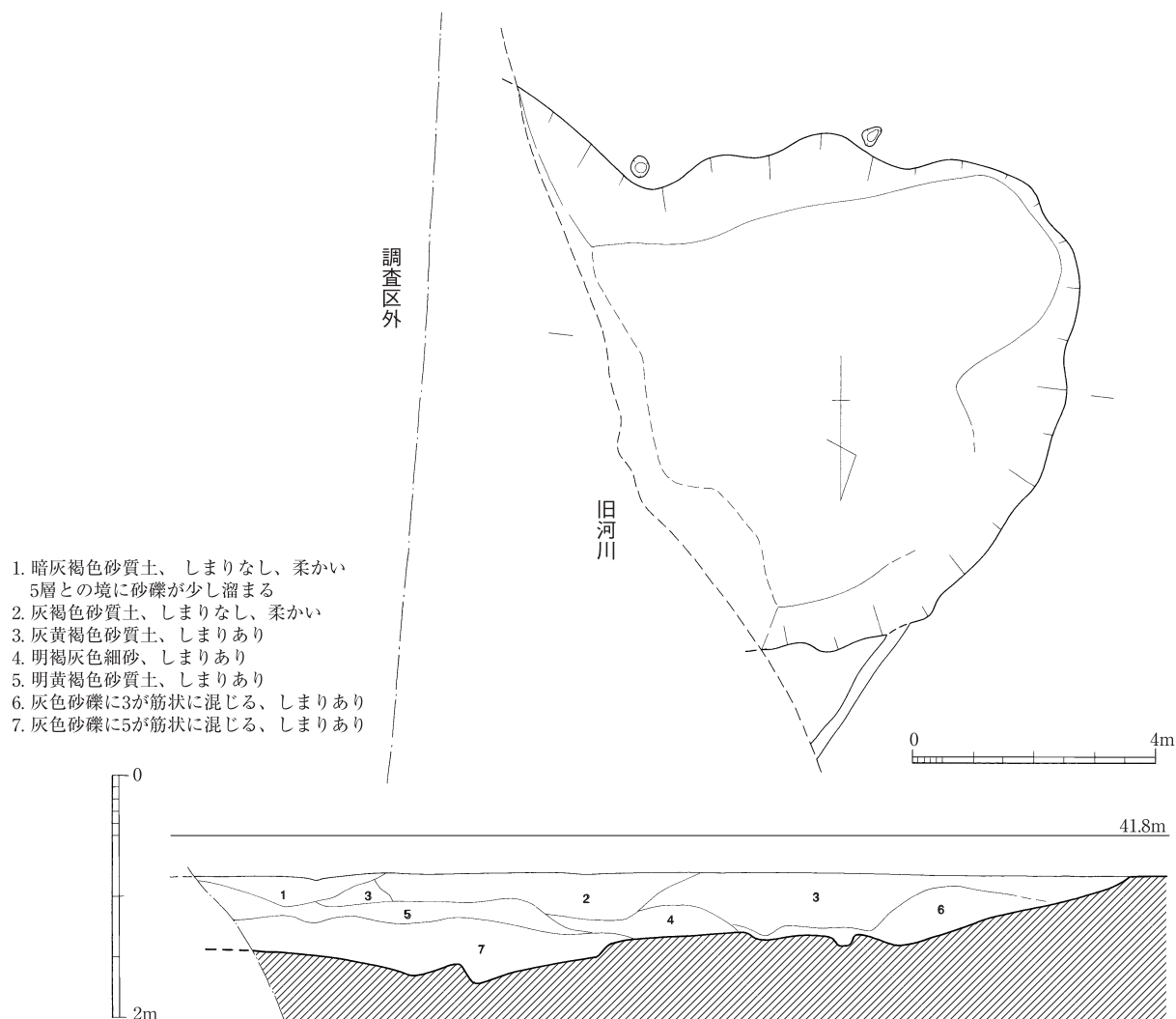


第68図 3・4・6～9号溝実測図 (1/60)

期の遺物を多く伴う。

出土土器 (第70・71図)

弥生土器 (18～51) いずれも埋土下層から出土した。18～41は甕の口縁部で、32以外は径の復元が困難な破片である。18は断面三角形に近い口縁を持つ。19～28は逆「L」字状を呈する口縁部で、端部内側の突出があまり目立たない。このうち22は外面の口縁部下に1条の突帯を持つ。

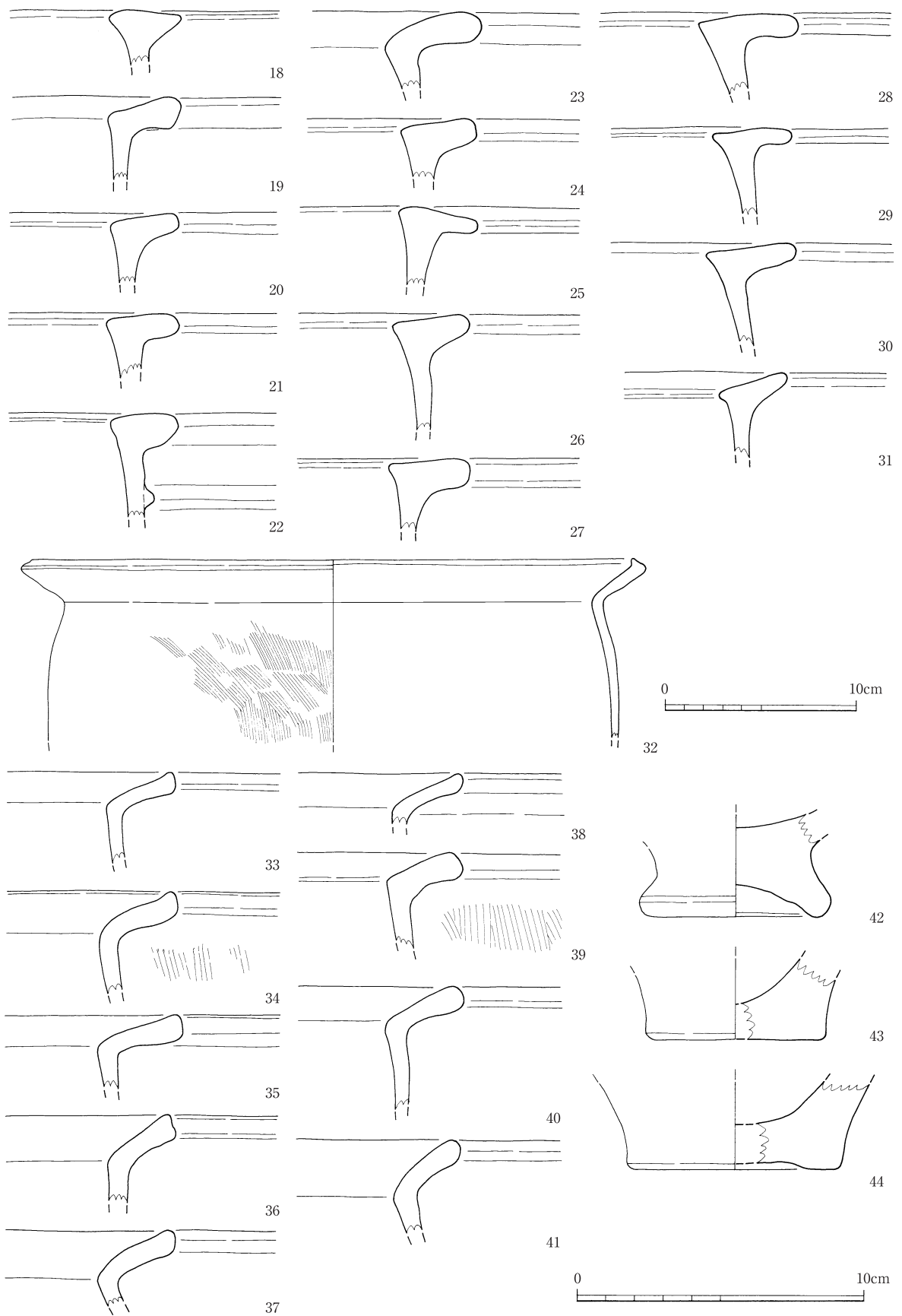


第69図 南東部落ち実測図 (1/120、土層断面図は1/60)

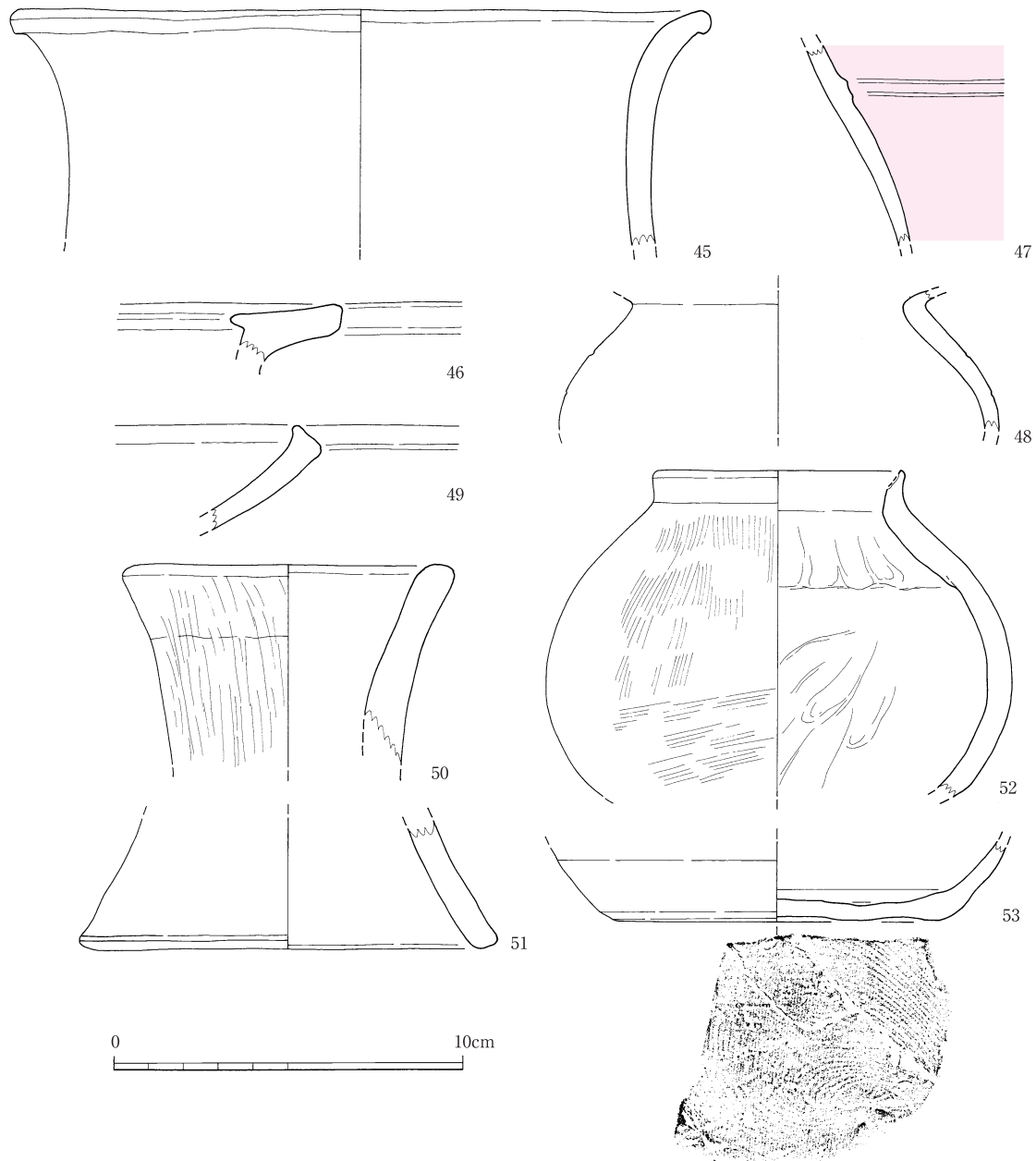
29～31は口縁端部内側が突出して鋤先状を呈するもの。31は口縁部が内傾する。32は復元口径32.6cm。口縁端部内側が上に跳ね上がるように作られる。体部外面にハケメが残る。33～41は口縁部が「く」の字型になる前段階に位置づけられる。42～44は甕の底部。42は底径6.7cm。厚い脚台状を呈し、上げ底となる。裾は大きく開く。43は復元底径6.4cm。やや厚みのある平底である。44は底径7.6cm。わずかに上げ底である。45～48は壺。45は素口縁壺の頸～口縁部で、復元口径20.2cm。頸部はほぼ直立して立ち上がり、口縁部は丸く外反して端部は丸く収まる。46は鋤先口縁壺の口縁部破片。47は肩部の破片。外面に丹塗りが残り、1条の突帯が付く。48は無頸壺の肩部破片。49は高坏の口縁部。端部はごく短く直立する。内面の一部に丹塗りの痕跡がある。本来は内外面の全体に丹塗りが施されていたと考えられる。50・51は器台。50は口径9.6cm。外面にハケメを残す。51は裾部で底径12cm。全体的に摩滅しており、調整は不明である。

以上の弥生土器は中期初頭～中期末もしくは後期初頭に属する。

土師器 (52) 52は小型直口壺。埋土上層から出土した。復元口径7.3cm。口縁部が低く直立する。



第70図 南東部落ち出土土器実測図その① (32は1/3、他は1/2)



第71図 南東部落ち出土土器実測図その② (1/2)

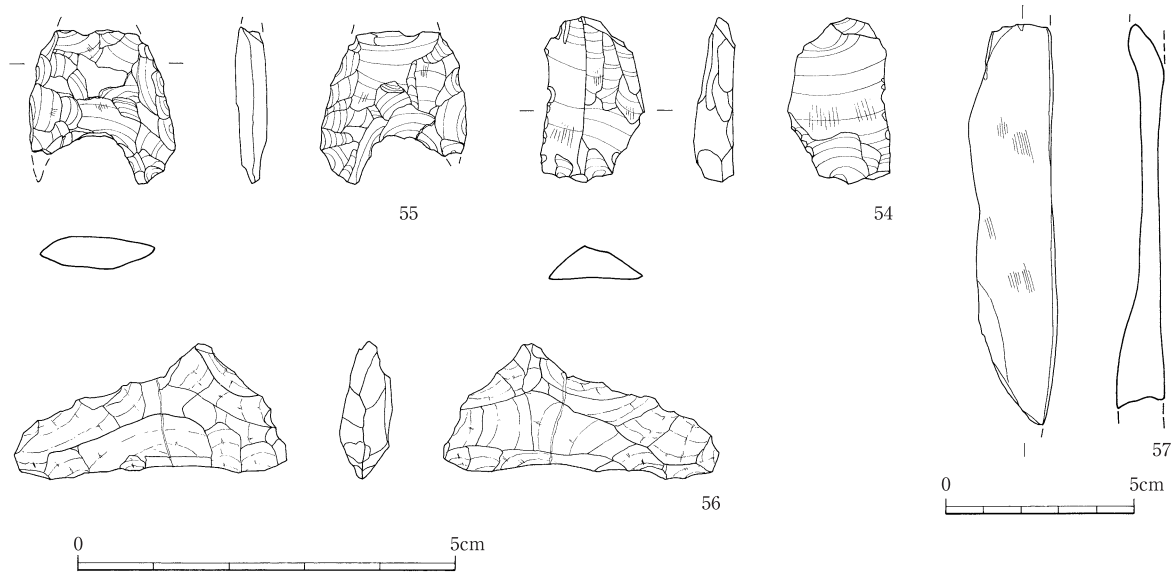
体部内面の上位に粘土継ぎ目が残る。体部外面ハケメ、口縁部と内面はナデで仕上がる。古墳時代後期のもの。

土師質土器 (53) 53も埋土上層から出土した土師質土器の坏。底径9.5cm。残存高は2.3cm。体部内外面回転ナデ、底部内面ナデ、底部外面は糸切り痕を残す。13世紀前半。

第3項 その他の遺物

石器・石製品 (第72図、図版31)

54・55・57は5号溝、56は南東部落ちから出土した。54は二次加工が施された剥片。縦長剥片



第72図 石器・石製品実測図（57は1/2、他は1/1）

表2 西隈上中川原遺跡出土石器・石製品一覧表

挿図番号	種類	出土地点	長 (cm)	幅・径 (cm)	厚・高 (cm)	重量 (g)	残存	石材	備考
第72図-54	剥片	溝5	2.2	1.4	0.55	1.33	完形	黒曜石	微細剥離
第72図-55	石鏃	溝5	(2.05)	1.95	0.45	1.67	一部欠損	黒曜石	凹基式、凹長0.65cm
第72図-56	石匙	南東部落ち	1.7	3.6	0.7	2.81	完形	安山岩	目が細かい
第72図-57	砥石	溝5	10.6	2.4	1.25	27.96	一部欠損	粘板岩	手持ち砥石

の側縁を使用したもので、刃部に両面から微細剥離が行われる。黒曜石製。55は石鏃。凹基式で先端と脚部の一方を欠く。黒曜石製。56は石匙。ほぼ完存すると思われるが、全体的に剥離が甘く風化が進む。安山岩製。57は手持ちタイプの砥石。よく使用されている。砥面にわずかに擦痕を残す。粘板岩製。

第3節 小結

今回の調査で検出した遺構で時期が特定できるものは5号溝、5号溝下の流路、南東部落ちである。5号溝は北岸が南側よりも傾斜が緩く造られ、その北岸直上から残存状況が良好な古式土師器が出土した。このことから5号溝の北側に古墳時代前期の集落遺跡が広がる可能性が高い。さらに5号溝は北向きから東向きに緩やかに弧を描いており、環濠になることも考えられる。但し調査区北東部が旧河川で消失していたことから、この旧河川により大きく破壊を受けている恐れがある。

5号溝下の流路、南東部落ち下層の出土遺物は概ね弥生時代中期～後期と、5号溝を遡る時期のものである。現在のところそれらの遺物を産出した遺跡は分からない。今後の調査・研究成果に期待したい。

第6章 おわりに

以上、福岡県教育委員会が平成15～16年度に発掘調査を行った国道210号線浮羽バイパス建設工事関係の発掘調査成果について述べてきた。玉田遺跡では主に弥生時代前期後半～中期初頭、後期中葉～古墳時代初頭、古代～中世の土器資料が包含層から出土し、調査地東側に隣接する台地上に当該期の集落が広がっていることがわかった。船越高原A遺跡6次調査では、弥生時代中期後半～末の集落跡と古墳時代後期の集落跡を検出し、隣接調査区から続く集落の広がりを確認できたとともに、住居跡や土坑などの遺構群が多く見つかり、この地域における弥生～古墳時代の貴重な資料となった。西隈上中川原遺跡では、古墳時代前後に比定される多くの溝を検出した。周囲ではこれまで埋蔵文化財の分布状況がほとんど分からなかったが、本遺跡が調査されたことにより筑後川と隈上川に挟まれた地域における埋蔵文化財の事例を追加でき、今後のこの地域における地域史研究を進める上での貴重な資料となった。

浮羽バイパス関連の埋蔵文化財の調査はこれまで福岡県教育委員会が主体となって昭和48年より30余年の長きにわたり継続されてきた。調査された遺跡は15以上、発行された報告書も25集を数え、旧浮羽郡域における先史～歴史時代の貴重な資料が豊富に蓄積されてきた。

さて、平成15年度末に田主丸町が久留米市と合併したが、合併後の久留米市教育委員会と福岡県教育委員会との協議により、合併以降の旧田主丸町内の浮羽バイパス関連の埋蔵文化財は久留米市教育委員会が主体となって行うことがきめられた。旧吉井町内の路線はほぼ全線が開通しており、これに先立つ埋蔵文化財の調査も平成14年度まで続いた堂畑遺跡の調査を最後としてほぼ全て終了している。また、旧浮羽町内のバイパス路線予定地内の包蔵地の発掘調査も今回報告の西隈上中川原遺跡の発掘調査をもってほぼ全てが終了した。よって、福岡県教育委員会による浮羽バイパス関連の発掘調査はこの報告書の発行をもってほぼ全て終了したことになる。今後は、一連の調査によって得られた貴重な資料を積極的に活用し、埋蔵文化財に対する普及啓発を促進することにより、調査主体としての責務を果たしたい。

最後に、のべ30余年にわたる埋蔵文化財の発掘調査を滞りなく遂行することができたのも、福岡国道事務所・関連市町の工事関係者の皆様、関連・近隣市町の文化財担当者の皆様、浮羽地域の文化財保護指導委員の皆様、また雪の降りしきる中や炎天下といった過酷な条件のもと、熱心に発掘作業に従事していただいた発掘作業員の皆様ほか、関係者の皆様方の惜しみないご協力があったこそである。末筆ながら、この場を借りて感謝申し上げます。

圖 版



1 調査区遠景
(東から)



2 調査区遠景
(南から)



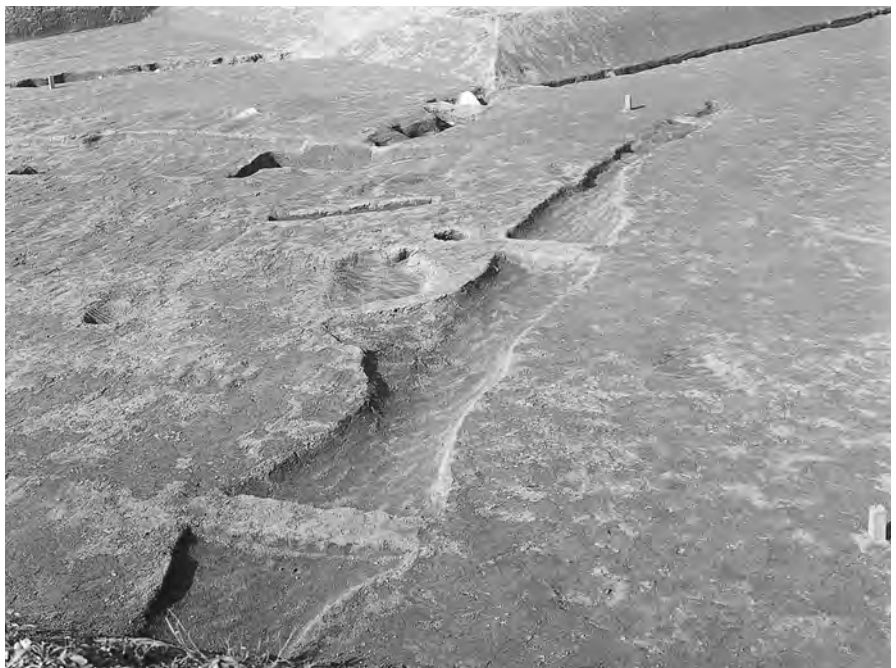
1 西区空中写真
(上が西)



2 東区空中写真
(上が西)



1 東区全景 (西から)



2 1-1・1-2号溝
(南東から)



3 東区2-1・2-2号溝
(西から)



1 3号溝 (南西から)



2 4号溝 (北西から)



3 西区2-1・5号溝
(西から)



1 5号溝北岸遺物(15)出土
状況①(東から)



2 5号溝北岸遺物(16)出土
状況②(東から)



3 6・7・8号溝(西から)



1 南東部落ち南半部
(東から)



2 南東部落ち北半部
(北東から)



3 南東部落ち土層断面
(北から)



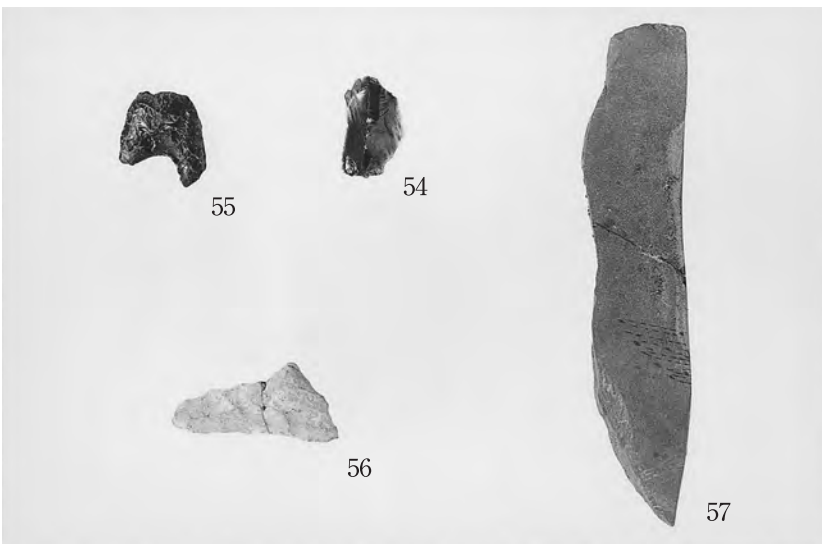
14



15



16

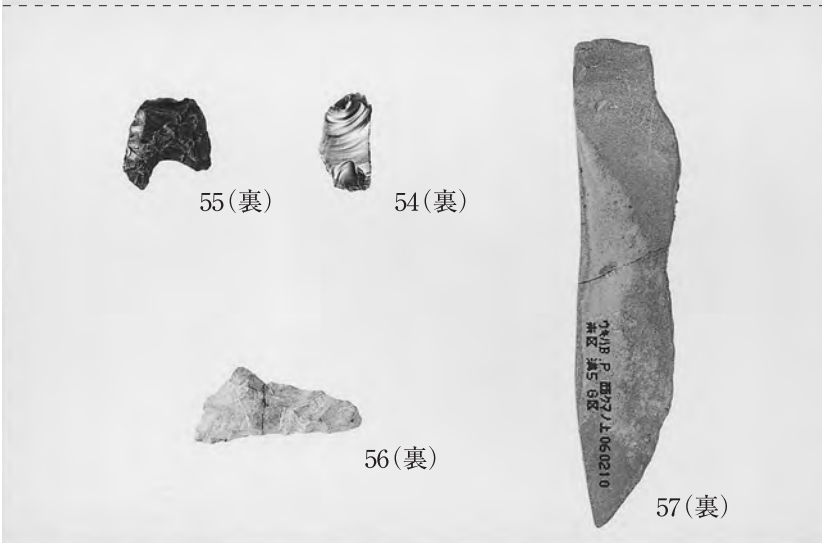


55

54

56

57



55(裏)

54(裏)

56(裏)

57(裏)



両筑平野南部
(東から)



両筑平野南部
(西から)

報告書抄録

ふりがな	たまだいせき・ふなこしたかはらAいせきⅣ・にしくまうえなかごうらいせき								
書名	玉田遺跡・船越高原A遺跡Ⅳ・西隈上中川原遺跡								
副書名	福岡県久留米市田主丸町田主丸豊城所在遺跡の調査								
巻次									
シリーズ名	一般国道210号浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告								
シリーズ番号	第25集								
編著者名	小澤 佳憲・宮地 聡一郎・一瀬 智								
編集機関	福岡県教育委員会								
所在地	〒812-8575 福岡県福岡市博多区東公園7-7								
発行年月日	平成20（2008）年3月31日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯(世) ° . ' "	東経(世) ° . ' "	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡 番号						
たまだいせき 玉田遺跡	ふくおかけんくろめしたぬしまるまちおおあざときわ 福岡県久留米市田主丸町大字常盤 992-2・993-2・995-3		402036	640440	33° 20' 59"	30° 41' 55"	20030415 20030724	計 1600m ²	国道210号 浮羽 バイパス 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	旧河川 溝	弥生時代・古墳時代 ・古代	溝1条 旧河川		弥生土器・土師器・ 須恵器・陶磁器		瀬戸系灰釉陶器片が出土		
	要 約	台地と微高地に挟まれた旧河川内の包含層から弥生時代～古代の遺物が出土した。 また、台地直下から溝を1条検出した。							
ふなこしたかはら 船越高原 Aいせき A遺跡6次	ふくおかけんくろめしたぬしまるまちおおあざふなこし 福岡県久留米市田主丸町大字船越 43-1		402036	640409	33° 20' 52"	130° 43' 06"	20040629 20041005	計 620m ²	国道210号 浮羽 バイパス 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	集落 溝	弥生時代・古墳時代 ・中世	竪穴住居跡9 土坑12・溝7		弥生土器・土師器・ 須恵器・陶磁器				
	要 約	弥生時代中期後半～末、古墳時代後期の集落跡を検出した。 また、中世の溝状遺構を検出した。							
にしくまうえ 西隈上 なかごうらいせき 中川原遺跡	ふくおかけんうきはしうきはまちにしくまうえ 福岡県うきは市浮羽町西隈上 478-2・478-3・479・480-1・480-3・480-4		402257	620165	33° 20' 21"	130° 47' 41"	20041118 20050217	計 3800m ²	国道210号 浮羽 バイパス 建設
	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
	溝・自然地 形(落ち)	弥生時代・古墳時代 ・古代	溝9条 自然地形		弥生土器・土師器・ 中世土師質土器				
	要 約	旧河川から弥生時代中期後半～後期初頭の包含層を検出した。 また、古墳時代前期の溝状遺構を検出した。							

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 19	登録番号 6

浮羽バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第25集

玉田遺跡
船越高原 A 遺跡Ⅳ
西隈上中川原遺跡

平成20年 3 月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚 5 丁目13-40